

うになつた。リュールは小さくはあるが大變柔らかな低いコントラアルトを持つてゐて以前の生活の風邪や飲酒や荒淫は何等その跡を止めてゐなかつた。殊に肝心なことは——偶然の稀首な神の賜物であるが——彼女は大變正確に綺麗に、そして何時も獨特に唱和をする本能的な生得の才能を持つてゐた。彼女の昵近の果はリュールが公爵にではなく、反對に公爵がリュールに何か好きな民謡を歌つて呉れるやうに頼むやうな時が來た。彼女は民謡を澤山知つてゐるのであつた。そこで彼女は肘を卓の上に置き、田舎婆のやうに頭を掌にもたして、注意深い丁寧な靜かな伴奏の下に歌ひ始めた。

君と別れて夜のつれづれさ、

これも誰が罪、おのが罪、

飲だくれなどと名をつけて

君怒らしたそのむくひ。

『その酬ひ』と公爵は彼女と一緒に最後の言葉を繰返して、片方に傾げた縮髪の頭を陰氣に振り、二人はギターの絃と肉聲の微かな顫律が段々と消え、何時音が止んで何時沈黙に入つたか氣のつかないほどに、歌を終らうと努めた。

その代り有名なグルジャ詩人ルスタヴェルリの詩集『豹の皮』の方では公爵ニヂェラッゼはすつかり味噌をつけた。詩の情趣は彼にとつてそれが母國語で歌はれてゐると云ふことにあつた。しかし彼がその喉音に富んださとかぞとかの多い章句を朗吟しかゝると、リュールは最初は抑へ切れない笑のため長い間身體を震はしてゐたが、仕舞ひには部屋中を跳廻り、腹を抱へて長く哄笑した。するとニヂェラッゼは腹を立て、崇拜する詩人の詩集をぱつたり閉ぢて、リュールを驢馬とか駱駝とか云つて罵つた。しかし二人は値ぐ仲直りした。

時にニヂェラッゼは山羊のやうな惡戲な陽氣の發作が起る場合があつた。その時彼はリュールを抱擁したいやうな様子をして、誇張した熱烈な眼を彼女に向け、思ひこがれた芝居めいた囁きで云つた。

『わが魂よ、神の國の最も美しき薔薇よ。君の唇には蜜と乳とがある、君の息は焼肉の香よりも芳ばしい。君の唇の蓋から涅槃ニルヅナの祝福を飲まして呉れ、あゝ汝、最も美しきチフリスの案山子よ』

彼女は笑つたり腹を立てたり彼の手を打つたりして、リホーニンに告げると云つて囁し

た。

『馬鹿な』と公爵は手を振つた『リホーニンとは何人だ。リホーニンは吾人の友達、吾人の兄弟、親友である。しかし果して彼が戀愛の何たるかを知つてゐるか。果して北國人の君達が戀愛を解してゐるか。吾々グルジャ人こそ戀愛のため創造されたものだ。見給へ、リューバさん。直ぐ戀愛とは何かを見せて上げやう』

彼は拳を握りしめ、身體を前に曲げ、野獸のやうに眼を見開き、齒切りを咬み、獅子のやうな聲で吼えたので、リューブカは笑談と知りつゝ子供らしい恐怖に襲はれて、他の部屋に飛んで逃げた。

しかし一言しなければならぬのは、この若者は浮氣な一時の情話にかけては仲々發展する方であつたが、しかし友人の妻に對しては、グルジャ女の母の乳に育まれた堅固な道徳的抑制、神聖な習慣が存在してゐた。そして彼は確かに次のやうなことを理解してゐたに違ひない——この東邦の人達は見かけの無邪氣にかゝはらず、或はそのためかも知れないが、何時でも繊細な精神的直覺力を持つてゐたので——彼は例令一瞬間でもリューブカを自分の戀人とすれば、今迄慣れて來たこの優しい靜かな宵々の家庭的團樂を永久に失ふ

と云ふことを理解してゐた。ところで大學中で誰にでも親しく君で話しかける彼も他人の街、今迄彼にとつて没交渉な土地では自分を大變寂寥に感じてゐたのであつた。

この課業はソロヴィヨフに一番の満足と與へた。この大きな強健なこせくしなない男は我知らず氣の附かない間に、極めて粗笨な表皮の下、極めてごつ／＼した歪なまじけた中心にも屢潜んでゐることのある、女性と云ふものゝ隠れた捉へ難い繊細な蠱惑に支配されるやうになつた。女生徒の方が權威を持ち、先生は謹聽してゐた。リューブカは原始的な、しかしその代りには潑刺たる深刻な獨特な心の天性によつて他人の法式を聽かうとせず、自身の特殊な變な流儀を工夫せうとする傾きがあつた。例へば多くの子供と同じく讀むよりは書く方を早く覺えた。彼女は生得うまれつきおとなしい従順な娘であるから彼女自身がさうするのはなく、彼女の知識のある特殊な性質が例へば讀方に際して母音に子音をくつ／＼けるとかその反對とかをどうしてもしようとしなかつたのである。綴方でも同じ結果が現はれた。横線に沿うての習字では彼女は一般生徒の例に反して大なる嗜好を感じてゐた。書くときは紙の上に低く身を屈め、重苦く息を吐き、一心のあまり恰度假想の塵でも吹掃ふやうに紙の上に息を吹きかけ、唇を甜めすり、舌で内側から或は右或は左の頬を突張つた。ソロヴ

「ヨフは別に小言も云はず、彼女の天性がつけた途に従つて進んだ。猶一言して置かねばならぬのは、この一月半程の間に彼の巨大な伸々した力強い心はこの偶然の一時の弱い人物に對してすつかり結びついて仕舞つたことである。それは善良な象が脆い儂ない生毛の雛鳥に對する、注意深い滑稽な寛量な多少吃驚した愛と注意深い慈撫であつた。」

兩人にとつて讀書は旨い御馳走であつたが、またしても作品の選擇の手引となつたのはリユーブカの嗜好で、ソロヴィヨフはその傾向に従つて進むばかりであつた。例へばリユーブカにはドンキホーテが解らず退屈したが、到頭それを止しにしてロビンソンになると喜んで傾聴し、殊に親類との邂逅の場では心ゆくばかり泣いた。彼女にはディケンスが気に入つて、その淡いユーモアは極めて容早に握むことが出来たが、英國の日常生活の有様は彼女には没交渉で不可解であつた。彼等は一度ならずチェホフを讀んだが、リユーブカは何の苦もなく樂々と彼の描寫の美、彼の微笑と哀愁を汲取つた。少年小説は見る眼も滑稽でありまた喜ばしいほど彼女を感動させた。ある時ソロヴィヨフは彼女にチェホフの『發作』を讀んでやつた。それには人も知る通り學生が始めて娼家に足を踏入れ、その翌日發作のやうに鋭い精神的苦惱と社會一般の罪の意識との痙攣に跳くのである。この小説が彼女にこ

れほど大きな印象を興へやうとはソロヴィヨフ自身も豫想しなかつた。彼女は泣いて罵り手を叩き、絶えず叫んだ。

『ああ、何處からこんなことを取つて來たんでせう、こんなに上手に。本統に彼方の家と寸分違ひませんわ』

ある時彼は『プレヴォ著マノン・レスコと騎士ド・グリユ物語』と云ふ表題の書物を持つて來た。尤もこの顯著な書物をソロヴィヨフ自身始めて讀むのであつた。然し矢張りリユーブカの方が遙かに深刻に鋭敏にそれを評價した。主題のないこと、構想の幼稚、餘りに感傷的なこと、文體の陳腐——こんなことが一つになつてソロヴィヨフを冷淡にしたが、リユーブカは耳ばかりではなく、恰も眼やまた總てのものに對して無邪氣に開かれた心をもつてこの奇怪な不朽の小説の、喜ばしい、悲しい、感動すべき、また輕薄な詳細を受け入れた。『結婚式を擧げる私達の計畫はサン・デニが忘れて仕舞つた——ソロヴィヨフは縮髪の金色をした、燈蓋で照らされた頭を書物の上に低く垂れて讀んだ——私達は教會の法律を犯しそのことも考へずに夫婦になつた』

『どうしたんですつて。野合ですの、僧さんもなしに。さうですか』とリユーブカは自分

の造花から手を離して恟々と訊ねた。

『勿論。それが何です。自由結婚と云ふまでのことです。例へば君とリホーニン君とのやうなものです』

『わたし。それはまるで別問題ですわ。あの人が私を何處から引取つて呉れたかはあなたも御存じです。それにこの女は純潔な上品な令嬢です。こんなことをするのは男の側から云つて恥づべきことです。屹度、ソロヴィヨフさん、男は後で女を棄てるに違ひありませんよ。まあ可哀さうな娘さんね。さあさあその先を讀んで頂戴な』

しかし數頁過ぎるとリユーブカの同情哀憐はマノンから瞞された騎士の方へ移つて行つた。

『しかしロロの竊と來て竊と歸るのは私を當惑させた。私はまた私達の分に過ぎたマノンの些かの買物を思出した。これらはみな新らしい戀人の氣前が仄めいてゐた。しかし、否、否——と私は繰返した——マノンが私に不貞をするなどは不可能なことだ。私が唯彼女のためにのみ生きてゐることは彼女も知つてゐる、私が彼女を尊敬してゐることは彼女のよく知るところだ』

『まあ馬鹿、馬鹿』とリユーブカは叫んだ『女がこのお金持のお妾同様だと云ふことは直ぐ解るぢやないの。まあ何と云ふ賣女でせう』

小説が進むにつれてリユーブカはいよいよ活々と熱心にその中に關與した。マノンが戀人と兄弟の助けによつて自分の順繰の旦那を瞞まし、ド・グリエが魔窟でいかさま骨牌をやるのには何の反對もなかつたが、彼女の新らしい不義はその度にリユーブカを憤怒に導き、騎士の苦惱は彼女の涙を誘つた。ある時彼女は訊ねた。

『ソロヴィヨフさん、この作者は何ですの』

『或る佛蘭西の僧侶です』

『露西亞のぢやないんですの』

『佛蘭西ですよ。御覽、町も佛蘭西なら、人の名前も佛蘭西でせう』

『僧侶さんだと仰有いましたわね。この人はこんなことを何處から聞いたんでせう』

『兎に角知つてゐたんです。彼も最初は普通の俗人で貴族だつたのですが、後に僧侶になつたんです。彼はこの世で種々なことを見ました。その後また還俗しました。兎に角この書物の冒頭の處に彼のことを種々と詳しく書いてありますよ』

彼は僧侶プレヴォの傳記を読んでやつた。リュープカは熱心にそれを聞いてゐて、意味あり氣に首を振り、處々解らぬ個所を訊ひ返し、讀んで仕舞つた時考に沈んで云つた。

『まあそんな人ですの。本統によく書いてゐますわね。でも女が何故こんな恥知らずなんでせう。男が一生變らずにあんなに愛してゐるのに、女は絶えず不義ばかりしてゐるなんて』

『仕方がありませんね、リュープカ。女だつて彼を愛してゐたんです。唯女は馬鹿な浮氣っぽい娘だつたんです。唯女には檻褸や自分の馬や寶石が欲しかつたに過ぎないんです』
リュープカは赫と顔を赧くし、強く握り拳を打合した。

『私ならこの恥知らずを粉に擦りつぶしてやるわ。これでも愛だと云へるんですか。若し男を愛するならその男のためには何でも嬉しいのでなければならぬ。男が牢屋に入れば一緒に牢屋に行く。男が泥棒になればその手助をする。男が乞食ならそれでも一緒にやる愛さへあれば何でもない、黒麵麩の殻かがなんです。あの恥知らず、恥知らず。私とその男とでも代つてゐたら、泣いたりする代りに丸一月も紫色になるほど打つてやる』

彼女は悠くりと小説の終まで聞いてゐることが出来ず、讀書を中止しなければならぬほど熱心な熱い涙を絶えず流し、最後の章の如きは四度に切つてやつと讀んで仕舞ふこと

が出来た程であつた。そして讀手自身も讀みながら一度ならず涙を流した。

牢獄に於ける戀人等の不幸、マノンの亞米利加追放、自ら進んでその後を追つたド・グリュエの献身などはリュープカの想像を支配し、彼女の心に感激を與へ、彼女は最早自分の註解を挿むことも忘れて仕舞つた。曠野に於けるマノンの靜かな美しい死の物語を聞きながら彼女は身動きもせず胸に手を押しつけて洋燈の光を眺め、涙は屢開いた眼から溢れては雨のやうに机上に降注いだ。しかし愛するマノンの死骸の側に二晝夜横はりその手や顔から唇を離さなかつた騎士ド・グリュエが到頭劍の折片で墓を堀り始めた時、リュープカはソロヴィヨフが驚いて水を取りに飛んで行つたほど烈しく慟哭した。しかし少し落着いてからでも彼女は猶長い間腫れぼつたい震へた唇で啜泣いて呟いてゐた。

『あゝ、何て不幸な生涯でせうね。何て苦い運命でせうね。男か女か、何方を可哀想に思つていゝのかも解りませんわ。本統に何時もかうなんでせうか、ソロヴィヨフさん、男と女がこの二人のやうにこんなに愛し合つたら神様が屹度お罰しになるんでせうかね。ねえあなた、何故さうでせう、何故でせう』

若しグルジャ人と人の好いソロヴィヨフがリューブカの知識と精神との一風變つた教育に際して浮世の學問なんてもものゝ棘々した點を避けた軟派の教育を施したとすれば、そしてまたリューブカはリホーニンに對する初戀の熱烈な無限の愛のために彼の術學を許した、しかも彼の悪口や打擲や重い犯罪を許すと同様に喜んで許したとすれば——その代り彼女にとつてシマノフスキの課業は眞剣な責苦、絶え間ない不斷の苦勞であつた。その上彼は故意と意地悪るづくのやうに、毎週の授業料を稼ぐ有らゆる教育家よりその課業にかけては遙か正確几帳面であつた。

抗言を許さない自分の意見の力、自信ある調子、演繹的な論法などで彼は哀れなりリューブカの意志を奪ひ、その心を麻痺させた。それは恰度時々大學生會や集會の際に彼が新入生の臆病な内氣な頭腦に勢力を持つてゐるのと同じであつた。彼は演說會での雄辯家であり、學生食堂設置に關する知名の一員だし、記念帖や石版印刷や講演出版などに關係し、よく學級長に選舉せられ、また最後に學生金庫にも大變重要な關係を持つてゐた。彼は大

學の講堂を後にして後、一黨派の首領、純な献身的な良心の無限の權威者となり、やがて自分の英雄的な悲惨な状態に全露西亞の注目を集めつゝ、何處かチュフロマ邊りで政治の舞臺から退き、やがて自分の過去を頼りにしながら着實な辯護士か代議士かそれとも黒土の良一塊と村會の地位とを伴つた結婚によつて自分の出世をはかると云つた風の人物の一人であつた。この手合は極まつて自分自身にも氣附かず、まして局外者の眼にはまるで觸れないで、用心深く軟化する、と云ふよりはむしろ段々腹が大きくなり足痛風か肝臓病にかゝるまでに變色するものである。その時彼等は大きな顔をして不平を云ひ、自分達は理解されない、自分達の時代は神聖な理想の時代だつたなど云ふ。それでゐて家庭では暴君で、時には高利貸をするのも珍らしくないのである。

彼が何を考へた處で皆明瞭で議論の餘地がないやうに、リューブカの知識と精神との教育の途も彼にとつては明瞭であつた。彼は先づ化學と物理の實驗でリューブカの興味を引かうと考へた。

『純な女の頭腦は驚歎する、その時俺は彼女の注意を支配する、そこで詰らぬこと手品のやうなことから移つて彼女を全世界の知識の中心に導く、其處には迷信も偏見もなく、唯

自然の實驗のための廣い領分があるのみだ』

三九八

然し彼は自分の課業に於てはまるで無秩序であつた。彼は手當り次第のものを引張つて来てリューブカを驚かした。ある時彼は大きな手製の鼠花火——風琴の形に曲げ横に固く紐で縛つた、火薬の入つた細長い紙の管を持つて来た。彼がそれに火をつけると、鼠花火はしゆくゝと音を立て、長い間食堂や寢室を跳廻り、部屋中を煙とくさい臭ひ一杯にしたリューブカは殆ど吃驚もせず、これは單に火花だ、前に見たことがあるからこんなことには驚かないと云つた。兎も角窓を開ける許を乞うた。その後また彼は大きな玻璃器と鉛板と樹脂と老鎗穀さんこんくを持つて来て、それからライデン電池を作つた。程度は弱かつたが兎に角放電した。

『まあ悪魔だわ』とリューブカは小指にびりつと感じて叫んだ。

それからまた藥壘、注水器の護謨の尖端、水の一杯入つた金鹽、ジャムを入れる壘などの助けを藉りて砂礫交りの熱した過酸化滿俺から酸素を取つた。白熾した塞子や炭や針金は壘の中で煌々と燃えて眼が痛くなるほどであつた。リューブカは手を叩いて大喜びで金切聲を擧げた。

『教授殿、もつと、どうか、もつともつと』

しかし持つて来た空壘の中で三鞭酒からの水素と酸素とを混ぜ、用心のため手拭で壘をくるんで、シマノーフスキイはリューブカに壘の口を燃えてゐる蠟燭の上に向けるやう命じた。すると轟然と爆發して恰度一時に大砲を四門發射したやうで、爆發のため漆灰が天井から散らばつた。さうするとリューブカは吃驚仰天したが、やつとのことで氣を取り直し、唇を顫はしてゐたが勿體振つた調子で云つた。

『失禮ながら此處は私自身の宅で、私も今は小娘ではなく、相應な女でございますから、今後どうぞ宅でこんな亂暴はなさないやうに願ひいたします。私はあなたが賢い教育のあるお方で、いつも規律正しく上品で被居ると思つてゐましたのに、あなたは馬鹿なことばかりして被居います。こんなことをすると牢屋に抛り込まれるかも知れませんよ』

其後大分経つてから彼女は自分の眼の前でダイナマイトを作つた知合の大學生のあつたことを人に物語つた。

畢竟するにシマノーフスキイなるこの不思議な男、よく理屈づくめになる青年社會ではあれほど勢力があつたが、さて生きた人間に對する實驗となるとまるで駄目であつた彼は

單に馬鹿に過ぎなかつたに違ひない。しかし自分の裡にある唯一の眞劍の性質を巧みに匿すことだけは出来たのであつた。

應用科學に失敗して彼はすぐ形而上學に移つた。

ある時彼は極めて自信のある風で、何等辯駁の餘地のないやうな調子で、神は存在しない、五分間でそれを證明して見せるとリューブカに告げた。その時リューブカは席から跳上り、確固として彼に對して、假令自分は以前娼婦であらうとも、神を信じてゐる、そして自分のゐる處で神を辱めることを許さない、若し彼がそんな馬鹿なことを續けて云ふなら、ワシーリイ・ワシーリウイチに告げると云つた。

『私はこのことも云ひます』と彼女は泣出しさうな聲で附け足した『あなたは私に勉強を教へて下さる代りに、色んな馬鹿なことや厭なことばかり云つて被居る、そして自身は何時も手を私の膝の上に置いて被居ることも云ひます。人格に拘はるぢやありませんか』

斯くして以前は臆病で遠慮勝ちだつた彼女が、彼等が知己になつてから初めて、慳貪に自分の教師から後退りした。

しかしシマノフスキイは數度の失敗をしても矢張り執拗くりューブカの頭腦や想像に

影響を及ぼすやうに續けた。彼は種の起原の學説を説明しようとしてアミーバから始めてナポレオンまで論じた。リューブカは注意深く傾聽してゐたが、彼女の眼中にはその際歎願するやうな表情が浮んでゐた『本統に何時になつたら止めて呉れるのです』と云つた風であつた。彼女は手巾を口に當て、欠伸をし後で濟まないやうに辯解した『御免なさい、これは神経の所爲です』マルクスも同様に成功を收めなかつた。商品、餘剩價值、工場主と勞働者などの代數式に直した説明はリューブカにとつては單に空氣を振動させる無意味な音響に過ぎず、心中極めて眞劍な彼女は、肉汁が煮立つたとか、サモワールが沸騰しかゝつてゐると云つたやうなことが聞えると、何時も喜んで席を起つた。

しかしシマノフスキイが女にかけて成功しないと云ふ譯ではない。彼の自負、彼の嚴かな思切つた調子は純朴な心、殊に水々しい無邪氣に信じやすい心に對して何時も力を持つてゐた。長く續いた關係から脱するのでも何時でも極めて容易かつた。それは彼には偉大な責任のある使命があるので、その前に於て家庭の愛などは空であると思つてゐるからか、或は總てが許されてゐると云ふ超人を装つてゐるかであつた（あゝニーチェよ、汝も随分昔から随分破廉恥に中學生達のため曲解されたものだ）消極的な、殆ど氣の附かない、手

柔らかではあるが確固としたリユーブカの抵抗は彼を苛立たせ激した。以前は誰の手にもはいつて、一人前二留で一日に引續いて數人の人に自分の情を與へてゐたのに、今になつて急に何だか純潔な無慾な戀愛を演じてゐると云ふことが殊に彼の癢にさわつたのであつた。

『詰らない』と彼は考へた『そんなことのある筈はない。彼女はむつかしい顔をしてゐる多分俺と彼女とは打解けないんだな』

彼は日々に無理な言掛りの多い氣むつかしい調子になつて來た。彼は恐らく意識してゐるはなからうが、むしろ習慣によつて、人の考をひるまし意志を壓へつける。彼にとつて滅多に間違つたことのない、彼自身の何時もの感化力を信頼してゐた。

ある時リユーブカはリホーニンに彼のことを訴へた。

『ワシーリイ・ワシーリエヴィチさん、あの人は私にあまり嚴格ですわ。そして私あつた人の言ふことが何も解りません、もうあの人について勉強するのは厭ですわ』

リホーニンは兎角してやつとリユーブカを納得させたが、しかし矢張りシマノーフスキイには打明けた。すると彼は冷淡に答へた。

『好いやうにし給へ。若し僕の教授法が君とかリユーバさんとかの氣に入らないなら、僕は何時でも止すから。俺の問題とする處は彼女の教育に本統の訓育の要素を用ひやうと云ふのにあるばかりだ。若し彼女に何か解らないとすれば僕は無理に暗記させる。時を経るに従つてそんなことはなくなるだらう。これは止むを得んさ。思出して見給へ、リホーニン君、算術から代數に移るのが吾々にはどんなに困難だつたか、何しろ普通の數字を文字と代へさゝれたんだからね、俺等は何のためそんなことをするのか解らなかつたものだ。それともまた何のため俺等に文典を教へたか、單に勝手に小説や詩を書くやう勸めないで』
その翌日釣洋燈の蓋かさの下でリユーブカの身體の上に低く身を屈め、彼女の胸や腋下を嗅ぎながら彼は女に云つた。

『三角形を描きなさい。さう、さう。上の方に僕は『愛』と書く。只頭字のLだけ書きなさい。それから下の方にMとW。これで男と女との愛になります』

堅固な嚴格な司祭のやうな風で彼は種々なエロティックな出鱈目を云つてゐたが、殆ど思掛けなくかう口を結んだ。

『だから御覽なさい、リユーバさん。愛すると云ふ欲望は、飲み食ひ空氣を呼吸する欲望

と同じです』彼は彼女の膝よりはずつと上の太腿をきつく緊めつけた。それで彼女はまた當惑しながら彼に恥をかゝせまいとして竊と次第に足を取退けやうとつとめた。

『そこであなたが偶然家で食事をしなかつたとか、料理店か食堂に行つて自分の飢を満たしたとかした處で、あなたの姉妹や母親や御主人に對して何の侮辱にもなりません。愛もその通りです。それ以上でもなければそれ以下でもない。肉體的快樂です。或は他の總てのものよりは更に強い更に鋭いものかも知れないが、しかしそれまでのことです。で例へば今、僕があなたを女として要求する、それであなたが……』

『お止しなさい、あなた』とリューブカは忌々しさうに彼を遮つた『何を何時も同じことばかり。幾度も云つたぢやありませんか、否と云つたら否です。あなたが何のためそんなことをなさるのか私にだつて解つてゐますよ。唯私は不義には決して承知しません。ワシリー・ワシリー・ウイチさんは私の恩人で、私は心から尊敬してゐますから。ところがあなたは馬鹿なことを仰有るから私には可なり厭なんです』

ある時彼はリューブカに大きなそして馬鹿氣た苦惱を與へた。そしてそれはみな彼の理論づくから起つたことであつた。ずつと以前から大學ではリホーニンがさる家から娘を救

濟し今ではその道徳的向上に努めてゐると云ふ話が出てゐた。それでこの噂は當然學生仲間にもた女學生の耳にも達した。そこで餘人ならぬシマノーフスキイがある時二人の女學生と一人の史學生と一人の新進の女詩人——序ながらこの女は己に評論にも筆を染めてゐた——をリューブカの處に連れて來た。彼は極めて眞面目な極めて馬鹿氣た調子で彼等を紹介した。

『さあ』と彼は或は客、或はリューブカの方に手を差ししながら云つた『さあ、皆さん、御紹介します。リューブさん、この方々は本統の親友となつてあなたの前途を助けて下さいます。リーザさん、ナーヂャさん、サーシヤさん、ラヒーリさん、あなた方は社會制度が現代の女性を陥れた恐ろしい闇から脱れ出たばかりの人に姉として交際つきあつて上げて下さい』

彼が云つたのは或はこの通りではなかつたかも知れないが、兎に角これに近いものであつた。リューブカは赧くなつて、色上衣を着皮帯をしめた娘達に、指をみんな不細工に一緒に集めた手を差し出し、茶とジャムを饗應し、急いで煙草を勧めた。しかし皆の勧めにも拘はらずどうしても席につかうとはしなかつた。彼女は『はい左様で御座います、いゝた

さうでは御座いません』と云ふやうな口の利方であつた。そして娘の一人が床に手巾を取
落した時彼女は急いで飛んで行つて拾ひ上げた。

一人の娘は赧ら顔の肥えた低音の女で、顔々には赤い頬が一對あるばかり、その中から
心持獅子鼻が滑稽に天井を向き、眼窩のどん底からは黒い乾葡萄のやうな眼が一對光つて
ゐた。この女は絶えずリューブカを頭の先から爪先まで恰度假想の柄付眼鏡を透して見る
やうにじろくくと眺め、何も云はないが輕蔑したやうな眼差を彼女に與へてゐた。『別に私
はあの方から誰も横取りしたことはないのに』とリューブカは濟まなさうに考へた。ところが
がも一人の娘は猶一層無遠慮で、恐らく彼女には最初でもあらうがリューブカにとつては
百度も覚えのある話をはじめた。即ちそれはどうして彼女が賣春の世渡りに陥つたかと云
ふ問題であつた。この娘はおせつかいで、顔は青白く、大變器量が好く、飄々乎たる風采
で、淡い縮髪をした娘で、甘へかされた子猫のやうな風をして居り、頭には猫のかけるや
うな赤いリボンさへかけてゐた。

『その惡漢は誰ですの、初めてその……お解りでせう』

リューブカの腦裡には以前の朋輩、ヂェーニカやタマーラと云つたやうな傲然とした大膽

な従容たる女達の姿が急に閃めいた。——あゝ彼女達の方がこの娘等より遙か賢い——そ
れで殆ど自分自身にも思掛けなく突然つんげんと云つた。

『澤山ありますわ。私もう忘れつちまひました。ユーリカだの、ミーチカだの、ウァロー
ヂカだの、セリョージダの、ヂョルヂックだの、ツローシカだの、ペーチカだの、その外
クージカやグーシカの連中もあります。何故そんなことがあなたに面白いんですの』

『いゝえ、その、それは私があるあなたに全く御同情してゐる人間として』

『があなたには戀人がありますか』

『失禮ながら私にはあなたの云はれることが解りません。皆さん、もうお暇する時刻です
よ』

『と云ふのは、どうしてそれがお解りにならないのでせうね、何時か男の方と一緒におや
すみになりましたか』

『シマノーフスキイさん、あなたがこんな人の處へ伴れて來て下さらうとは思ひがけませ
んでした。有難う御座います。大變御親切ですことね』

リューブカには最初の一步を踏出すのが六箇敷いだけであつた。彼女は長い間辛棒して

はゐるが、勘忍袋の切れるのも突然な性質たちの女であつた。さうしてこう云ふ瞬間には何時ものやうな臆病な面影はまるで見當らなかつた。

『私は知つてゐますよ』と彼女は憤激して叫んだ『あなた方だつて私と同じことです。けれどもあなた方にはお父さんやお母さんがあつてあなた方の生活は安全で、萬一必要な場合には子供を墮胎する、多くの人はさうするのですものね。私の立場になつて御覽なさい。何も喰べるものもない、そして田舎娘のことだから何も知らない、盲目ですものね、それでゐる周囲の男は種馬のやうにつきまとふ、かうなるとあなただつて娼家に落ちますよ。そんなに哀れな女を苛めるのは恥ですよ』

みぢめな立場に陥つたシマノーフスキイは古代の喜劇で貴族の親爺達の云ふやうな分別臭い低音バズで双方共通に宥め賺す言葉を二言三言云つて、連れの女達を伴つて歸つた。

然し彼はリュブカの自由な生涯に於て猶一つ極めて恥かしい苦しいそして最後の役割を演じるやうになつた。

彼女は大分前からシマノーフスキイが眼の前にゐるのは彼女には苦痛だと云ふことをリホーニンに訴へてゐるが、リホーニンは女の瑣末事には注意を拂はなかつた。彼の裡には

この命令的な人間の出鱈目な、頭腦で捏上げた大口な暗示が力強かつた。免れることの困難な、殆ど不可能な影響があるものだ。また一方から見れば彼は大分前からリュブカとの同棲が煩さくなつてゐた。彼は屢自分獨りで考へた『あの女は俺の生活を嚙潰しつゝある、俺は次第に下劣になり馬鹿になる。俺は馬鹿な慈善の中にとろけた。やがては彼女と結婚するのが落ちだ、そして税務署か、孤兒院に勤めるか、教育家になるかして、賄賂を取り、無駄話をし、田舎臭い厭な皺くちや爺になるのだ。さうすれば理智の權威、生活の美、全人類の愛や偉大な事業に就いての俺の空想は何處に存するのだ』と云ふ風に、時とすると聲にまで出して自分の頭髪を搔掻つた。そしてリュブカの不平をよく考へてやらずに、癪癪を起して怒鳴りつけ地團太踏んだりしたが、辛棒強い内氣なリュブカは黙り込んで臺所に遠去かり、其處心のくばかり泣くのであつた。

此頃になると内輪喧嘩の後で仲直りした瞬間に、彼は段々と度重なつてリュブカに云つた。

『ねえリュバ、お前と僕は性が合はないんだ、この意味を理解してお呉れよ。さあ、此處に百留あるから國に歸ると好い。身内のものは喜んでお前を迎へて呉れる。よく氣を附

110
けて暮らし給へ。半年経てば僕はお前を呼びに行くさ。お前は休養して、街で積付けられた穢れたもの忌はしいものはみんな消えてなくなるだらう。そこで獨立して何等の補助もなしに一人で立派に新らしい生活を始めるんだね』

しかし最初であつて而も彼女の考では勿論最終である戀をした女をどうすることが出来るやう。どうして別離の必要を納得させることが出来るやう。彼女にとつては論理などがどうして存在しよう。

シマノーフスキイの言葉と決意の確固たることを崇拜してはゐるものゝ、リホーニンは彼とリユーブカとの實際の干係を勘付き、それを直覺で知つた。自分から偶然の背負ひ切れない重荷を振落したい、逃出したい一心から、卑劣な考へが思當つた『シマノーフスキイはあの女に思召しがある。あの女にして見れば俺だつて彼だつて他の者だつてどうでも好いんぢやないか。俺は彼にすつかり打まけて友人らしくリユーブカを譲らう。だがあの女は行くまいな。金切聲を立てるだらう』

『それともどうかして彼等二人が差向ひで……』と彼は先へ先へと考へた『何か思切つた恰好であるのを見付けさへすりや、大聲を出して騒動を演じる、寛大らしい身振をする

少々のお金をつけて、逃出すのだ』

近頃になつて彼は屢數日間家をあけ、その後歸つて來ると女の根柢葉堀した問や嫉妬喧嘩や泣面や時にはヒステリイなどの苦しい時間を経験した。時にリユーブカは彼が家を出る際そつと眼をつけ、彼が這入つた入口の向側に佇んでゐた。そして彼の歸りを數時間待ち受けてゐては、街上で彼を咎めたり泣いたりした。字が讀めないので彼の手紙を横取りしその擧句公爵やソロヴィヨフの手を借りて返す決心もつかずに、自分の戸棚に茶や砂糖やレモンやその他色々な物と一緒に詰め込んで置いたりした。腹を立てた瞬間には硫酸騒ぎで彼を嚇すほどにまで達した。

『勝手にしやがれ』と悪辣な計畫の瞬間にリホーニンはちつと考へた『あの二人の間に何も無いとしたところで構ふものか。どの途取扼まへて彼とあの女とに怖ろしい幕を演じてやるんだ』

そして彼はひとりで臺白を云つて見た。

『あゝこれだ。僕はお前を自分の胸に煖めてやつたのに何を見せつけられることだらう。

お前は僕に恩を仇で返すのだ。さて君もだ、僕の最も良い友達である君は僕の唯一の幸福

を破壊した。あゝ、いやいや、そのまま二人でゐ給へ、僕は眼に涙を浮べて此處を去らう見たところ此處で僕は餘計者だ。僕は君等の愛の妨げとなりたくはない……』

ところがこの空想、この陰謀、あんな一瞬間の偶然の而も實際は破廉恥極まる考へ——後で誰でもそんな考へが起つたことを自分自身にさへ認めることを欲しない性質のものであるが——それが突然實現せられた。ソロヴィヨフの授業時間であつた。彼の喜んだことにはリューブカは到頭漸やくのことで殆ど詰まらずに通讀した『ミヘイは好い鋤を持つてゐます、スイソイも好いのを持つてゐます、……つばめ……ぶらんこ……子供等は神様を愛します』その褒美にソロヴィヨフは『商人カラシュニコフと親衛兵キリペーエウイチの話』を音讀してやつた。リューブカは大喜びで椅子の上で跳ねかへり、手を叩いた。この不朽の英雄的な作品の美はすつかり彼女を魅した。しかし彼女には自分の印象をすつかり述べる間もなかつた。ソロヴィヨフは要件があつて人と面會しに急いで行つた。ソロヴィヨフと直ぐ入れ違ひに、戸口で挨拶をするかしないでシマノーフスキイが這入つて來た。リューブカは悲觀した顔付で唇をふくらした。近頃になつて街學的な教師であり野卑な牡であるこの男は彼女には最早大の厭になつてゐた。

今度は彼が、人間にとつては法律も權利も義務も名譽も破廉恥も存在しない、人間はそれ自身で充分な本體であつて誰からも何からも掣肘されないと云ふことについて講義を始めた。

『神にもなれ、ば蠅蟲、條蟲にてなれる——要するに同じことなんです』

既にして彼は性的感覺の理論に移らうとしたが、不幸にも辛棒し切れなくて少々急いだ彼はリューブカを抱擁して自分の方に引つけ、手荒く抱緊め始めた『彼女は抱擁に酔うて靡くだらう』と打算的なシマノーフスキイは考へた。彼は接吻するため辛うじて唇を彼女の口に觸れたが、彼女は叫び聲を出して彼に唾を吐きかけた。練習を積んで來た上品さはまるで彼女から去つた。

『出て失せろ、悪魔、馬鹿野郎、豚、穢多、お前の鼻柱をぶつ潰すぞ』

彼女にはすつかり娼家の言葉が後戻りした。しかしシマノーフスキイは鼻眼鏡を失ひ、歪んだ顔をして、どんより曇つた眼で彼女を眺めながら出鱈目に喋つた。

『ねえ君、どうでも好いぢやないか、快樂の一瞬間だ、二人は恍惚の裡に融合ふのだよ。誰も知りやしない。云ふことを聞いてお呉れ』

恰度この一刹那リホ！ニンが部屋に這入つて来た。

勿論彼は今すぐ忌はしいことをするのでとは自分自身心中で認めてゐなかつた。彼の顔は青褪めてゐる、彼の言葉は今に悲壯な意味深長なものが出るのだと云ふことを、唯かう遠く離れた側面から考へた。

『ふむ』と彼は恰度劇の第四幕目に於ける俳優のやうに微かに云つて、手を力なく垂れ、胸の上に垂れた頤を振り始めた『僕はこのことだけは起るまいと思つてゐた。僕はお前を許すよ、リユーバ、お前は魔窟の人間だから、だが君は、シマノロフスキ君……僕は君を兎に角今日まで立派な人間と思つてゐたし、また思つてゐる。しかし情慾が時に判断の絆より強いことがあるのを僕は知つてゐる。此處に五十留ある、それを僕はリユーバのために残して置く、勿論君は後で僕に返して呉れるだらう、それを僕は疑はない。彼女の運を開てやり給へ。君は賢い善良な正直な人間だ、僕は……『破廉恥漢だ』と誰かのあり／＼とした聲が彼の脳裡に響いた……出て行く、この上こんな苦痛に堪へられないからでは幸福でゐたまへ』

彼はポケットから紙入を握み出し、感動したやうに机の上に投出し、その後で頭髮を引

扼んで部屋から跳出した。

これは彼にとつて兎に角も一番好い逃路であつた。そしてお芝居は彼の空想した通りに運んだ。

後
篇

リユーブカはヂューニカの肩に凭れて慟哭しながらこの顛末を長々としどろもどろに物語つた。勿論この悲喜劇的な話は彼女の口から實際に起つた通りそのまま出はしなかつた。彼女の言葉によると、リホーニンは慰みに氣晴しに彼女の無智を出来るだけ利用しその舉句に棄てるために、自分の身受けをしたのであつた。自分は馬鹿で本氣に彼に惚込み、皮帶をした頭髮の長い女學生達の嫉妬やまもろを焼いたので彼は卑劣なことをした、故意と友達を寄こして約束をして置き、その男がリユーブカを抱きかかつた時、ワシカは這入つて来てこの有様を見、大騒動を起してリユーブカを路頭に追出したのであつた。勿論彼女の云ふ處には嘘も本統も殆ど相半してゐるが、兎に角少くとも彼女にはかう考へられたのであつた。

また彼女は其の先も同様に大變詳しく物語つた。突然に男の保護もなくなり、またこれと云つて何等の確かりした局外者の世話もなくなつて、彼女は町はづれの見すばらしい旅館の一室を借受けたが、最初の日から廊下ボーイである海山千年の手練者てねれものが彼女の許さ

へ乞はずに彼女を賣飛さうと試みた。そこで彼女は旅館から素人下宿に移つたが、其處でも貧乏人の住んでゐる家には蠢々してゐる老練な媒婆が彼女を襲つた。

つまり堅氣な生活に於てさへもリユーブカの顔や話や舉動の中には、特別な一種變つた素人の眼には全然氣付かないかもしれないが、その道の者には太陽のやうに否むことの出來ないほど判然と勘付く何かとあつたのである。

しかし一時の短かいしかし熱烈な愛は彼女自身に期待しなかつた力、第二の墮落の避け難きに反抗する力を彼女に與へた。勇ましい元氣を持つてゐた彼女は新聞に數個の廣告を出して萬端を受持つ下女の口を搜がすまでに至つた。所が彼女には何の紹介狀もない。その上雇入に當つて彼女が交渉しなければならなかつたのは主として女で、その女なるものはある内的な確かな本能で古い仇敵——彼等の夫、兄弟、父子の誘惑者を彼女の裡に見すかした。

故郷に歸ると云ふやうなことは彼女にとつて意味もなければ當てもなかつた。彼女の故郷のワシリコーフスキイ郡は縣市から僅か十五露里隔つてゐるだけで、彼女があんな家に陥つたことの噂は同郷人の口を通してとつくの昔に村に傳はつてゐた。そのことは偶然彼

女を街で見かけたり、またアンナ・マルコーヅナ樓そのものゝ中で見たりした村の近所の人——門番、旅館の室僕、小さな料理店の給仕、馭者、小さな請負師などが手紙に書いた口で言傳てたりした。彼女が故郷に歸つたとすればこの評判がどんなだか彼女は知つてゐた。そんなことを辛棒する位なら、首でも縊る方がましであつた。

彼女は金錢上の事では五才の子供のやうに頭腦がなくて非實際的であつた。そして間もなく一文無しになつた。然し娼家に歸るのは怖ろしくもあり穢らはしくもあつた。街頭で情を鬻ぐ誘惑は獨りでに近寄り、一步毎に手にせまつた。毎晩大通りで常習犯の年功を積んだ街上娼婦は忽ち彼女の以前の職業をてつきりと見破つた。始終その中の誰か彼女と肩を並べては甘い機嫌をとるやうな聲で云ひ始めるのであつた。

『何故一人で歩いて被居いますの。お友達になりませうよ、御一緒に歩ませう。その方が何時も便利ですわ。娘さん達と愉快に時間を過さうつて男の方は何時も四人で一組になるのが好きなんですよ』

其處でまた老練な功を経た勸誘女は始めそれとなしに、後には熱心に一生懸命で、自分の女將の處の生活の便利を説き立て、食事は旨く、出入は全く自由で、規定額以上の収入

は家の女將の眼をごまかして何時でも隠すことが出来るなど云ふことを自慢した。その序には遊廓の女に關して種々な悪い侮辱するやうなことが語られた。彼等は遊廓の女を『お上の醜婦』とか『お上もの』とか『お上品もの』とか呼んでゐた。リュープカはこんな嘲笑に對する價も知つてゐた。それは娼家の者はまたそれだけに彼等を『立ん坊』とか『瘡かき』とか呼んで街上の娼婦を極めて輕蔑してゐた。

結局起るだけのことは起るのであつた。前途に長い數日の飢餓を見、そのどん底には知ることの出来ない未來の暗い恐怖を覺えて、リュープカはある胡麻鹽頭の、綺麗な風采をした生帳面な、身分のある上品な小さな老人の懇懃な招きに應じた。この醜行に對してリュープカは一留しか貫はなかつたが、抗議を申込む元氣はなかつた。娼家に於ける以前の生活が彼女の裡にある自身からの自發力、活動力、精力を全然根絶したのであつた。その後引續いて數度彼は全く何も拂はなかつた。

或る若い男、無遠慮な綺麗な人で、平たい縁の帽子を小意氣に横被りにし、絹のルバーシユカを着、房のついた紐を帯にしてゐたが、同じくリュープカを自分の部屋に件れて行き葡萄酒や小料理を注文し、リュープカに向つて自分は伯爵の妾腹だとか、街中で第一の撞

球家だとか、娘は誰でも自分を愛するとか、同様にリュープカを好い娘にしてやるとか、べら／＼と喋つた。その後で一寸用があるやうに部屋から出て行つて永久に消えて仕舞つた。氣六箇敷い籤睨みの門番は手でリュープカの口に蓋をし、鼻を鳴らしながら、仕事でもするやうな様子で可成りに長らく黙つて彼女を打つた。しかしお仕舞ひに罪は彼女にはなく客にあると云ふことを確かめて、彼女から一留某入りの財布を奪ひ、また彼女の安帽子と上衣とを抵當に取上げた。

また他の大變立派な風采をした四十五ばかりの人は二時間程も彼女を苛め抜いた果に、部屋代を拂つて彼女に八十哥與へた。彼女が不平を零しはじめると彼は野獸のやうな顔をして彼女のすぐ鼻先に緒い毛の生えた大なま拳骨を突出し、斷乎として云つた。

『もつと暴るならばつて見ろ、俺にも積りがある。すぐ警官を呼び込んで、俺が寝てゐる間に貴様が泥棒をしたと云つてやる。さうして欲しいか。警察へは随分御無沙汰してゐるだらう』

そして歸つて行つた。

こんな場合が澤山あつた。

宿の主人である船頭夫妻が彼女に部屋を断り、彼の荷物を手當り次第庭に抛り出した時、そして夢も結ばず夜通し雨に打たれ巡査の眼を忍びながら街を歩き廻つた時、その時になつて始めて厭ではあり恥しくはあるがリホーニンの助けを求めすることに決心した。しかしリホーニンは最早街にはゐなかつた。リューブカが不當な侮辱を受け汚名を着せられて家から走り出たその日に彼は卑劣にも街を去つたのであつた。そこで翌朝になつて、娼家に舞戻り許しを乞はうと云ふ最後の自暴自棄な考が彼女の頭に浮んだ。

『ヂェーちゃん、あんたは本統に賢い思切つたそして優しい方ね、どうぞ私のことをエンマ・エドワルドヴナさんに取りなして頂戴、おぼさんはあんたのことなら聞くんですから』と彼女はヂェーニカに歎願し、彼女の裸の肩を接吻け、涙にうるほした。

『あの女は誰のこととも聞かない』とヂェーニカは陰鬱に答へた『お前さんは馬鹿な悪い奴に喰付いたもんだね』

『ヂェーちゃん、だつてあんた自身が私に勧めて呉れたぢないの』とリューブカは恟々と答へた。

『私が……私は何もお前さんに勧めやしないわ。まるで死人に口なしのやうに何つて嘘を吐くの。まあ好いわ、行つて來ませう』

エンマ・エドワルドヴナはもつと前からリューブカが戻つて來たのを知つてゐた。それどころか彼女が四邊を見廻して家の庭を通りすぎるその刹那に見かけたのであつた。心中彼女はリューブカを元通り抱へるのに何の反對もなかつた。實を云へば金が欲しいばかりに彼女を手放し、その金の半分は自分に着服したのであつた。その上彼女は新しい娼婦の流れ込む今の時季には選り好みは思ふまゝだと思つてゐた。所がこの當ては彼女の見當違ひで景氣は急に變つたのであつた。で兎も角も彼女はリューブカを抱へることに堅く決した。唯相當に自分の權威を保ちまたそれを増すためには彼女を嚇しつけなければならなかつた。

『なあに』と彼女はリューブカのへどもどした呟きを聞くが早いかりューブカに怒鳴りつけた『また抱へて呉れる。お前なさあ街の垣根でどんな奴と轉がつたか知れやしない。それがまた歴とした上店に入る、馬鹿なこと。露西亞豚、出て行け』

リューブカは彼女の手を捉へて急いで接吻しようとしたが、鴉母は手荒く振り放した。

それから急に青くなつて顔を歪め、震へた唇を斜に咬んで、エンマは用心深くそして旨く見當をつけてリユーブカの頬を大袈裟に殴つた。それでリユーブカは膝頭をついたが息を窺らし泣じやくりをしながらすぐと起上つた。

『あなた、打たないで。あなた、打たないで』

そして今度は横にばつたりと床の上にまた倒れた。

この順序正しい冷酷な意地の悪い打擲は二分ばかり續いた。何時もの意地悪な輕蔑した様子で初めは黙つて跳めてゐたヂューニカも突然耐えられなつた。烈しい金切聲を立て、鴉母に飛かゝり、頭髮を引扼み、鬢の入毛を掻り取り、本統のヒステリーのやうに怒鳴つた。

『馬鹿、人殺し、人買ひ婆、泥棒』

三人の女はみな一緒に大聲を擧げ、犇猛な號泣は忽ちにして家中の廊下や小部屋全體に鳴り渡つた。これは時に牢獄に禁監されてゐる者を襲ふことのあるあの共通の大きなヒステリー發作か、或は突如として傳染的に精神病院を襲ひそのため老練な精神病醫をさへ顔色を失はしめるあの烈しい熱狂 (raptus) のやうなものであつた。

一時間も経つてやつとシメオンとその助力に遣つて來た二人の仲間によつて秩序が回復せられた。三十人の抱女はみな非道く罰せられたが、本統の無我夢中になつたヂューニカは一番烈しかつた。打のめされたリユーブカは元々通り抱へて呉れることに極まるまで鴉母の前に匍つくばつてゐた。彼女はヂューニカの馬鹿な眞似が晚かれ早かれ自分の上に酬ひて來ることを知つてゐた。ヂューニカは夜中まで自分の寢床の上に土耳其人のやうに安座をくんで坐り、食事も斷わり、彼女の處に立寄つた朋輩達をみな追ひ却けた。彼女は眼に怪我をしたので、五錢銅貨を一心に押當てゝゐた。引裂かれた襦袢の下からは頸筋に恰度繩の痕のやうな長い斜の搔傷が赤く見えた。これは格闘の際シメオンが皮膚をかきむしつたのであつた。彼女は斯うして獨り坐り、猛獸のやうに暗中で眼を光らし、鼻孔をふくらし、顴骨をびく／＼と震はし、毒々し氣に嘔いた。

『待つてゐやがれ、今に、畜生、眼に物見せてやる。思知るぞ。うぬ、人喰め』

しかし火が點つて若い方の鴉母のゾーヤが彼女の戸を叩いて『姐さん、支度ですよ。廣間へ』と云つた時、彼女は急いで顔を洗ひ、衣裳をつけ、髮粉を塗り搔傷は白粉と紅とでごまかして廣間に出た。その様子はみちめではあるが傲然とし、打のめされはしたが盡な

い憎悪と人間とは思はれない美さで輝やいた眼をしてゐた。

自殺者とその怖ろしい死の時間前に見かけた多くの人々は、この最後の死せんとする副の數時間に於て彼等の顔に怪しい神秘的な異常なある美さを認めたとを物語つてゐる。そのやうにこの夜と翌朝僅かの時間にデューニカを見た者は皆長い間凝と驚いて彼女の上にその眼を止めた。

しかも不思議極まるのは（それは陰鬱な運命の詭計の一つであるが）彼女の死の間接の原因、生の秤の皿を下に垂ける砂の最後の一粒となつたのは、餘人ならぬ可憐な善良な幼年學校生徒コーリヤ・グラドウィシェフであつたことである。

二

コーリヤ・グラドウィシェフは立派な快活な遠慮深い少年で、頭でつかちな紅い顔をし、口髭の生えかけの生毛が上唇に滑稽な弓なりの恰好の乳汁のやうな條を引き、眼はぱつちりと見開いた青い無邪氣な眼で、毬栗頭は良種のヨークシヤ産の仔豚のやうにブロンドの剛い髪の下から赤い皮膚が透いて見えた。去年の冬デューニカが母親めいたやうな人形遊び

のやうなことをして、對手が恥しさの餘り身を縮めて娼家から歸るに當つて、彼女が土産に林檎と糖菓を二袋そつと遣つたのはすなはち彼であつた。

今度彼が遣つて來たのは長い間隊にゐた後のことで、氣のつかないほどに早く少年が青年に變るあの迅速な年齢の轉換が直ぐ彼の裡に認められた。彼は已に幼年學校を卒業し、厭々まだ幼年學校の制服は着てはゐるが士官候補生と威張つてゐた。彼は身長も延びがつしりとして敏捷になつた。軍隊生活は彼には爲めになつたのであつた。彼の聲はバスで、そして昨今は彼の胸の乳豆が硬くなつたのが大威張りであつた。彼の既に知るところであるがこれこそ一番肝心な、間違のない男一匹の徴候であつた。目下彼にとつては士官學校の規律づくのめ嚴格な生活に入るまでに當分咬るやうな半自由の時があつた。家でももう大人の前で公然と喫煙することが許されたし、父親自身彼に頭字入りの革の煙草入を呉れたりさへし、また家内中大喜びの學句彼に月々の手當を十五留ルイブル呉れることになつた。

このアンナ・マルコーヅナ樓に於て、彼は初めて女、このデューニカを知つたのであつた。娼家や街頭の娼婦によつて無垢の魂の墮落することは普通に人々が考へてゐるよりもつと屢行はれてゐる。この擦つたいやうな事柄について、單に青春の青年ばかりでなく、殆

ど祖父にも均しい五十代の好い年配の男に尋ねても、彼等は屹度女中とか家庭教師とかが誘惑したのだと云ふ古い極り文句の嘘を吐くに違ひない。しかしこれは永續的な、古い過去世紀に逆行する變な嘘の一つで、殆どどんな専門の觀察者によつても注意せられず、また一般に誰の手によつても描寫されてゐないのである。

若し吾々の銘々が、業々しく云へば、胸に年を置いて大膽に過去を思ひ廻らすならば、自分にもかう云ふ時のあつたことを認めるであらう、嘗て少年時代に於て何か大袈裟な人を驚かす虚構事を云つたところがそれが成功する、其處でそれを二度五度十度と繰返すうち、仕舞ひには一生涯それから脱することが出来なくなり、決して有りもしない事をさも確かさうに繰返す、その擧句は自分までそれを信するやうになる。時を経るにつれてコリーも自らの友達に、自分を誘惑したのは叔母で綺麗な若い婦人だと話してゐた。尤もその婦人と云ふ大柄な眼の黒い色の白い甘い香のする南國の女に對する關係は實際存在してゐたには違ひないが、しかしそれは單にコリーの空想裡に於てであつて、總ての男の皆が皆でないまでも兎に角も九分九厘まで通り過ぎて來る獨樂のあの悲しい悲劇的な臆病な瞬間に於て存在してゐるのであつた。

大變早くほど十歳か十一歳頃から機械的昂奮を経験したコリーは、側面から明ら様に見るか、學術的に説明するかしたならばかくも怖ろしい、あの戀慕とか求愛とかの結局がどんなものかと云ふことに就いては、何等の知識もまるで持つてゐなかつた。不幸にも當時彼の周圍には今日の進歩的な有識婦人のやうに、古譚の驚には背中を向け、下に子供がゐるのだと云ふ甘藍は根から掘起して仕舞ひ、講義に於て比較類同をもつて遠慮會釋なく殆ど寫眞的に愛と出生の大なる秘密を子供達に説明することを勧める人が一人もゐなかつた。

茲に説くやうな以前の時代に於ては、寄宿學校、たとへば男子寄宿學校とか男子専門學校とかまた同様に幼年學校などは謂はゞ温室のやうなものであつた。茶目達の知識と道徳との薰陶は出来るだけ塾監に一任するやうに努めた。ところがそれが形式一遍の官吏で、おまけに癩癪持の口やかましい依估最眞の氣まぐれな、そして老嬢が女舎監のやうにヒステリカルな人間であつた。尤も今は別である。しかしその當時子供達は打遣り放しであつた。比喩的に云つて母の胸、忠實な乳母の世話、朝夕の静かな甘い愛撫から離れるや否や、例令彼等は有ゆる溫情の表示を『弱虫』として恥ぢてゐたにしろ、接吻、接觸、耳語

などに耐らなくそして楽しく牽きつけられるのであつた。

勿論注意深い行届いた世話、水浴、野外運動——と云つても體操ではなく、銘々好き勝手手の運動——などは何時もこの危機の來るのを退けるか、或はそれを緩和することが出来るのである。

繰返して云ふが、當時さう云ふことはなかつた。

出拔けに手荒く蹴取られた家庭の愛撫、即ち母や姉妹や乳母の愛撫に對する渴望は、やがて美少年、所謂『稚兒』に對する求愛の畸形な形式に變るのであつた（恰度女學校に於ける『崇拜』と同じである）。片隅で内緒話をしたり、手に手をとつて歩き乍ら、或はまた暗い廊下で相擁して、女との情事について到底不可能なことを互に耳打ちすることを愛した。これは一部分異常なことに對する少年の要求であるが、また一部分眼覺めた慾情であつた。打球をやるか乳入りの蕎麥粥を我武者に食ふのが釣合つてゐる十五かそこいらの凸坊が、勿論それやこれやの三文小説から讀み覺えて、此頃毎土曜日の外出にある金持の綺麗な寡婦の處へ行くのだ、その女が自分に熱烈に惚れてゐて、彼等の臥床の側には何時も果物や珍重な酒が置いてある、そして彼女は猛烈に熱烈に自分を愛するのだと話をすることが珍

らしくはなかつた。

またそれに勿論凡ての少年少女が通り過ぎて來る長く引續いた亂讀の避け難い時期が力を添へた。この點に於て學校の監督がどれ程嚴格であらうとも、矢張若者は禁じられてゐるものを讀んだし、讀んでもゐるし、また今後も讀むであらう。茲には特別な冒險、流行禁制の情趣があるのである。既に三年級に於てバルコフ、似而非プーシユキンの寫本や、レルモントフ其他の人の青年時代の罪、最初の夜、櫻、入江、ペテルゴフ祭、鎗騎兵の妻知識の悲哀、僧侶と云つたやうなものが手から手へと渡り歩いてゐた。

然しいくら奇妙な虚構事のやうな或は矛盾したことに思はれるにしても、兎に角もこんな小説や繪や醜惡な寫眞は淫らな好奇心を挑發はしなかつた。彼等はそれを悪狎戲、いたづら、密輸入の冒險の面白さのやうに見てゐたのであつた。幼年學校の圖書室には温健なプーシユキンやレルモントフ文粹や、コーリヤを笑はせたゞけのオストロフスキイが全部、及ツルゲーネフが殆ど全部備へてあつた。このツルゲーネフこそコーリヤの一生涯に重大なそして殘酷な役目を演じたのであつた。人の知る通り物故した偉大なツルゲーネフの作では、愛は何時も煽動するやうな幕、捉へ難い秘密めいた、しかし誘惑するやうな烟

霧のやうなもので包まれてゐる。彼の娘達は愛を豫感し、その到来に胸を躍らし、程度以上で恥かしがり、顔へ、赧くなる。夫のある女とか寡婦などがこの苦しい途を辿るのは多少變つてゐる。彼等は長い間義務とか謹慎とか世評とかと戦つてゐるが、仕舞ひには——噫——と涙と共に倒れ、或は——噫——と猛進しはじめ、或はもつとよくあることだが、熟した果實が落ちるのには微風を待つばかりと云ふ最も——噫——必要な刹那に、非情な宿命が彼女または彼の生命を断つのである。しかも彼の人物は皆矢張この恥づべき戀にあらがれ、そのためには楽しげに泣き嬉しげに笑ひ、そしてこの戀は彼等のため全世界を蔽ひ隠して仕舞ふのである。然し子供は吾々大人とは異つた考へ方をしてゐるため、そしてまた禁制のもの、不言裡のもの、或は秘密に語られてゐるものはみな彼等の眼中にあつては二重どころか三重の大きな興味を持つてゐるため、自然と彼等は讀書の中から、大人が彼等から何かを隠蔽してゐるのだと云ふ漠とした考へを惹起するのであつた。

さりながらまたコーリヤとても彼の年配の子供の大多数と同様に、フローションヤと云ふ下女であの頬の紅い何時も陽氣な鋼鐵のやうな大きな足をした女が（彼は時々狎戯けて彼女の背中を叩いた）ある時コーリヤが偶然に足早やに父親の書齋に這入つて行つた時、前垂

で顔をかくして息を切らして其處から飛出したのを見ないでもなかつた。またその時父親の顔は眞赤で鳩色の何だか長く延びたやうな鼻をしてゐるのを見ないでもなかつた。そしてコーリヤは『父さんは七面鳥に似てゐる』と考へたのであつた。またコーリヤはその父親の部屋で、一つは總ての子供に特有な悪戯心から、一つは退屈の餘り、父親の机の鍵のかゝつてゐない箱を開けて、夥多な寫眞を發見した。それにはお店者達の所謂愛の戴冠式世間の道樂者の所謂極樂の情熱と云ふところのものが現はされてゐた。

また彼はある大使館附ののらくら者である香水をぶん／＼さした糊氣のびんとしたパーウル・エドゥアルド・ウィチの訪ねて来る前には何時も（彼の母親はペテルブルグ流行のフトレールカ散策の眞似をして彼と一緒にドネープルに行つて河向ふに落ちる夕陽の景色を眺めたり、チェルニゴフ縣に行つたりした）母親の胸は波打ち、頬は白粉の下で赤くなるのを見もした。彼はこんな瞬間に種々な新しい變なことを捕捉もした。また母親の聲がまるで何時もと違つて、恰度俳優のやうに、苛々と途切れたり、家族や召使に對しては容赦なく意地悪いのが、パーウル・エドゥアルド・ウィチが來ると突然天鷲絨のやうに、太陽の照つた春野のやうに優しくなるのを聞きもした。あゝ、吾々經驗で賢くなつた人間は、

吾々の周囲の悪戯小僧お轉婆娘達が如何に多くのこと、否餘りに多くのことを知つてゐるのを感じるべきである。それに吾々は通常から云つてゐる。

『なあに、ウォローヂャ(或はペーチャ、或はカーチャ)に何の遠慮があるものか。彼奴等は子供ぢやないか。何も解りやしない』

これと同様にグラドウィシェフのためには彼の兄の事件も無駄には過去らなかつた。その兄は士官學校を出てある著名な近衛歩兵聯隊に入隊したばかりで、思ふまゝ翼を伸せるやうになる入隊の時までは休暇で自分の家に歸り二つの別室を占めてゐた。その當時彼等の家には小間使のニューシヤと云ふのが奉公してゐた。その女は時々笑談に令嬢アニータなどと呼ばれて、黒い髪の素的な美人で、衣裳さへ變へるなら外見は俳優とも、王女の素性とも、女政治家とも見ちがへられる程であつた。コーリヤの母親はコーリヤの兄が半ば笑談半ば眞面目にこの女に思召をつけてゐるのを、明らかに庇ひだしてゐた。勿論母親には唯一つ神聖な母心の思はくがあつたのである。そしは若しボーレンカが破戒するものとするれば、その純潔を、その童貞を、その最初の肉體を娼婦でなく、淫婦でなく、男喰ひでなく、純な娘に與へさせたいと云ふのであつた。勿論彼女を支配してゐるのは唯無私な無

分別な眞の母心だけであつた。當時コーリヤはリアノス組、ポムパス組、アパシエ團、追尾黨、『黒豹』團長と云つたやうな時期であつたので、勿論注意深く兄の情事の眼をつけ、時には餘り的確な時には空想的な論斷を下してゐた。六ヶ月経つて彼は扉の隙から忌はしい光景を目撃と云ふよりは立聴きした。何時も禮儀正しい控目な將官婦人が自分の部屋で令嬢アニータに怒鳴りつけ、地團駄踏み、馬車屋のやうな言葉で罵つてゐた。それは小間使が妊娠五箇月なのであつた。若し女が泣きさへしなければ多分簡単に手切金を呉れ、女は無事に暇を取つたであらうが、女は若旦那に惚込んでゐて、何も要求せず、唯大聲を擧げて泣くばかりであつた。それで警察の手を借りて彼女を還さけて仕舞つた。

五六年級でコーリヤの友達の大抵はもう既に惡の智慧の果實を味つてゐた。その時分彼等の學校では總ての秘密のものゝ名を知つてゐることが大した鼻の高い男性の衿であつたアルカーシヤ・シユカーリンは危険でないまでも兎に角花柳病に罹つて、丸三月は總ての上級の尊敬の對象となつた。(當時はまだ中隊がなかつた)多くの者は娼家を訪れ、自分の遊蕩のことに就いてはデニス・ダヴィドの時代の輕騎兵よりもつと遙かに美しく大袈裟に話した。こんな遊蕩が彼等には勇壯と男一匹になつたこととの極點だと思はれてゐた。

かくしてある時——グランドウィシェフが説伏せられたと云ふよりは、どちらかと云へば彼自身がせがんでアンナ・マルコーヅナ樓へ出掛けた。誘惑に對する彼の抵抗はそれ位に弱いのであつた。この夜をば彼は恰度酔拂つた夢か何かのやうに漠然として恐怖と嫌厭とを以て何時も思出した。元氣をつけるため馬車の上で本統の南京虫のやうな厭な香のするラム酒を飲んだこと、その御蔭で胸の悪くなつたこと、大きな廣間に這入つたところが、其處には釣燈リュストラや壁の燭臺の燈火が焰の輪のやうに旋回し、女が奇怪な薔薇色や青や紫の斑點のやうに動きまわり、頭や胸や腕の白さが眩暈するほど芳烈な勝利の輝きに閃めいてゐたことなどを、辛うじて思出すことが出来た。友達の誰かこの奇怪な人物の一人の耳に何か囁いた。女はコーリヤの側に駆け寄つて云つた。

『ねえ生徒さん、お友達の方が云つてゐますよ、あなたはまだ無垢だつて………参りませう、よろしく教へて上げますわ』

この文句は優しく語られたのであつたが、しかしアンナ・マルコーヅナ樓の壁はこの文句を既に數千度も聞いてゐた。その先起つたことは思出すのもつらく苦痛なので、コーリヤは追憶の途中で疲れ、努力して空想をば何か他のものに向けた。唯彼が漠と覺えてゐたのは

旋回し散り擴がる洋燈の光の輪、執拗い接吻、極りの悪い接觸、それから突然の鋭い痛みこの痛みのため彼は蕩死したいやうな、恐怖の餘り叫出したいやうな氣になつた。そしてその後で着物の釦をかけやうとしてどうしても出来ない青褪めた震へた自分の手を彼自身驚いて跳めた。

勿論總ての男はみな最初の後愁 (*tristitia post coitus*) を経験したのであつた。しかしこの偉大な道徳的苦痛、その意義と深遠さに於ては極めて眞面目なこのものも大變早く過ぎ去つて仕舞ひ、唯大多數の者に於てはその後長い間、時としては一生涯、その瞬間の後の詰りなさ間の悪さの形となつて残るのである。間もなくコーリヤもこれに慣れて大膽になり、女と馴染み、彼が娼家に遣つて來た時、みな女、殊にウエールカが一番に『ディーちゃん、お前の情夫いひよとがお出でだよ』と叫ぶのが大變嬉しかつた。このことを友達に話しながら、假想の口髭を捻ねるのが愉快であつた。

三

時刻はまだ早かつた——八月の雨の降る夜の九時頃であつた。アンナ・マルコーヅナ樓の

火の點つた廣間は殆ど空虚であつた。唯すぐ戸口に若い電信局員が遠慮深うに不細工に椅子の下へ足を曲げて坐り、上流社會では聯舞の幕間に於けるカドリーンとも考へられる隨意的な世間話を太り肉のカーチカと結ばうと努めてゐた。足長のワーニカ・フスターニカ老人は部屋中をうろつき廻り、あれやこれやの女の側に坐つては、べら／＼と無駄口を利いて女を面白がらせてゐた。

コーリヤ・グラドウィシェフが玄關に這入つた時、彼を一番に見付けたのは丸い目のウーニルカで、彼女は例の乗馬服を着てゐた。彼女はきり／＼舞してとび跳ね、手を叩つて叫び出した。

『ヂューちゃん、ヂューちゃん、早く被居い、お前の情夫のお越しだよ。生徒さんなの、好い方ね』

しかしこの時ヂューニカは廣間にゐなかつた。その前にもう肥えた列車長が彼女を聘んでゐた。

政府の蠟燭を盗み賣するこの好い年配の生帳面な勿體らしい人間は、自分の汽車に乗遅れるのを心配して決して此處に四十分以上居らず、しかも絶えず時計を眺めてゐたから、

客としては大變都合の好い客であつた。彼は近來きちんと四本の麥酒を飲み、歸る折には屹度菓子代として女に五十哥、シメオンには二十哥の纏頭を與へた。

コーリヤ・グラドウィシェフは單獨ではなく、同級生のペトロフと一緒にあつた。この少年はグラドウィシェフの誘惑にまけて始めて娼家の鬨を跨いだのであつた。多分彼もこの瞬間一年半前にコーリヤ自身が経験したやうな、足が震へ、口が乾き、洋燈の火が丸い輪になつて眼の前に旋回した、あの激しい馬鹿氣な熱病のやうな状態にあつた。

シメオンは彼等の外套を脱がして、肩章や釦が見えないやうに、別に片脇に匿した。

この氣むづかしい男は大學生達が放縱な悪戯をしたり、話の中に譯の分らない言葉遣ひをしたりするので大學生に對して好感を持つてゐなかつたが、また同様に制服を着たこんな少年が娼家に來るのも好まなかつた。

『何の碌なことがあるものがね』と彼は時として朋輩に陰鬱に話した『あんな青二才が遣つて來て自分の長官と鼻を衝合さうものなら。それこそばつたり、家は閉鎖さ。三年前にルベンディヒがやられたね。閉鎖は勿論何でもなかつたさ——今は他人の名に書換へたからねだか一月半留置場へ引張られたり、大分の金を遣つたりさ。ケシベシユ一人にでも四百

も撒いたものだ。さうでなければまたこんなことも起るさ、あんな子豚野郎が何か病氣を背負つてべそく泣く『あゝ父さん、あゝ母さん、死ぬ』何處で貰つたか云へ、この馬鹿奴』『彼處の……』そこでまた引張られる。遣り切れたものぢやない』

『すつとお通んなさい、お通んなさい』と彼は氣むづかしく幼年學校生徒に云つた。

生徒は煌々とした光に眼を聳めながら這入つて來た。元氣附けに酒を飲んだペトロフはひよろ／＼として青褪めてゐた。彼等が『貴族の饗宴』の額の下に坐ると、直ぐウエールカとタマーラの二人が兩脇に侍つた。

『煙草を御馳走して頂戴な 綺麗なブリュネットの生徒さん』とウエールカはペトロフに向つて云つて、無意識のやうに彼の足に自分の大夫な、白い肉襦袢のびつたりした温い太腿を押しつけた『優しらしい方ね』

『デューニャは何處』とグラドヴィシエフはタマーラに訊ねた『誰かお客かい』

タマーラは凝と彼の眼を見詰めた——あまり凝つと見詰めたので、少年は變な感じがして顔を背向けた。

『いゝえ、お客なものですか。あの女は今日一日頭が痛んだの、廊下を通る時おばさんが

急を扉を開けたので、思はず額を打つけたの。それで非道く頭が痛み出したの。可哀さうに一日頭を冷して寝てゐたわ。どうなすつたの、待たれないの。お待ちなさいよ、五分も経てば出て來るから。きつとお氣に入るでせう』

ウエールカはペトロフにべたついた。

『あなた、あなたは何て可愛いお坊ちやんでせう。私はこんな色の白い黒髪の方が大好き嫉妬深くて情が熱いんですもの』

そして突然低聲で歌ひはじめた。

わたしの好いお方、

黒髪のお方、

嘘も吐かねば、

苦勞をこらへ、

外套や洋袴を

女のためには質に置く。

『あなた何てお名前』

オマツツを
ワザリヨウワサ
コトコトコトコト

『ゲオルギイだ』と呟れた幼年學校生徒らしい聲でペトロフは答へた。

『ヂョールチック、ヂョーロチカ。あゝ、本統に好いのね』

彼女は突然彼の耳許によつて、狡猾さうな顔をして囁いた。

『ヂョーロチカさん、私の處へ被居いね』

ペトロフは眼を落してむにや／＼と云つて、

『僕は分ら……その、友達がどう云ふか……』

ウエールカは大聲で笑つた。

『おや／＼飛んだ御挨拶、こんな一人前の青年であつて。ヂョーロチカさん、あなた位の方は田舎ではもうお嫁さんがありますよ、それに『友達がどう』だつて。あなたはまだばあやか乳母の許しが入るんでせう。タマラ、ねえ考へて御覺、私がこの人を誘つたらね、『友達がどうだか』ですつて。もし友達さん、あなたはこの人の附添ですの』

『煩さい、畜生』とペトロフはまるで喧嘩の前の生徒のやうにぎこちなく濁聲で怒鳴つた生徒の方へ高いよち／＼した一層に白髪カゲツトのふえたワニーカ・フスターニカが近寄つて來て、その長い細い頭を脇に傾け、愛嬌のある擧め面をして、くど／＼と泣言を並べ立てた。

『生徒諸君、有識階級の精華、未來の造兵大監とも云ふべき、高等教育を受けた若い方々この飲食店の土着民である老人に一本の親切な古煙草を御馳走して下さいませんか。空つ穴なのです。Omnia mea meum porto 譯註、凡ての自分のものは携帯してゐるの意、轉じて全財産は腦裡にありつて譯です。だが煙草には眼がないんです』

そして煙草を貰ふと、急にだらしない勝手な姿勢に立上つて、曲つた右足を前に突出し脇に手を突張り、しなびた假聲で歌ひはじめた。

昔は宴會を開いて

三鞭酒を河のやうに注いだが、

今ぢや麵麩かけの片もない、

酒一杯もない、おい兄弟

昔は「サラトフ」軒へ行けば

門番が矢のやうに飛んで來たが、

今ぢや頸筋とつて追出す。

酒一杯呉れ、おい兄弟。

四四六

『諸君』と突然ワーニカ・フスターニカは感傷的に叫んで、歌を中絶し胸を打つた『我輩は今諸君を見、諸君が未來のスコベールフヤグールコ將軍であることを知つてゐる。しかし我輩とでもある點に於て國家の干域である。我輩が山林官の助手たる勉強をしてゐた當時、わか山林局は陸軍のものであつた。それ故ダイヤモンドを鑄めた諸君の胸の黄金の扉を叩いて我輩は願ひする、山林局の少尉補の武装に些かの酒精を御喜捨下さい、それはお坊様でも召上るんです』

『ワーニカ』と向ふの端から肥滿ふとつちよのカーチカが叫んだ『若い士官さんに稻光を見せてお上げ、でなけりや唯で人の錢を取るなど泥棒ですよ』

『唯今』とワーニカ・フスターニカは陽氣に答へた『高貴の慈善家の皆さん、御注意下さい。活人畫、六月の夏の日の夕立であります。ワーニカ・フスターニカと云ふ匿名の隠れた戯曲家の作にかゝります。第一幕。』

『美しい六月の日でありました。眞晝の太陽の燃え輝やく光は花咲く牧場や郊外を照ら

してゐました……』

ワーニカ・フスターカのドンキホーテのやうな顔は皺だらけな甘い微笑に相恰がくづれ眼は半圓形に細くなつた。

『……ところが遠い地平に最初の雲が現れました。雲は大きくなり、少しづつ青い穹窿を被ひ巖のやうに曇り重りました……』

ワーニカ・フスターニカの顔からは次第に微笑が消え、段々と眞面目に峻険になつて來た。

『遂に黒雲は太陽を被ひました……厭な前兆の暗黒となりました……』

ワーニカ・フスターニカは全く兇惡な顔をした。

『……はじめて雨の雫が落ちた……』

ワーニカは指で椅子の背をつゝいた。

『……遠方に最初の電が閃めいた……』

ワーニカ・フスターニカの右の眼はすばやく瞬き、口の左隅が痙攣した。

『……次いで雨は盆を覆す如く降り、俄かに紫電が閃めいた……』

四四七

そして非常な巧妙と迅速さをもつてワーニカ・フスターニカは眉、眼、鼻、上唇、下唇と連続した動作で電光の曲線を描出した。

『……天地を震動する落雷の響はどどどと轟ろいた。榎の古木は恰も脆い葦のやうに地上に倒れた……』

そしてワーニカ・フスターニカは彼の年齢には思掛けない軽快さと大膽さで、膝も指も曲げず、唯頭を下に曲げた丈で、像のやうに真直に突然床に仰向に倒れた。しかし直ぐに手早く跳ね起きた。

『しかし夕立は次第におさまる。電光の輝き方も次第に遠くなる。雷の轟きも次第にかすかに恰度満腹した野獸のやうにうらうらと響く。黒雲は霽れる。太陽の光がはじめて洩れた……』

ワーニカ・フスターニカは酸ばいやうな微笑をした。

『かくて遂に太陽は再び洗はれたる地上に輝きました……』

そして無智な幸福な微笑は再びワーニカ・フスターニカの年とつた顔に溢れた。

生徒達は彼に二十哥宛與へた。彼はそれを掌に載せ、片手で空中に手品の恰好をし、フイン

フインと云つて二本の指を鳴らすと、貨幣は無くなつた。

『タマーロチカ、それは殺生だ』と彼は咎めるやうに云つた『殆ど尉官である哀れな休戦軍人からたけなしの錢を奪つてよく恥しくないことだね。何故こんな處に匿すのです』

そしてまた指を鳴らして、タマーラの耳の中から貨幣を取出した。

『直きに戻つて來ます、私がゐないからつて退屈しては好けませんぜ』と彼は青年達を宥めた『がお待ち下さらんでも別に異存はありません、では失禮』

『ワーニカ・フスターニカ』と白いマーニカが背後から叫んだ『私にね十五哥で糖菓を買つて來て頂戴な。ポマードをね、十五哥で。さあ、お受けなさいよ』

ワーニカ・フスターニカは投げた十五哥銀貨をうまく宙で受止め、滑稽な御辭儀をし、レツエランス緑の縁筋のついた制帽を横様に深く被つて出て行つた。

生徒の側へ丈の高い年増のヘンリェタが來て、同様に煙草を貰ひ、欠伸をして云つた。

『せめて舞踏でもやりませうよ、ねえ。でなけり姐さん達は坐つてるばかりで、仕舞ひには退屈のあまり死んで仕舞ひますわ』

『さあさあどうか』とコーリヤは賛成した『ワッツを演つてくれ給へ、それから何かと』

四五〇
樂手は演奏しはじめた。女達は互に手をとつて例の通り行儀よく、背を真正に伸ばし、眼は恥しさうに下に垂れて廻りはじめた。

コーリヤ・グラドウィシェフは大變舞踏が好きなので耐らなくなり、タマーラを誘つた。彼は去年の冬以來彼女が他の女よりは輕快に巧妙に踊るのを知つてゐたのであつた。彼がワルツで踊り廻つてゐた時、肥えた列車長が舞踏組の間を敏捷に潛りながら廣間を通り抜けた。コーリヤはそれに氣付く間もなかつた。

どれ程ウェールカがペトロフに付き纏つても、どうしても彼をその席から立たせることが出来なかつた。先刻の輕い酔も今は全く彼の頭から抜けて仕舞つて、何のため此處へ来たかと云ふことが彼には益怖ろしく、益不可能な、益奇怪なことに思はれた。彼は此處の誰も氣に入らぬと云ひ、頭痛か何かに託付^{かこつ}けて、歸つたかも知れなかつたが、彼はグラドウィシェフが自分を歸して呉れないことを知つて居り、また第一には席を立つて一人で數歩足を運ぶのが耐らなく重苦しいやうに思はれた。またその外コーリヤにこのことを切出す元氣がないのを感じた。

舞踏が濟んだ。タマーラはまたグラドウィシェフと一緒に坐つた。

『本統にチーニカが今迄來ないとはどうしたんだ』とコーリヤは辛棒し切れず訊ねた。

タマーラは局外者には不可解な問を眼に浮べてちらとヴェールカを眺めた。ヴェールカは直ぐ睫毛を伏せた。これは、然り、歸つたと云ふ意味であつた。

『私はすぐ行つて呼んで來ますわ』とタマーラが云つた。

『まあチーニカが本統にお氣に入つたのね』とヘンリッタが云つた『私を招んで下されば好みに』

『好いよ、この次にね』とコーリヤは返事して苛々と煙草を燻らした。

チーニカはまだ衣裳を着けにかゝらず、鏡の側に坐つて白粉をつけてゐた。

『何か用、ターちゃん』と訊ねた。

『お前さんの處へ生徒さんが遣つて來ましたよ、待つてゐますわ』

『あゝ、あの去年の赤ちゃんなの、厭な奴』

『それもさうだがね。一人前の惡戯小僧になつて、男振りもよくなり、大きくなつたのよ立派なものだわ。若しお前さんが厭なら私が自身で行つてよ』

タマールはチェーニカが眉を擧めたのを鏡で見た。

『いや、お待ち、タマール、そんな必要ないわ。私が見ませう。此處へ寄こして頂戴な。私が病氣だと云つてね。頭が痛むと云つてね』

『私はもう先刻にさう云つて置いたわ、ゾーシャが扉を開けるはずみにお前さんの頭を打つたので、お前さんは寝て冷してゐるつて。でもあの兒はそんなにしなくつてもいいでせう、チェーちゃん』

『好いかわるいか——お前さんの知つたことでないぢやないの、タマール』とチェーニカはつんげんと答へた。

『では本統にお前さんにはまるでまるであの兒が可哀さうぢやないの』

『ぢやお前さんには私が可哀さうぢやないの』と云つて彼は自分の咽頭についてゐる赤い筋に手をやつた『自分が可哀さうぢやないの。この不幸なリューブカが可哀さうぢやないの。パーシャが可哀さうぢやないの。お前さんは心太こころごと（註、虛弱無能の人に對する罵詈）だ、人間ぢやない』

タマールは狡猾さうに鷹柄に微笑んだ。

『いゝえ、いざと云ふ場合なら私は心太ぢやありませんわ。今に解るでせうよ。チェーちゃん。だが喧嘩は止ませうね——本統にこの世もあんまり楽しいものぢやないのね。いゝわ、直ぐ行つてあの人を此處へ寄こしませう』

彼女が出て行つた時、チェーニカは水色の釣洋燈の火を細くし、夜着を着て横はつた。一瞬時經つとグラドゥィシェフが這入つて來、それに續いてはタマールがベトロフの手を引張つて來た。彼は足を踏張つて床から頭を擡げなかつた。その背後からは斜視の鵝母ゾーシャの紅く尖つた狐のやうな顔が突き出てゐた。

『まあ結構でございますこと』ゾーシャは世話焼をした『見ても氣持ようございます、二人の立派な若様に二人の素晴らしい嬢様とは。まるで花朵でございます。何を御馳走致しませう。麥酒、それとも御酒を御注文でございますか』

グラドゥィシェフの隱囊には短かい今迄の生涯に一度もないほどの澤山の金錢があつた。それは大枚二十五留で、彼は一遍に播散らして仕舞はうと思つてゐた。麥酒は虛元氣で飲みはしたものの、その苦い味が耐らなくて、こんなものをどうして他の人が飲むのか不思議に思はれた。そこで古い道樂者のやうに胸糞惡るさうに下唇を突出して、茶かして云つ

た。

『いづれいかさま物だらう』

『どう致しまして、どう致しまして、あなた立派な旦那衆のお褒めに預つてゐますので……甘口では、カホール、教會用、テネリフ、佛蘭西ものではラフィットがございます。ポルトワインもございます。レモナードとラフィットは娘さん達が大好物でございます』

『幾許だね』

『餘分には頂きません。何處の上等の店で賣つてゐますのも同じで、ラフィットが一本五留レモナードが五十哥の四本で二留、皆で僅か七留でございます』

『およしよ、ゾーシヤ』とヂェーニカは虚心で彼女を制した『子供を馬鹿にするなんて恥しいぢやないの。五留でも澤山。御覧よ、立派な方々で……』

しかしグラドゥイシェフは赧くなつて、氣にかけない振で食卓の上に十留札を抛り出した。

『何のいさくさがあるものか。好いよ、持つて來給へ』

『では玉代も序でに御一緒に頂きます。どう遊ばしますか、若旦那、時間限でございます』

か一晚でございますか。御存じでもございませうが、時間限は二留、一晚は五留でございます』

『いよよ、いよよ、時間限ですよ』とヂェーニカが赫として嘴を入れた『いけ執拗いね』

酒が運ばれた。タマーラはその外お菓子もせがんだ。ヂェーニカは相手に白いマーニカも聘んで呉れるやう願つた。ヂェーニカ自身は酒も飲まず、床からも起上らず、部屋の中は暑かつたのに拘らず、始終鼠色のオレンブルグ肩巾にくるまつてゐた。彼女は凝と眼も離さずグラドゥイシェフの男らしくなつた、日に焦けた、綺麗な顔を眺めてゐた。

『どうしたんだい、君』とグラドゥイシェフは寢床の上に並んで坐り女の手を撫でながら訊ねた』

『別に何も……頭が少々痛いんですの。ぶつゝけたもんですから』

『あまり氣にかけない方が好いよ』

『えゝあなたを見たらもう樂になりましたわ。随分長らく被居いませんでたわね』

『どうしても暇がなかつたんだよ。兵營でね。君も知つてゐる通りさ……日に二十露里の大汗仕事だ。野戦術だの編制學だの衛戍學だのと丸一日學課づくめなんだよ。計算が山程

ちるんだ。朝から晩までいぢめぬかれて夕方にはへとくになつて仕舞ふことがよくあるよ。演習にも行つた。何しろ樂ぢやないよ』

『まあお可哀いさうにね』と突然白いマーニカが手を叩いた『何のためあなたのやうな好いお方をいぢめるんでせうね。若しわたしにあなたのやうな弟か息子があつたら、わたしの胸はたちまち張裂けて仕舞ひますわ。御健康を祝ひませう、生徒さん』

乾杯した。チェーニカは矢張りじろく〜と氣を附けてグラドゥイシエフを眺めてゐた。

『君はチェーニカ』と彼は杯を差出しながら訊ねた。

『欲しくないの』と彼女は物倦げに答へた『だが兎に角皆さん、飲んだり喋つたりしたんですから、もうお引けにしませう』

『あなたは夜通し居て下さるんでせうね』と彼女は皆が出て行つた後でグラドゥイシエフに訊ねた『ねえあなた、心配しないで好いわ。若しお錢が足らなけりや私が引受けてあげるから。そら御覧、あなたがあんまり好い男だから、女があんたのためならお錢など惜かかないんだわ』と云つて彼女は笑つた。

●グラドゥイシエフは彼女の方に振向いた。チェーニカの變な調子は無頓着な彼の耳をさへ驚

欠

欠

眼を瞑つて、眼を瞑つて』

彼女は光を明くして元の場所に歸り、自分の好きな姿勢の安坐を組んだ。二人とも黙つてゐた。遠く數室隔つた處で破損した洋琴の音が聞え、誰かの顫えた笑聲が響く、また他の側からは唄と早口の陽氣な話聲とが聞えた。文句は聞えなかつた。何處か遠く離れた街路で辻馬車の響が轟ろいた。

『今に他の人と同様に病氣を傳染してやるぞ』と彼女は考へながら、深刻な眼差で彼のがつしりした足、未來の拳闘家とも云ふべき立派な、胴體、背後に投げた腕、肘の屈曲部より上にふつくり固く緊張した臂などをすつと眺めた『だが何故自分にはこの男がこんなに不憫なんだらう。この男が好い男だからか。いやさうぢやない。自分にはそんな感情はとつくの音無くなつてゐる。ぢや彼が少年だからか。ほんの一年と少し前に彼が夜自分の處から歸る時自分は隱囊カゴに林檎を入れてやつたぢやないか。今云ふことの出来ることをその當時何故彼に云ひ得なかつたか。それとも云つたつて彼が信じないか。それとも腹を立てるか。他の女の處へ行くだらうか。晩かれ早かれどの男にもその順番が來るんぢないか。彼は自分を金で買った——これが許し得ることだらうか。それとも彼も他の連中と同様盲

目的にやつたことだらうか』

四六〇

『コーリヤ』と彼女は静かに呼んだ『眼をあけて好くてよ』

彼は吩咐け通りに眼を開けて、彼女の頭に腕をまとい、少し自分の方に引寄せて、襦袢の合目の胸に接吻せうとした。彼女はまたしとやかに、しかし嚴然と彼を押しつけた。

『いゝえ、お待ち、お待ち、わたしの云ふことを聽いて、も少し……ねえ、あなたは何のため私達の處へ、女の處へ遣つて被居るんですの』

コーリヤは靜かに皺噎れた笑聲を出した。

『馬鹿だね。ぢや皆は何のために來るんだい。僕だつて男ぢやないかね。僕だつてもう年頃さ、この年輩になれば男にはみな起るんだよ、その、ある要求……女に對しての……、そんな厭がらせはよさうぢやないか』

『要求ですつて。唯要求なの。例へば私の寢臺の下にある器に對すると同じ』

『いや、そんなことがあるものか』と優しく笑ひながら答へた『僕は君が好きなのさ。最初から。君に少々戀してゐるとさへ云へる。少くとも他の誰とも僕は遊ばないからね』
『それはそれで好しとしましょう。では最初の時は單に要求だつたのすか』

『いや、要求でもないんだが、何だか漠然と女が欲しかつたんだ……友達連中も勸めるし……大抵の奴は僕よりも前から來てゐるんだよ。それで僕も』

『ぢや最初は恥しくなかつたの』

コーリヤは當惑した。この質問はまつたく彼にとつては不愉快で苦痛だつた。これは彼の僅かの經驗から彼がよく知つてゐる、空虚な香氣な寢物語ではなくて、何か違つたものと重大なものであるやうに感じられた。

『假りに恥しくなかつたとしても、何だか矢張極りが悪かつたよ。僕はあの時景氣附けに酒を呑んだ』

ヂェーニヤはまた横に寢轉んで肘枕をし、また上の方から彼を近く凝と眺めた。

『ぢやねあんた、聞かして頂戴ね』と彼女は聞えない程に云つたので、生徒は辛うじて彼の言葉を聞取ることが出來た『も一言聞かして頂戴な、あんたは金錢を拂つた、あの二留と云ふ目腐れ金を、解つてゐるでせう、愛のために、私があんたを抱へたり接吻したり、あんたに自分の身體を任せるために拂つたんですね。そんなことのため金錢を拂つてあんたには恥しくなかつたの。ちつとも』

四六一

『おやく、何て變な問を今日君は擔ぎ出すんだらう。だつて皆金錢を拂ふんぢやないか僕でなければまた他の人が金錢を出す——君にはどのみち同じことぢやないか』

『あんたは誰かと戀仲になつたことがあつて、コーリヤ。白狀なさい。本統にでなくても、例の精神的にでも。女の御機嫌をとつた？ 花輪か何かを送つた？ 月夜に手をつないで散歩した？ そんなことがあつて』

『勿論さ』とコーリヤはしつかりした低音で答へた『若い時分は色んな馬鹿氣な眞似をするものさ、解り切つた事だ』

『従妹か何か？ 家庭教師？ 女學生？ 女生徒？ そんなことがあつて』

『そりや勿論さ。誰にだつてあることだよ』

『それであんたはその人に手を付けなかつたの。勘忍してやつたの。それでその人があんなに斯う云つたらどうなの、私を自由になさい、その代りに留下さいつて。あんたはその人に何と云つたでせうね』

『君の云ふことは譯が分らないよ、ヂューニカ』と突然グランドウィシエフは腹を立てた『何をそんな片意地を云ふんだい。何と云ふ喜劇をやるんだい。ほんとうに僕は直ぐ歸る』

『待つて、待つて、コーリヤ。もう一言、もう一言、最後の、本統に最後の問を』

『もう止せよ』とコーリヤは不興氣に呟やいた。

『あんたには今迄ちつとも想像出来なかつたんです。だから、今、ほんの一瞬間でも想像して御覽なさい、あんたの家が急に貧乏になつて零落れる……あんたは筆耕で金儲をしなくてはならなくなる、それとも指物師か鍛冶屋の仕事をしてでも好い、そしてあんたの姉妹が私達みなやうに墮落したとする、さう、さう、あんたの骨肉を分けた姉妹がですよ、無頼漢か何かに瞞まされて遊びまわる、仲よくね。そしたらあんたはどう云ふでせう』

『馬鹿な、そんながあるものか』とコーリヤは慳貪に遮つた『だが兎に角、澤山だ、僕は歸る』

『歸つて頂戴、お願いですから。彼處の鏡の側にチョコレートおまこの箱に十留入つておますからね、それを持つて被居いね。私には要がないの。それでねお母さんに金の象眼のある鼈甲かめこうの白粉箱を買つて上げて頂戴。それとも小さな妹さんがありなら綺麗な人形を買つて上げて頂戴。そして死んだある娘からの形見だつてね。さあお歸り』

腹を立て、顔をしかめたコーリヤは殆ど彼女に觸らないやうにうまく身體を捻ぢて一躍

びで寢臺から跳下りた。彼は寢臺の足許の毛氈の上にながつしりした若盛りの綺麗な體格をして立つてゐた。

『コーリヤ』と彼女は靜かに拗念く優しく彼を呼んだ『コーレチカ』

彼は女の呼聲にふり反つて、溜息でもつくやうに短かく斷々に息をした。彼はこれまで生涯に於て何時何處でも、繪でさへも、今涙ぐんだチューニカの眼の中に認めたやうな優しさ、悲しみ、女らしい無言の怨めしさの美しい表情を見たことがなかつた。

『喧嘩は止さうね、チューネチカ』と彼は優しく云つた。

彼女は、手を頸にかけ、頭を腕の上に押しつけた。かうして暫時黙つてゐた。

『コーリヤ』とチューニカは突然靜かに訊ねた『あんたは病氣が恐くはない？』

コーリヤは戰慄した。ある冷たい凍るやうな恐怖が彼の心中に閃めいた。彼は直ぐとは返事をしなかつた。

『勿論それは怖ろしいよ。怖ろしいよ。だが僕は君の處へだけ來るんだ、君の處へだけ。』

君は僕に本統のことを云つて呉れるだらう』

『え、云ひますわ』と彼女は考へ込んで云つた。そして其處で早口に、意識して、恰度自分の言葉の意義を秤るやうに附け加へた『え、勿論、勿論、言ひますわ。であんたは何時か微毒つて病氣がどんなものか聞いたことがあつて』

『聞いたとも。鼻が崩れるんだ』

『いゝえ、コーリヤ、鼻ばかりぢやありませんよ。人間全體が病氣になるんです。骨までも、血管までも、脳髓までも。ある醫者はこの病氣が治療出來るなど、出鱈目を云つてゐますがね、馬鹿なこと、決して癒らないんです。人間が十年二十年三十年と腐つて行くのです。何時麻痺が來るか解らない。顔の右半分、右手、右足が死ぬとすれば、生きてゐるのは人間ではなくて、何か半分のもんです。半人半屍です。大抵のものは氣が狂ひます。そしてどの人も知つてゐますよ、どの人もこの病氣にかゝつた人は知つてゐますよ、若し飲食ひ接吻、單に息をしてさへ、何時周圍の人、身内のもの、姉妹や女房や息子に病氣を傳染するかも知れないと云ふことを。微毒患者にはみな片輪や月足らずや瘰癧や肺病や白痴の子が生れる。それ、コーリヤ、微毒とはこんなものです。で、今』とチューニカは突然

急に身體を真直にし、コーリヤ。肩を緊く握んで、彼を自分の方に向けた。そこで彼は女の悲し氣な陰鬱な異常な眼の輝きのため殆ど眩しいほどであつた『今わたしはあなたに打明けますが、私はもう一月以上この厭な病氣にかゝつてゐるんです。そのため私はあなたに接吻するのを許さなかつたのです』

『笑談だらう。君はわざと僕にからかつてゐるんだ、ヂェーニヤ』と機嫌の悪い驚いて面を喰つたグラドヴィシエフが呟やいた。

『笑談ですつて。此方へ被居い』

彼女は無理に彼を立上らせ、燐火をすつて云つた。

『さあよく御覽なさい、私が見せてあげるのを』

彼女は廣く口を開いて、喉頭が光りで見えるやうな風に火を持つて行つた。コーリヤは眺めて逡巡しりぞみした。

『あの白い斑點が見えるでせう。それが微毒ですよ、コーリヤ。解つたでせう。一番怖ろしい一番重い微毒です。さあ着物を着て神にお禮を仰有い』

彼は無言でヂェーニカを見もせず、洋袴に足も通らないほど周章して、着物を着はじめ

た。彼の手は震へ、下顎は躍つてゐたので、齒が上下衝突して鳴つた。ヂェーニカは頭を後に投げて云つた。

『お聞きなさい、コーリヤ、あなたが正直な女に當つたのはあなたの幸福ですよ、他の女なら容赦はしませんからね。私の云ふことが聞えるでせうね。あなた方は私共の貞操まことを破つて後で家から抛り出し、その後で二留を出して遊びに来るんです。私達は何時も——解るでせうね』と彼女は急に頭を擡げて『私達は何時もあなた方を憎んで、決して容赦はしないんです』

半分着物を着たコーリヤは突然身装みづくらひをやめて、ヂェーニカと並んで寢臺に腰をかけ、掌で顔を蔽つて、眞剣に、子供のやうに泣き出した。

『どうしよう、どうしよう』と彼は囁いた『それは本統です。何と云ふ卑劣な事だ。自家うちでも、自家でもそんなことがあつた。ニューシヤと云ふ女中がゐました、またアニータ姐やとも云つて、綺麗な女で……僕の兄が居ましたが、士官で、兄が歸つて行くと、その女は妊娠して、母が追出しました、さうだ、追出しました、家から抛り出しました、雑巾か何ぞのやうに。あの娘は今何處にゐるでせう。父も、同じやうに女中と』

半分裸かのチェーニカ、この無神論者の、悪口屋の喧嘩好きのチェーニカが突然寢床から起上つて、生徒の前に立ち、悠々と殆ど嚴かなほどに十字を切つてやつた。

『神よこの少年を守り給へ』と彼女は深い温情と感謝の籠つた表情で云つた。そして直ぐ扉口に跳んで行つて、戸を明けて叫んだ。

『お婆さん』

呼聲に應じてゾーシヤが來た。

『どうかね、ねえさん』と、チェーニカが云つた『行つて見て來て頂戴ね、誰か暇な人がないか、タマールペトラか白いマリーニカか。そして手すきの人を寄こして頂戴』

コーリヤは背後で何か呟やいたが、チェーニカは故意と聽かなかつた。

『どうぞ早くね、ねえさん、願ひですから』

『只今、只今、』

『何故、何故、君はそんなことをするの。チェーニヤ』とグラドウィシェフはふさいで訊ねた

『さあ、何のためだ。君は今のことを話す積りかい』

『お待ちなさい、あんたの關したことぢやないんですから。私はあんたに不愉快なことは

何もしませんからね』

暫時して白いマリーニカが褐色の滑らかな、故意と質素な、そして故意とびつたりとした短かい女生徒の着物を着て遣つて來た。

『何か用なのチェーニヤ。それとも喧嘩でもしたの』

『いゝえ、喧嘩したんぢやありません。マリーちゃん、私は頭が大變痛むの』とチェーニカは落着いて答へた『それでね、私のお友達が私を大變冷淡だと思ひなさるの。願ひですからね、マリーちゃん、この方のお對手になつて私と替つて頂戴ね』

『お止しよ、チェーニヤ、お止めよ』とコーリヤは眞剣な苦惱の調子を帯びて云つた『僕はすつかり解つたよ、すつかり。もう入らない。いぢめないでね、僕を』

『何も解りやしないわ、どうした事だか』と輕薄なマリーニカは手を振つた『可哀相な娘に何か御馳走して下さらない』

『ぢやお歸り、お歸り』とチェーニカは優しく彼女を歸らせた『私直ぐ行きますわ。一寸笑談をして見たのさ』

既に着物をつけた彼等は廊下と寢室との間の開いた戸口に長い間立つて、無言のまま、悲

しげに顔を見合してゐた。そしてコーリヤは次のやうなところを理解したのではないが感知した。それはこの刹那に於て彼の心中に、彼の全生涯に強い力を及ぼすところのある人なる轉機の一つが完成せられつゝあると云ふことを感じた。

その後で彼はデニーニヤの手を堅く握つて云つた。

『許してお呉れ。君は許してくれるだらうね、デニーニヤ。許してくれるかい』
『えゝ、えゝ、坊ちゃん、許しますとも』

彼女は優しく靜かに母親のやうな風で彼の短かく散髪した剛い頭を撫で、軽く彼を廊下に押しやつた。

『これから何方へ被居るの』と彼は戸を半分開けて背後から訊ねた。

『直ぐ友達を引張つて家に歸ります』

『御隨意にね。では御機嫌よう』

『許して呉れ給へ、許して呉れ給へ』とコーリヤは女に手を伸べながら今一度繰返した。

『前にも云つた通りです。あなたも私を許して頂戴ね。ではもうお目にかゝりますまいね』
そして彼女は戸をしめて獨り部屋に残つた。

廊下でグラドウィシユフはまごついた。それはベトロフがタマールと一緒に入つた部屋をどうして見付け出すか解らないからである。しかし鴉母が彼を助けて呉れた。ゾーシヤは大急ぎで、大變心配さうなざわ／＼した顔付で彼の側を通りかゝり、

『あゝ、あなたどころぢやありません』とグラドウィシユフの間に劍突をくれて『左手の三番目の戸ですよ』

コーリヤは教へられた戸口に近寄いて叩いた。部屋の中には何かの混亂たごと私語とが聞えた。彼は今一度戸を叩いた。

『ケルコヴニス君、開けて呉れ給へ、僕だよ、ソリテロフだ』

こんな種類の遠征に出掛ける幼年學校生徒の仲間では何時もお互に變名へんみょうで呼び合ふ習慣があつた。これは風紀係りの眼を竊む陰謀とか策略とか、乃至は家族の知己に偶然出喰して自分の名譽を毀損することを恐れるためにすると云ふほどでもなく、云はゞ一種の秘密とか變装とかの嗜好で、青年がグスタフ・エマルやマイン・リッドやルコックを耽讀した時代に既に起原を發してゐる遊戯である。

『いけません』と戸の彼方からタマールの聲が聞えた『這入つては好けませんよ。御用中』

ですから』

しかし直ぐペトロフの太い聲がそれを遮つた『出鱈目だよ。嘘さ。這入り給へ。好いから』

コーリヤは戸を開けた。

ペトロフは着物を着て椅子に坐つてゐたが眞赤になつて澁い顔をし、子供のやうに唇を脹らして、眼を伏せてゐた。

『連れて来た友達も御同様ね、文句も何もありません』とタマーラは嘲けるやうに腹を立て、云ひ出した『私はこの人は本統に男だと思つてゐたら、どうして娘つこか何かのやうさ。自分の童貞を失ふのが惜しいんですとさ。御同様に立派なお寶だわね。さあお受取りなさいよ、御自分の二留を』と突然彼女はペトロフに怒鳴りつけて、机の上に貨幣二つを抛り出した『どのみち女中か何かに呉れてやるのさ。でなけりや手袋代に貯金してお置きなさい、もぐらもち』

『何をさう悪口云ふんだい』とペトロフは眼を上げずによつ／＼云つた『僕は君に何も悪口しないぢやないか。それに何故自分から悪口を始めるのだ。僕は自分の好きな通りに行

ふ全權を持つてゐる。だが僕は君と時間を過ごしたのだから、君が受取るさ。が僕は力づくは厭なのだ。君も君だ、グラドウィシェフ、ぢやない、ソリテロフ君、君のやり方も好けない。僕はこの女が立派な女だと思つてゐたら、始終接吻ばかりして、何をする事か……』

タマーラは怒つてゐるにも拘らず噴き出した。

『まあ馬鹿ね、馬鹿ね。ぢやもう怒らないでね、あんたのお錢は頂きませう。だが覚えていらつしやい、今晚あたり惜しくなつて泣くから。ぢや怒らないでね、怒らないでね、仲直りしましょう。手を出して頂戴、私が差出してゐるやうに』

『歸らう、ケルコヴニス君』とグラドウィシェフが云つた『左様なら、タマーラ』

タマーラは總ての娼婦があるやうに錢を靴下に入れて彼等を見送つた。

彼等が廊下を通り過ぎる際に、廣間に於ける變な無言の緊張した忙しさうな光景、足音息を殺した低聲の早口の話などがグラドウィシェフを驚かした。

彼等がつい先刻繪の下に坐つてゐた邊りにはアンナ・マルコーヴナ樓の家内中や其他數人の局外者まで集まつてゐた。彼等はぎつしりと詰め合つて下に屈んでゐた。コーリヤは

好奇心を起して近より、少し割り込んで頭の間から窺いた。床の上には横になつて何だかから不自然に身を屈げてワーニカ・フスタニカが横はつてゐた。彼の顔は紫色で殆ど黒いほどであつた。彼は身動きもせず、變に小さく圓くなり足を曲げて横はつてゐた。片手は胸の下敷になり、片手は後に投げ出してゐた。

『どうしたんです』とグラドウィシェフは驚ろいて訊ねた。

ニューラが早口の途切／＼の小聲で答へた。

『ワーニカ・フスタニカはつい今此處に来て、マーニカに糖菓を渡し、その後で私達にアルメニヤの謎がけをしかけたのですよ——青い色で客間に懸つて鳴つてゐるのは何——つて。どうしても解けないんでせう。するとあの人がセリョトカ(餅、劍)——だつて云ふんです。そして急に笑ひ出し咳をし始め横にころげ出したんですが、ぱつたり倒れるともう動かないんです。巡查を呼びに遣りましたがね。あゝ怒ろしい。私は死人が恐ろしくて耐らないんですよ』

『待ち給へ』とグラドウィシェフが彼女を止めた『額を觸つて見なくちや。まだ生きてるか
も知れない』

彼は前に押出た。しかし恰度鐵の釘抜のやうなシメオンの指が彼の肘の方を握んで後に引戻した。

『好けない、窺いちやいけない』とシメオンは峻厳に命令した『お歸んなさい、旦那、此處から。あんた方の御出の場所ぢやありません。巡查が来てあんた方を證人にでも呼ぶとそれこそ學校からお拂箱ですぞ。さあさあお歸んなさい』

彼は二人を玄關まで見送り、彼等の手に外套を渡し、一層嚴格に附け加へた。

『さあ、駆足で、大急ぎで。息の切れるほど。此の次に來ても入れては遣らないよ。御同様お賢い連中さ。老耄れ犬に火酒など飲ませるからくたばるんだ』

『おい、痛い目に逢ふぞ』とグラドウィシェフが彼にからかつた。

『何だと』とシメオンが急に氣狂のやうに怒鳴つた。そして彼の黒い眉も睫毛もない眼は生徒等が遠巡したほど怖ろしい様になつた。『鼻つ柱へし折つて吠面かゝして呉れるぞ。足を引抜いてやる。何の朝食前だ。でなけりや頸の骨をへし折つてやる』

少年達は階段を下りた。

この時二人の男が階段を上に登つて來た。どちらも羅紗帽子を横さまに被り、詰襟の上

衣の前を明けはだけ、一人は青い襯衣ブル・シュ、一人は赤い襯衣の縁飾りのついたのを鈕をはづした上衣の下に着てゐた。シメオンと同じ職業の朋輩らしかった。

『どうした』と一人が陽氣に下からシメオンに向つて叫んだ『ワーニカ・フスタニカがどうしかしたのかい』

『うん、どうやら斃ねたらしいんだ』とシメオンが答へた『今の中に、兄弟、街路におつぱり出すに限るよ、でなけあ噂がうるさからうぜ。酔拂つて路でくたばつたやうに思はせりや好い』

『お前おまえが何したんぢやねえか、打殺したんぢや』

『馬鹿な。そんなことがあるものか。害のねえ男さ、まるで山羊だよ。彼奴にもお鉢が廻つて來たんだな』

『死ぬのも場所によりけりだ。とんだ場所で死んだもんだね』と赤襯衣が云つた。

『まつたくだ』とも一人のが合槌打つた『滑稽な生活をやつて罪の深い死態さ。ぢや歸らうぢやねえか、兄弟』

幼年學校生徒は一生懸命に走つた。紫色になつた顔をして床の上に圓く屈んだワーニカ

フタスニカの姿が、恰度子供の時分に死んだ人のことを夜暗い所で思出した時のやうな怖ろしさで暗の中に眼のあたり浮んで來た。

四

朝からしつこい退屈な雨が埃のやうに細かくしとくと降つた。プラトノフは港で水瓜の荷揚をやつてゐた。まだ夏の頃から彼が這入らうと當にしてゐた工場では甘く行かなかつた。一週間も経つと早や彼は労働者に對して餘りに亂暴な職工長と喧嘩して殆ど扼合ひをしないばかりであつた。一月程セルゲイ・イワノウイチはテムニコフスカヤ街の何處か裏長屋でどうにか糊口をすごし、始終市中の出來事の雜報や民事部判事室から聞出した滑稽な事件を『反響』編輯局に持込んでゐた。しかし無理な新聞仕事はとづくに彼には厭氣がさしてゐた。何時も彼は變つた事件に、爽快な野天の力仕事に、些細たりとも安樂と云ふやうな氣配のない生活に何の氣苦勞もない放浪生活に牽つけられてゐた。そんな生活に於て人間はあらゆる外部の事情を投げ捨て、自ら明日どうなるかを知らないのである。そこでドネーブルの下流から水瓜を積んだ舢舨が初めて上つて來ると、去年から馴染みで

ある労働組合に彼は乗氣になつて出掛けた。彼の快活な氣質、友情に厚い精神、計算の上
手なことなど皆彼を愛してゐた。

仕事は仲よく機敏に運んだ。一艇舟毎に五人から成る四組のものが一緒に働いてゐた。
一組が艇舟から水瓜を取出して舟縁に立つてゐる他の組に渡す。その組は今度は岸に立つ
てゐる第三組に投げる。第三組は第四組に投げる。第四組は第五組に渡し、第五組が荷馬
車の上に立つてゐて、水瓜の暗緑色のや白いのや縞のを平らな澤々した列に積むのであつ
た。この仕事は純潔な快活な大變喧嘩の起りやすい仕事だつた。しかし上手な組がやつて
ゐる時は見ても氣持が好い、水瓜が手から手へ飛ぶ、曲藝のやうな早さ巧妙さで捉まへる
繰返し繰返し絶間なく飛んで、やがて最後に車が一杯になるのであつた。唯まだ新米で手
慣れず、特別な拍子の心持がのみ込めない者には困難であつた。ことに水瓜を捉まへるよ
り投げる方がずつと困難だつた。

プラトリーノフは初めての去年の經驗をよく覚えてゐた。三度目か四度目かに彼が茫然し
て渡すのが遅れた時は随分毒々しい嘲笑的な亂暴な悪口を彼に浴せかけた。拍子よく投げ
なかつた二個の水瓜は石疊にぶつかつてぐしやりと破れ、はつとしたプラトリーノフは手に

持つてゐる分も落した。最初は彼に對して柔かくあたつてくれたが、第二日目には過失ごと
に水瓜一個につき五哥づゝ給金から差引いた。その次にそんなことが起つた際には何の勘
定もなしに直ぐ組から抛り出すと云つて嚇した。どんなに急に憎らしさが彼に起つたかと
云ふことをプラトリーノフは今でも覚えてゐる。『何だと、こん畜生、貴様達の水瓜がもつと
大切になれつてのかい。ぢやそらよ、そらよ』と彼は考へた。この激昂は一瞬間彼に力を
添へた。彼は無關心に水瓜を受取り同じく無關心に投げた。そして突然、今こそ自分は自
分の筋肉、視覚、呼吸と共に全身が労働なるものゝ眞の氣分に這入つたのだと感じ、最も
肝要なことは水瓜が幾許するかなどと云ふことはてんで念頭にない、そろすれば万事甘
く行くのだと覺つて、自ら驚いた。最後に彼が到頭この腕前をもにすると今度はそれが
彼にとつては一種の愉快な面白い體操遊戲のやうになつた。しかしこれも濟んで仕舞つ
た。そして仕舞には自分が飛んでゐる水瓜の限りまい鎖と五人から成立つてゐる機械の無
意志な機械的に動いてゐる車輪のやうに思はれ出すところまでに到達した。

彼は今第二番目の組にゐた。調子づいて俯向きに身を屈め、眼もくれずに冷たいしわし
わした重い水瓜を両手に受取つて右側に揺つて反動をつけ、同じく眼もくれずに、或は眼

の端だけで見てそれを下に投げる。そしてまた直ぐ身を屈めて次の水瓜を受取る。この時手に受取つた水瓜が手の中でべちや、べちや……と鳴るのが耳につき、直ぐ俯向うつむきに身を屈めてまた投げると吐き出す息がはあ、はあ……と音を立てるのであつた。

今日の仕事は大變有利なものだつた。四十人から成立つてゐる労働組合は大急ぎのお蔭で日給ではなく仕事給で車割で働いた。親方である巨大な頑丈な身體のポルタワ人のザウ・ロトヌイが若いまだ屹度あまり経験のない主人をうまく遣つて呉れたのだつた。主人は後で氣がついたので條件を變へやうとしたが、丁度都合よく経験のある野菜作り達に止めて『お止しなさい、やられますぜ』と事もなげにしつかりと云つた。こんな首尾のため今組合員は銘々一晝夜に四留までも稼いだ。皆何時にない熱心と云はうか猛烈さで働き、若し何かの道具で彼等銘々の仕事を測れるものなら、仕上げた馬力の量では確かにウ・ロネヂュ縣の河働きの大きな曳馬の一日分に相當する位であつた。

しかしザウ・ロトヌイはこれでも満足しなかつた。彼はたえず若者を急がし立てた。彼には職業的虚榮心があつて、組合員銘々の一日の稼高を五留まで漕ぎつけたと思つてゐた。それで濕つた緑や白の水瓜が淺喬から苛馬車まで兪央て可憐こなく墜々と回轉しながら

ら光つて飛び、熟練した掌にあたる水つぼい音が聞えた。

しかし今や港で浚渫船の長く引曳つた汽笛が響いた。それに應じて河で第二、第三のが鳴り、また河岸で幾つかのが鳴つた。それらは一緒になつて底力のある調子の揃はない聲を合せて呻つた。

『よ……お……し』とザウ・ロトヌイは恰度汽笛そつくりの皺唄れた底力のある聲で怒鳴つた。

そこで最後のべちやべちやが響いて、仕事はたちまち過んだ。

プラトノフは喜んで脊を伸ばし、後に反つて麻痺れた手をのばした。仕事に慣れつことになると共に最初の時分に感じた節々の痛さがもうなくなつたことを考へて満足した。しかしかうなるまでに彼は朝毎に工場の汽笛の定まつた響によつてテムニコーフスカヤ街の裏長屋で眼を覺まし、はじめは頸や脊中や手足に非道い痛みを感じ、どうしても起上つて數歩踏出すことが出来ないやうに思はれたのであつた。

『食事に行くんだ』とまたザウ・ロトヌイが怒鳴つた。

人足達は水際に降りて、跪あひまたびいたり歩板あひまたや筏の上に腹這ひになりたりして、手に水を掬

つて汗じんだ赤くなつた顔や手を洗つた。同じ河岸の少々片脇によつたまだ多少草のある場所に彼等は辨當を開いた。よく熟した水瓜十個、黒麵包、タラン(魚名)二十匹を丸く置いた。早や鐵砲丸のガブリューシユカは三升五合燻を提げて酒場に駆け出し、途々兵士の食事信號を歌つてゐた。

匙をとれ飯盒とれ

麵麩がない搔込めおい

跣足の汚ない小僧で着物よりは裸かの部分の方がすつと多いと云ふやうな檻褌を着たのが組合に走つて來た。

『プラトーフてのは誰ですか』と手癖の悪る相な眼をきよときよとして訊ねた。

『俺がプラトーフだ、お前に何の用がある』

とセルゲイ・イワノウイチは名告つた。

『其處の教會の角で娘さんが待つてるよ、そらこの紙片を』

組合はわつと関をつくつた。

『減らず口を利くな、馬鹿だな』と落着いてプラトーフは云つた『紙を此方へ寄こしな』

これはヂューニカかの手紙で丸い幼稚なくねくした子供臭い手跡であまり文句もなつてゐなかつた。

『セルゲイ・イワノウイチさん、突然ですが勘忍して下さい。私は大變大變重大な用事であなたとお話しがしたいんです。若し何でもないことなら御迷惑をかけるまでもありません。ほんの十分間だけ。アンナ・マルコーヴナ樓のお馴染のヂューニカより』

プラトーフは立上つた。

『一寸失敬します』と彼はザウ・ロートヌイに云つた『仕事が始れば來ます』

『好い仕事が出来たな』と親方は物倦さうに蔑すんだやうに答へた『そんな用事は夜が好いぜ。行くさ、行くさ、誰が止めるものかね。だが仕事が始まつてお前が來なけりや今日は勘定には入れないぜ、どれでも立ん坊を雇ふ。其奴が水瓜をやつつけければそれだけはお前の持だ。見かけによらないね、プラトーフ、お前がそんな色男だとは』

ヂューニカは教會と河岸との間にあつて十本のみすほらしい白楊の立つてゐる小さな廣場で彼を待つてゐた。彼女は鼠色の綺麗な外出着を着、黒いリボンのついた普通の丸い麥稜帽子を被つてゐた。『おとなしく着物は着てゐるが矢張り男は傍を通ると眼をくれて屹度

三四度は振り返る、特別な調子が一遍に分るものだ』とブラトローフは何時もの通り掣めた眼をして遠くの方から眺めながら、かう考へた。

『今日は、デューニカ。ようこそね』と愛想よく云つて娘の手を握つた『思ひがけなかつたよ』

デューニカは内気で悲しげに何か屈托があるやうであつた。ブラトローフはすぐにこのことが感知せられた。

『失敬だがね、デューニカ、僕は今恰度食事時だから』と彼は云つた『どうだね、一緒に出掛けやう、僕は食事しながら君の用事を聞かう。すぐ近くに小さな酒場があるよ。今時分は恰度人も居ず、別室と云つたやうな小さな部屋もあるからね。其處なら大變結構だ。行かう、君も何かやるだらう』

『いゝえ、私は頂きません』とデューニカは噎れた聲で云つた『そしてほんの暫らくですからね、五六分だけ。御相談し、お話したいんですが、私には誰もそんな人がありませんもの』

『いやよろしい。行かう。力の及ぶ限りはお役に立てよう。僕は君を大變愛してゐるから

ね、デューニカ』

彼女は悲しげにそして感謝するやうに彼を眺めた。

『私にはそれが解つてゐます、セルゲイ・イワノヴィチさん、ですから來たんですわ』

『若しかお金でも入るのかね。はつきり云ひ給へ。今手許にはないが、組合で前借が出来るから』

『有難う、だがさうぢやありません。彼處へ行つたらすつかり打明けますわ』

この薄暗い天井の低い酒場は小盗賊の定宿で、商賣は夕方から夜更けまで行はれてゐた。此處でブラトローフは小さな薄暗い部屋を借りた。

『肉と胡瓜と麵麩と火酒を大コップで呉れ給へ』と彼は給仕に注文した。

給仕は汚ない顔をした若者で、鉤鼻で、全身油じんで汚れてゐて、まるで油壺から引ずり出したばかりのやうな奴であつて、唇を拭いて噎れた聲で訊ねた。

『麵麩は幾らだけ上げますか』

『幾何でも好い』

後で彼は大笑ひをした。

『出来る丈け澤山持つて来い、後で勘定しよう。それから酸酒も』

四八六

『さあ、デューニカ、どんな心配事があるのか話し給へ、もう顔付で解つてゐるよ、心配事か、それでなくても何か面白くないことがあるのが——くわしく打明け給へ』

デューニカは長い間手巾をひねくり、自分の上靴の尖端を眺めて、恰度元氣を振起してゐるやうであつた。彼女は臆病になつて、どうしても必要な肝心な言葉が頭に浮んで来ない。其處でプラトノフが加勢をした。

『遠慮しないでね、デューニカ、残らず打明けてお言ひ。君だつて知つてゐる通り、僕も男子だ、決して裏切りなんかしないよ。若しかまた本統に何か好い相談も出るかもしれないよ。さあ思切りよく、そら』

『どう切り出して好いか私には解りませんが』とデューニカはもじくと云つた『ねえセルゲイ・イワノウィチさん、私は病氣にかゝつてゐますの、お解りでせう、悪い病氣に……一番厭な病氣に……何か御存じですか』

『それで』とプラトノフは合點うなづいて云つた。

『餘程以前からのことですよ、一月以上、一月半にもなりませんか……さう、一月できまませ

わ、何しろ五旬節ペンテコステの時初めて氣がついたんですから』

プラトノフすばやく手で額を擦つた。

『お待ちよ、僕は思出した……僕が學生達と一緒に出掛けたあの日だね。さうだらう』

『その通りですわ、セルゲイ・イワノウィチさん、本統ですよ』

『まあデューニカ』とプラトノフは咎めるやうに遺憾さうに云つた『あれから二人の學生が病氣にかゝつたんだよ。君ぢやないか』

デューニカは怒つて蔑すむやうに眼を光らした。

『私のせりかもし知れませんか。しかしどうして解るものですか。大勢でしたものね。あなたに喰つてかゝつてばかりゐたあの人が来たことは覚えてゐます。背の高い金髪の鼻眼鏡のね』

『さうだ、さうだ。あれはソバシニコフだ。僕に云つたよ、あれだつて。あんな灰殻なざあどうでもいゝがね、も一人のが可哀想だ。前から知つてるが、どうした調子かつい苗字をはつきり聞かなかつた。何でも何か市から来た苗字だつたけ、ポリヤスク、ズウェニコロドスク……友達はラムゼスと云つてゐたよ。ところが醫者が——あの男は何處かの醫者

に見て貰つたんだが——きつぱりと黴毒だと云つた時、あの男は家に歸つて短銃自殺をして仕舞つた。そしてあの男の書いた書置には驚くべき言葉が書いてあつたよ、略次のやうな意味合の「自分は人生の全意義を知と美と善との勝利に置いてゐた。しかるにかゝる病氣にかゝつては自分は人間ではない、生皮だ、腐敗物だ、腐肉だ、漸進的痲痺症の候補者だかゝるものと自分の人性の尊嚴とは妥協しない。總ての出来事、即ち自分の死に對して罪を負ふものは唯自分一個である。何となれば自分は一時の獸的欲望にかられ愛なくして金錢によつて女を得たからである。それ故自分は自ら自分の上に課して罰を受けるべきである」とね。僕はあの男が大變可哀想だ』

プラトノフは靜かに附け足した。デューニカは鼻を脹らした。

『私にはちつとも』

『そりや駄目だよ。おいボーイ、あつちへ行つてお出で、用があれば呼ぶから』とプラトノフは給仕に云つて『そりや駄目だよ。デューネチカ。あれは非常にしつかりした男だ。何十万人の中一人ある位です。僕は自殺者に敬意を持たない。大抵の場合、くだらん事で鐵砲で自殺したり首吊りしたりするのは、要するに稚戯だ、赤ん坊が糖菓を呉れないつて

〜で四邊の者への當擦りに壁に身體をぶつつけるやうなものだ。しかし彼の死の前には僕が恭々しくそして悲歎の情をもつて頭を垂れる。彼は總明な寛大な優しい人間だつた。總ての人に心をくばり、しかもあの通り自己に對してはあまりに嚴格だつた』

『でも私にはまるで何でもありません』とデューニカは答へた『賢くても馬鹿でも、正直でも不正直でも、年寄でも若くても、私はみんなが憎いんです。その譯は——私を見て頂戴——私は何です。世間中の痰壺、下水溝、共同便所ぢやありませんか。考へて見て下さい、プラトノフさん、何千、何千の人が私を金づくで買ひ、引握み、豚のやうに喰つたんです。私の部屋に來た人、またこれから私の部屋に來るかも知れない人、あゝ私はそんな人がみんな憎いんです。若し出来ることならそんな奴を火や鐵の拷問にかけてやりたい。私はかう吩咐けてやりたい……』

『君は意地悪くて氣位が高い、デューニカ』とプラトノフは靜かに云つた。

『私だつて意地悪でもなく腰も低かつた時分があります……今になつてかうなつたんです。本統のお母さんが私を賣つたのはまだ十歳たらずの時でした、それから私はこんな商賣になつたんです。せめて誰かでも私の裡に人間の姿を認めて呉れたものがあるものです

か。いやいや、毒蛇です、檻褸屑です、乞食より悪い、盗賊より悪い、人殺より悪い……それどころが死刑の役人です……そんな手合が遣つて來ますが、そんな奴でも見下して輕蔑した眞似をします。私は何でもなしだ、私は娼婦ベブリックウイメンだ。お解りですか、セルゲイ・イワノウィチさん、何と云ふ怖ろしい言葉です。娼婦ベブリック！つまり誰のものでもない、自分のものでもなければ、お父さんのものでもなければ、お母さんのものでもなければ、露西亞のものでもなければ、リヤザンのものでもない、唯單に共有ベブリックのものなんです。私の側にやつて來て、これも同じく人間だ、心も脳もある、彼とて何か考へ、何か感じてゐる、彼とて木から作つたものでもなければ、藁や乾草や樹皮から拵らへたものでないと云ふことを考へて呉れたものは誰もない。しかしそんなことを感じてゐるのは私ばかりです。私は自分の状態の怖ろしさ、この黒い臭い泥穴を感じてゐる人達の中の一人かも知れません。しかし今迄私が出逢つたり、また今一緒に暮らしてゐる人達は、解つて頂戴、プラトーフさん、私の云ふことが解つて頂戴、その人達はみな誰も自覺せずにあるんです。物を言つたり、歩いたりする肉の塊です。このことは私の腹立よりはもう一層悪いことです」

『君の云ふ通りだ』とプラトーフは靜かに立つた『しかもこの問題は壁と力くらべをするやうなもので、誰も君の力にはなれないんだが……』

『誰も、誰も』とデューニカは熱心に叫んで『覺えてゐらつしやるでせう。あなたの眼の前である大學生がリュウブカを身受したことを……』

『よく覺えてゐるとも。それがどうしたね』

『昨日さんばらでぶぬれになつて歸つて來ましたの、泣いてゐました、あの野郎にすてられたんです。親切づくに見せかけやつて。君は妹だの、僕は君を救ふ、僕は君を人間にするのだと……』

『本統にさうかね』

『さうです。私は優しく親切で、少しも助平根性を持つてゐない人を一人だけ知つてゐます。それはあなたです。しかしあなたはまるで別人です。あなたは風變りの人です。あなたは何時も何處かをうろくして何かを捜してゐらつしやる……勘忍して頂戴ね、セルゲイ・イワノウィチさん、あなたは何か祝福されたやうな人です。ですから私はあなたに御相談するのです、あなたばかりに』

『云ひ給へ、デューネチカ……』

『病氣と云ふことが解つた時私は憎々さのあまり氣が狂ひさうでした、憎々さの餘り息が窒りさうでした。私は考へました。さあこれで最後だ、もう何も惜しむことはない、もう何も悲しむことはない、何も待つことはない、最期だと……然し今迄私が受け耐らへて来たことに對して一體何の償ひもないのか。一體世間に公平と云ふことはないのか。一體せめて復讐でも自ら樂むことは出来ないのか——私がちつとも愛を味はなかつたことや、家族については噂ばかりしか聞かれなかつたことや、私を犬つこのやうに呼んで眺めてその揚句靴で頭を蹴り飛ばしてあつちへ行けと云ふ仕末や、私が逢つたことのあるみんなと同等で、別に皆より馬鹿でもない私を雑布にしたり、そいつ等の卑しい満足のための下水のやうなものにしたことに對して。へん、一體こんなことを蒙つた上その報酬としてまだこんな病氣までお禮を云つて頂戴しなければならぬでせうか。それとも私は奴隷でせうか、口の利けない品物でせうか、駄馬でせうか。そこで、プラトリーノフさん、私はみんなに傳染してやることにきめましたの、若いのにも年寄にも、貧乏人にも金持にも、綺麗なのにも片輪にも、みんなに、みんなに』

すつと前にもう皿を押しつけたプラトリーノフは彼女を驚きと云ふよりも更に大きい、殆ど

恐怖の情をもつて眺めてゐた。人生に於て多くの苦しい、汚れた、時としては血にちんだ事柄を見た彼にも、今迄注ぎ出されなかつたこの巨大な憎悪の高潮と相面して動物的な恐怖を抱いて怖ろしくなつた。我に返つて彼は云つた。

『ある偉い佛蘭西の文學者がそのやうな場合の事について云つてゐます。普魯西人が佛蘭西人を征服して種々な風に佛蘭西人を辱しめた、男を銃殺し、女を凌辱し、家を掠奪し、野に放火した。ところがある美しい女、——佛蘭西女だが——大變美しい女が病氣をうつされ、腹立ちのあまり凡ての獨逸人、彼女の抱擁に這入つて來たすべての獨逸人に傳染しはじめた。その女は數百人、恐らくは數千人までも病氣にした。そして病院で死ぬ時女はそのことを思出して喜びと誇りを感じたと云ふことです。しかしそれは自分の祖國を蹂躪し、自分の同胞を慘殺した敵ぢやありませんか。しかし君は、君はヂェーネチカ』

『私はみんなを、さう、みんなをです、云つて聞かして頂戴、セルゲイ・イワノウィチさん、良心のまゝに云つて聞かして頂戴、譬へばあなたが街で誰かに辱しめられ、罵られてゐる子供、さう、眼を突かれ、耳を切られてゐる子供に逢つたとします、この人間はすぐあなたの傍を通り過ぎる、そして神ひとりか——果して神があるとすれば——この瞬間天

からあなたを眺めてゐることをあなたが知つてゐるとする、さうするとあなたはどうか
いますか』

『僕には解らない』とプラトーフは伏眼になつて微かに答へた。しかし彼は色を變へ、
彼の指は食卓の下で痙攣したやうに拳に握りしめられた『其奴を殺して仕舞ふかも知れな
51』

『——知れない——どころか屹度です。私はあなたを知つてゐます、私はさう感じます。
ですが今の場合を考へて見て下さい、私達銘々をそんなに侮辱してゐるんぢやありません
か、子供のやうな私達を、子供のやうな』とデューニカは熱烈に呻めいて、一瞬間掌で眼
を蔽つた『そのことはあなたも何時か私達の處で仰有つたことがあるやうに思ひます、あ
の五句節フレイツの晩でしたか……さう、馬鹿な、人の云ふことを信じ易い、盲目な、貧慾な、空
虚な子供です。そして私達はこの束縛から免れることも出来ない……何處へ行くところも
なければ、何をするともないんです。かうお考へぢや困りますよ、セルゲイ・イワノウィ
チさん、私は自分に對して、個人的に自分に對して無禮をした人達に向つてばかり憎惡の
情を持つてゐるんだと。いゝえ、一般にすべてのお客に對して、あの放蕩者に對して、若

いのから年寄まで、皆にです。そこで私は、自分や姐さん達の復讐をしてやることに決心
しました。それは好いことでせうか、悪いことでせうか』

『デューネチカ、全くのところ僕には解らない。僕には何も云ふことも出来なければ……
また云ふ元氣もない。僕には理解出来ない』

『しかし何もそんなことが肝心のことでありません。肝心のことはこれです、私はそいつ
等に病氣を傳染してやつて何とも感じません——神の前にも祖國の前にも、可哀さうだと
も濟まないとも悪かつたとも。血にありついた飢えた狼のやうに唯嬉しいだけです。それ
だに昨日私にも解らないことが起りました。私の處へ幼年校の生徒が遣つて來ました、
馬鹿な青二才のまだまるで小憎こせうなんです。去年の冬ごろから遣つて來てゐたんですが……
……ところが突然私は可哀想になりましたの。あの兒が大變綺麗で大變若々しかつたからぢ
やありません、また何時も大變可憐でその上優しかつたからでもありません。いゝえ、私
の處にはそんなのが随分來ましたが私はどれも容赦しませんでした。私は喜んで畜生にで
もするやうに烙印を押してやりました。それにあの兒は突然可哀想になつたんです。私自
分でも斷りません、何故だか。私には判断が出来ません。そんなことをするのは馬鹿や白

痴から金を盗んだり、盲目を殴つたり、眠つてゐるものを切つたりするのと同じやうに思はれました。もしそれが腺病質な青瓢箪か厭な助平爺なら私はすてゝは置きません。しかしその兒は健康なしつかりした、銅像のやうな胸や手をした兒でしたので、私は駄目でした。私をお金を遣つて、自分の病氣を見せてやりました、一言で云へば私は大馬鹿者でした、その兒が歸つた後で私は散々泣きました。そして昨夕から眠りもしません。五里霧中でうろくしてゐます。それですから——今になつてかう考へるのですが——それですから私の考へたこと、つまり皆に病氣をうつしてやらう、彼奴等の父にも母にも妹にも許嫁にも——全世界にでも——と云ふ私の考へはみんな馬鹿なこと、空な空想だつたのでせうか、一度でも控へた以上は。また私には何も解らなくなつたのです。セルゲイ・イワノウ、チさん、あなたは賢い方です、世の中の甘い辛いも知つてゐる方です——どうすれば好いのか教へて下さい』

『僕には解らない、ヂェーネチカ』とプラトーフは靜かに云つた『君に話したり忠告したりするのを恐れる譯ぢやないが、僕にはまるで何も解らない。それは私の判断力以上だ私の良心以上だ』

ヂェーニヤは指と指とを組合して苛立しくそれを鳴らした。

『私にも解りませんの。ですから、私の考へたことは間違つてるかも知れませんが……ですから、私には唯一事あるばかりです。この考へは今朝私の頭に浮んだのですが……』

『好けない、そんなこととしては好けない、ヂェーネチカ、ヂェーニヤ』とプラトーフは迅口はやぐちに彼女を遮つた。

『その一事とは首を吊ることです』

『好けない、好けない、ヂェーニヤ、そればかりは。何か他の困難な事情なら僕は大膽に君に云ふよ、おいどうだ、ヂェーニヤ、井戸端會議なんかもう止さうつて。しかし今君に必要なのはこんなことぢやない。もし是非と云ふなら君に一つの手段を助言しよう、同様に悪い慘酷なものではあるが、しかし或は百倍も君の忿怒を満足させるものだ』

『どんなのですか』とヂェーニヤは激昂の後で一遍に頽然ぐつたしたやうに元氣なく訊ねた。

『それはかうだ。君はまだ若いし、實際のことを云ふんだが大變綺麗だ、もし欲するならば非常にエフクティヴにもなり得る。それは實に美以上だ。しかし君は自分の容貌の程度と力をちつとも知らない、殊に君のやうな性質がどんなに牽引力を持つてゐるか、どんな

に力強く男を自分に縛つけ、男を奴隸や畜生以上にまですることが出来るのかと云ふことを知らない。君は氣位が高く、大膽でしつかりしてゐて、賢い。僕は知つてゐるが君は随分讀書もする、くだらない書物だとしても、兎に角讀書もして、君の言葉は他の朋輩とはまるで別物だ。甘く行けば生活を一變して病氣をなほし、あの『穴』から自由の天地に免れることも出来るのだ。君の足許に男を平伏さし、君のためならどんな卑劣なことも、竊盜、費消でもやると云ふ程従順おとなしくするのは、君にとつてはほんの指の動き位に容易いことだ。硬い鞭を手に持ち丈夫な手綱でそんな奴等を御するのだ。そんな奴等を破産させ、發狂させるのだ、君の心と元氣との續くかぎり。考へて御覽、デューニヤ、人生を一變するのは女ぢやないか。昨日の下女、洗濯女、歌女は、まるでトウエリ地方の田舎女が向日葵ひまわりの種子を食ふやうに、數十萬の資産を食つて仕舞ふ。やつと名前の書けるか書けない位の女が男を通して時としては全王國の運命を支配する。太子が暖昧女や妾と結婚する。デューネチカ、これが君の放縱はしりまな復讐の天地だ。僕は遠くから君を眺めてゐやう。君にはそんな點がある——猛獸のやうな、人を破産させずには止まないやうな……恐らくそんな度合でないまでも現に君は其奴等を足許に平伏さしてゐる』

『いゝえ、』とデューニカは弱々しく微笑んだ『私も以前にそんなことを考へてゐました。ところが私の裡に燃えてゐる肝心のものが灰になりました。私には力もなければ意志もなければ望みもありません、私の内部は空虚で腐りかゝつてゐます。御存じでせうが、ある白い圓い簞があつて、それを絞ると香粉がこぼれますね。私はそんなものです。私の内部にある總てのものをこの生活が食ひつくして憎惡にくしみだけ残つてゐるのです。それで私は元氣なしで、私の憎惡も元氣なしです。また誰か小僧こに出逢ふと可哀想になつて責苦を受けます。いやもう一層……』

彼女は口を噤んだ。プラトーフは何を云つて好いか解らなかつた。二人とも重苦しくつらくなつて來た。到頭デューニカは立上り、プラトーフを眺めずに、冷たい弱々しい手を彼に差伸べた。

『さようなら、セルゲイ・イワノウィチさん、御邪魔をして済みませんでした。なに私にだつて解つてゐます、出来ることならあなたは屹度助けて下さることは……しかし最早どうも仕方がないやうです。さようなら』

『唯馬鹿な眞似をしないやうにね、デューネチカ、御願ひだから』

『宜しうございますよ』と彼女は云つて、元氣なく手を振つた。

五〇〇

廣場を出て彼等は別れたが、數歩行つた時デューニヤは突然彼を呼んだ。

『セルゲイ・イワノウィチさん、セルゲイ・イワノウィチさん』

彼は立止つて振り返り彼女に近よつた。

『ワリーニカ・フスタニカが昨日私達の家の廣間で死にました。跳ねて跳ねてゐましたが、その擧句參つて仕舞ひました。何と云ふ樂な死態シキタマでせうね。それからお尋ねするのを忘れてゐましたが、セルゲイ・イワノウィチさん、これが最後のお尋ねです、神は存在してゐるのかどうでせう』

プラトーフは顔を擧めた。

『どう返事をしよう。僕は知らない。存在してゐるだらうとは思ふが、僕達が想像してゐるやうなものではなささうだ。神はもつと偉大な、もつと總明な、もつと公平なものだらう』

『では來生は。あの死んでから後は。天國があるとか地獄があるとか。これは本統ほんすうですの。それともまるで何もないでせうか。何もなしですか夢のない眠りですか。暗い穴あなで

すか』

プラトーフはデューニカを見ないやうにして黙つてゐた。彼は苦しく怖しかった。

『知らない』と最後に彼は努力して云つた『僕は君に嘘を云ひたくない』

デューニカは溜息をついて、みぢめな歪んだ微笑を浮べた。

『では有難う、それだけでも有難う。御機嫌よう、眞心から。ではさようなら』

彼女は彼から身を轉じて、そろ／＼とためらつた歩調で坂を登つて行つた。

プラトーフは恰度好い時に仕事に歸つて來た。人足は頭を梳き、欠伸をし、手足の凝りを揉みながら銘々の場所についた。ザウ・ロートヌイは敏捷すばしこい眼で遠くからプラトーフを見付け、港中に響くほどに叫んだ。

『恰度に遣つて來たな、畜生。すんでのことでお前の尻尾をつかんで組から抛り出すとこだ。さあ、場所につけ』

『色男だね、セリョージュカ』と彼は氣立よく附け足した『夜なら兎も角、おい、眞晝間ぢや見ともねえぜ』

五〇一

土曜日は醫者の検査日であつた。何處の家でも大變念入りにそしてそわ／＼と準備をする様は、恰度上流婦人が専門醫を訪ねやうとして準備するのと同じやうであつた。町寧に御化粧をし、きまつて清潔な下襦袢、それも出来るだけ立派なのを着た。街路に面した窓は錠戸が閉まつてゐて、庭に向いた窓の一つの側には背中の下に硬い長枕を置いた寢臺が据えてあつた。

女達はみな不安を感じた『氣が付かないのにひよつと病氣だつたら……病院送り、恥辱病院生活の退屈、粗末な食物、苦しい治療……』

唯大きなマーニカ——一名鰐のマーニカ——とゾーヤとヘンリエッタ——どれも三十女でヤーマの考へで云ふともう老婆娼婦で、總てを見、總てに耐え通し、白い肥えた曲馬の馬のやうに自分のやることに全く平氣な女——だけはまるで平氣に落着いてゐた。鰐のマーニカはよく自分に就いてこんなことさへ云つてゐた。

『私などあ火酒ぢやないが火の中水の中銅管の中を通つて來たんだからね……もう何だつ

て私にとつゝきやしないよ』

ヂェーニカは朝から従順しく物思はしげであつた。金の頭飾りや細い鎖のついた自分の寫眞入の小金盒や頭にかける銀の十字架などを白いマーニカに遣つた。タマーラには記念のため指環二個を是非貰つてくれるやうにせがんだ。一つは三つの環に取外すことの出来る銀指環で眞中には心臓があり、三つを組合せると其處で二本の手が握手するやうに出來たものであつた。も一つは柘榴石の入つた細い金のであつた。

『私の襦袢はね、ターちゃん、下女のアンヌーシユカに遣つて頂戴な。よく洗つた上で私の紀念に着るやうにね』

二人はタマーラの部屋に差向ひでゐた。ヂェーニカはまだ朝の中にコニヤック酒を買ひに遣つて、今は悠々と物倦いかのやうに一杯一杯と呑みながら、粒砂糖のはいつたレモンを食べてゐた。タマーラはこんなのを始めて見て吃驚した。ヂェーニカは何時も酒嫌ひで稀にそれもお客の強ひる時だけ飲んだからである。

『何故お前さんは今日そんなに物を呉れ廻るの』とタマーラは訊ねた『まるで死ぬかそれとも尼寺へでも行かうとするやうにさ』

『え、私行くんですよ』とデューニカは元氣なく答へた『私はうんざりしつちやたんですもの、ターちゃん』

『誰がこんな處で面白いのですか』

『いやさね、うんざりするつてよりも私には何だかどうでも好いつてやうな氣がするの。かうお前さんを見ても、食卓や酒の饗や自分の手足を見ても、みな一樣で何の役にも立たないやうに思はれてね……何にも何の意義もないやうでね……まるで何だか古びた古びた繪のやうですわ。それ御覽よ、路を兵隊さんが歩いてゐるでせう、でも私には人形が引られると動くのと同じで、どうでも好いの。雨にぬれてゐやうが私にはどうでも好い。兵隊さんが死なうが、私も死なうが、お前さんも死なうが、同じことで私には何の怖ろしいことも吃驚することも見えないんです。そんなに何も彼も私にとつては單純で退屈なの』
デューニカは黙つてまた一杯飲み干し、砂糖を吸つてゐるが、矢張り街路の方を眺めたがら突然訊ねた。

『聞かして頂戴ね、どうか、ターちゃん。私は一度もお前さんに訊ねなかつたけれど、何處から此處の家へ這入つて來たか。お前さんはまるで私達みなと似てもつかないし、お

前さんは何事に當つても好い賢い言葉を出すから……佛蘭西語でさへ何時か上手に話したわね。それに誰だつてお前さんのことをちつとも知つてゐない。お前さんは一體何なの』

『デューちゃん、本統に詰らないことだわ。人生は人生さ。女學生から家庭教師、合唱團で歌つたこともあり、其後レートニイサッドで射的場を持つてゐるが、ある香具師と干係し、自分でも連發銃ウインチェスターを撃つことを覚え……其後曲馬團に這入つて興行に廻り、亞米利加土人女を扮したわ。私はそりや上手に射つ。それから尼寺に這入つたの、其處で二年……随分色んなことをやつたわ、みんなは話し切れなほほど……竊盜ぬすみもしたわ』

『色んな苦勞をしたのね』

『私はもう若くもないの、ね、幾歳だと思つて』

『二十一、二十四』

『おやおや、一週間前で丁度三十二よ。このアンナ樓ぢや私が一番年嵩でせうよ。しかし唯私は何にも驚かなけりや、何にも心をよせないの。御覽の通りお酒はいけないし。自分の身體を大變注意していたわり、肝心なことは、一番肝心なことは男なんぞで決してうさはらしをしないの』

『ちやお前さんのセーニカは』

『セーニカ——あれは別よ。女心なんてものは馬鹿な理屈に合はないものね。二體女の心が愛なしに生きて行かれるものでせうか。そりや私は彼の人を愛してゐなくつて、さう思ふのは或は自らを瞞してゐるんかも知れせんわね。しかしそれでもセーニカは私にとつて何方かと云へば大變大事な人です』

ヂェーニカは突然活氣づいて、好奇心をもつて朋輩を眺めた。

『しかしね、こんな穴にお前さんはどうして沈んだの、こんな賢い、綺麗な、しとやかなお前さんが……』

『話せば長いことよ、でも厄介ね。此處へ来たのは戀がもとなの。ある若い人と干係して、一緒に革命をやつたの。女つてものは何時もさうでね、可愛い男の見る方を見、可愛い男の見るものを見るんですからね。私は心の奥底ではあの人のやることを信じなかつたんだけれども後に従つたの。優しい賢い人でお喋りで美男子だつたわ。唯後でその人が卑怯者の二股膏藥だつたことが解つたの。革命をやりながらお友達を憲兵に密告した。煽動者だつたのね。その人が殺されて化の皮を剥かれた時始めて私の眼も覺めた。しかし兎に角

私も身を匿さなねばなかつたのです。旅券を變へたの。黄色い鑑札が一番身をかくし易いと教へくれた人があつてね。そこでさうしたの。つまり此處は私が草を食ふ牧場のやうなもので、時が来て甘く行けば、出て行きますわ』

『何處へ』とヂェーニカは辛棒し切れなくなつて訊ねた。

『世間は廣いですわ、私は人生が好きです。私は同じく尼寺にもゐましたが、長い間其處で輪唱歌やザドストイニクを歌つて、お仕舞にうんざり退屈して仕舞へば、一遍にカッフシャンタン行き。好い一足跳びでせう。そのやうに此處からでも……劇場へ行きますわ。曲藝へ、舞踊團へ……でもね、一番私を牽つけるのは、ヂェーちゃん、矢張り泥棒ですの。大膽な、危険な、怖ろしい、何だか酔つたやうな仕事ね……私は牽つけられますわ。私が生眞面目なおとなしい女で、教育のある娘にも見えることが出来るなど、私を見ちや好けませんよ。私はまるでまるで別人ですの』

彼女の眼は急にきら／＼と愉快に燃立つた。

『私の心の中には悪魔が住んでゐますの』

『お前さんは好いね』とヂェーニカは思沈んで悩ましげに云つた『お前さんは兎に角何か

を望んでゐるけれども、私の心なさあくたばつてゐる。私は二十だけれども、私の心は婆さんだ、皺だらけで、黴の匂がする。せめて譯の分つた生活をしてをればね。へん、泥濘ばかりだ』

『お止しよ、ヂェーちゃん、馬鹿なことばかり。お前さんは賢くて、風變りで、お前さんには男を喜んで足許に這はせる特別な力がありますよ。お前さんも此處から出てお出でよ。勿論私と一緒になく——私は何時も孤獨ひとりぼっちなんですすから——自分勝手に』

ヂェーニカは頭を振つて、靜かに涙もなく掌で顔を蔽つた。

『いゝえ』と彼女は長い沈黙の後に微かに答へた『いゝえ、私にはさうはなりません。運命の餌えさになつたんです。私は最早人間ではなく、何か汚れた食戻しです。あゝ』と突然手を振つた——ヂェーネチカ、コニヤツクでも飲んだ方が好い、レモンでも嘔つて——と彼女は自分自身に向つて獨言を云つ、『ぶるゝ……厭だ、厭だ。どうしてアンヌーシカは何時もこんな悪いものをよこすんだらう、犬の毛に塗れば色が變るわよ。その癖何時も餘計に五十哥捲上るのだ。ある時私は訊ねたんですよ、——何のためお金を溜めるんだつて。するとね云ふことに——嫁入のお金を溜める、御亭主に無垢の身體を持つて行くだけでは

何喜ぶものか、まだ數百稼ぐんだつてね。仕合せな者さ。此處にね、ターちゃん、錢が少しあるから、あの鏡の下の箱に、あの女に遣つて頂戴な、どうぞ』

『何です、馬鹿ね、死なうとでも云ふんですか』とタマーラは咎めてむきつけに云つた。

『いゝえ、唯その、万が一ね……取つて頂戴、お金を取つて。若しかすると私は病院にやられるわ。さうするとどうなるか知れたものですか。私は万一のため小錢を残して置いたの。だが本統にね、ターちゃん、私が何か思切つたことをしようと思つたら、一體お前さんは私を止める？』

タマーラは凝と深くそして落ついて彼女を眺めた。ヂェーニカの眼は悲し相で、まるで空虚のやうであつた。生々した光は消え、どんよりしてまるで色が褪せた如く、白照勝ちで月光石のやうであつた。

『いゝえ、』と最後にタマーラは靜かにしかしきつぱりと云つた『若し戀のためなら止めます、お金のためなら止めます。しかし止めては好けない場合があるものです。勿論手傳はしませんけれど、邪魔をしたり止めたりもしません』

この時廊下には足早の鴉母のゾーシヤの叫び聲が聞えた。

『皆さん、お支度。お醫者のお出です。皆さん、お支度。皆さん、大急ぎで』

『さあ行つて被居い、タマーラ、行つて被居い』とディーニカは立上りながら優しく云つた『私は自分の部屋に一寸寄つて行きます。私はまだ着變へてないから、尤もそんなことはどうしても好いけれど。もし私の番が来て私が間に合はなかつたら大きな聲で呼んで頂戴、呼びに来て頂戴』

そしてタマーラの部屋から出ながら、彼女は何か我知らずタマーラの肩を抱いて優しく撫でた。

醫師クリメンコ——市醫——は検査のため必要なものを廣間で整へてゐた。昇永水ヤワセリンや其他のもの、こんなものは皆他の小さい卓の上に配置した。彼の手許には旅券と取替へた白い札と名簿があつた。女達は襦袢、靴下、上靴ばかりで離れた所に立つたり腰掛けたりしてゐた。卓の近くには主婦アンナ・マルコーヴナ自身が立つて居り、その少し後にエンマ・エドゥワルドヴナとゾーシヤがゐた。

醫師は年とつた、だらりとした、汚ならしい、何に對しても平氣な男で、横さまに鼻眼

鏡をかけ、名簿を見て叫んだ。

『アレクサンドラ・ブジンスカヤ！』

鉤鼻の小さなニーナが顔をしかめて出て來た。顔には腹立たしい表情を残し、恥かしさ、間の悪さの自覺、努力などのため鼻をならしながら、不器用に寢臺に上つた。醫師は眼鏡越しに眼をしかめ、一寸それを外づして検査をした。

『よし、健康』

白札の裏に『八月二十八日健康』と折釘文字（せりくまじ）を列べた。そしてまだ書き終らない内に叫んだ。

『ウオシチェンコワ・イリーナ』

今度はリユーブカの番だつた。彼女は比較的自由なこの一月半の間に毎週の検査の習慣が抜けたので、醫師が襦袢を胸の上にはね上げた時、彼女は大變恥かしがりの女だけがやるやうに、背中や胸までも急に眞赤になつた。

その次はゾーヤの番で、その次が白いマーニカ、それからタマーラ、ニューラ。ところが醫師はニューラに痲病を發見して、彼女を病院に送るやうに命じた。

醫師は驚くべき迅速さで検査を行つた。彼はもう二十年程も毎週土曜日かう云ふ風に數百の女を検査して來たので、習慣になつた技術上の巧妙、迅速、動作に際しての落ついた無關心を習得した。こんなのは屢曲藝師、不正な博奕打、荷物運搬人、家具の荷造人、その他の専門家によくあることであつた。彼が冷靜に操作を行ふ様子は、恰度屠牛者や獸醫が一日に數百頭の畜類を検査する冷淡さと同じで、この冷靜は彼が義務的に二度死刑の場に臨席した時も矢張彼に裏切らなかつた。

彼は自分の前には生きて人間があるのだとか、彼自身が公娼と名付けられる怖ろしい鎖の最後のそして最も重要な環くわんであることと云ふことを、何時か考へたことがあるだらうか。

否。若しそんなことを感じたことがあればそれは恐らく彼の世渡りの一番最初の時である。今彼の前にあるのは裸かの腹、裸かの背、開いた口だけであつた。この毎土曜日の無差別な畜群の中の何れ一つも彼は其後街の上では氣が付かないのであつた。肝心なことは一刻も早く此家の検査を済まして、二番目、三番目、十番目、二十番目……へと行かなければならぬと云ふことであつた。

『スサンナ・ライツィナ!』と到頭醫師が叫んだ。

誰も寢臺の方に進出なかつた。

抱女達はみな眼を見合して嚇いた。

『デューニカ……デューニカは何處』

しかし彼女は女達の中に居なかつた。

その時醫師の方がすんだばかりのタマーラは少し前に進出て云つた。

『居りません。まだ用意が間に合はなかつたのでせう。御免なさい、先生さん、私がすぐ行つて呼んで來ますから』

彼女は廊下に走り出て長い間戻つて來なかつた。その後を跟おうて、はじめはエンマ・エドワルドヴナ、それからゾーシヤ、數人の女、はてはアンナ・マルコーヴナ自身さへ出掛けた。

『ほんとに、何と云ふ不仕鱈です』と廊下で尊大なエンマ・エドワルドヴナは厭な顔をしながらかつた『何時もデューニカです。きまつてデューニカです。どうやら私の勘忍袋の緒ももう切れた……』

しかしデューニカは何處にもゐなかつた。自分の部屋にも、タマーラの部屋にも。他の

部屋も、總ての隅々も窺いて見た。しかし其處にも彼女はゐなかつた。

「何所を見て見ませう。多分其處にゐるかも知れませんが」とゾーヤが推量した。

しかし便所は内部から錠がかゝつてゐた。エンマ・エドワルドヴナは拳骨で戸を叩いた。
『チエーニヤ、出て被居い。何て馬鹿をするのです』

それから聲を張り上げて、辛棒し切れずに嚇かして云つた。

『聞えたかい、豚奴。すぐ出てお出で。醫者が待つてるぢやないか』

何の返事もなかつた。

皆は恐怖を眼に浮べ、同じ考へを頭にもつて見合はした。

エンマ・エドワルドヴナは銅の把手をつかんで戸を揺ぶつた。しかし戸は明かなかつた。

『シメオンを呼んでおいで』とアンナ・マルコーヴナが吩咐けた。

シメオンを呼んだ。彼は例によつてねむさうな瞶め面をして遣つて來た。女達や鵝母の取亂した顔付で彼はもう、何か悶着が起り、彼の職業柄な慘酷さと腕力とが必要なのだと言ふことを見てとつた。彼に事柄を説明した時、彼は黙つて長い猿のやうな手で戸の把手

を掴み、足を壁に突張つてうんと引張つた。

把手は彼の手許に残り、彼自身はよろめいて危く仰向に倒れるところだつた。

『あゝ、畜生』と彼は微かに呟いた『俺に小刀をお呉んな』

戸の隙間を通して彼は小刀で内側の錠をさぐり、小刀の身で隙間の端を少し削つて、それを擴げ、到頭小刀の尖がはいるやうにし、それからそろ／＼と錠を外づした。みな身動きもせず、殆ど息を殺して、彼の手を眺めてゐた。唯金屬と金屬との軋る音だけが聞えた。到頭シメオンは戸をばつと明けた。

チエーニカは便所の眞中で、胸當の紐を洋燈の鉤にかけて縊死してゐた。暫時の苦悶の後で最早動かなくなつた身體は空中でゆる／＼と揺れ、その垂直の軸のまわりに右へ左へと眼につかない程の圓轉を描いてゐた。彼女の顔は紫色で、舌の端は噛みしめた裸出の齒の間から窺いてゐた。取下ろされた洋燈は其處の床の上に轉がつてゐた。

誰かゞヒステリカルに悲鳴を擧げ、皆の女は驚いた畜群のやうに狭い廊下を押し合ひへし合ひして、ヒステリカルな慟哭を擧げたり咽喉を望らしたりして逃げ出した。

叫聲を聞いて醫師が遣つて來た……文字通り遣つて來たので駆け付けたのではなかつ

た。事情を見て彼は驚きもしなければ周章もしなかつた。市醫の職務としてこんなものには慣れ切つてゐて、人間の苦悶や負傷や死に對してはもうまるで木か石のやうになつてゐた。彼はシメオンに命じてデューニカの屍體を少し上に持上げさせ、自ら腰掛臺に上つて紐を切つた。彼は形式的にデューニカを彼女のもとの部屋に運ぶやう命じ、同じシメオンの力を借りて人工呼吸法を試みた。しかし五分ばかりもして手を振り、鼻の上に歪んだ鼻眼鏡を直して云つた。

『警官を呼んで検死をして貰ひなさい』

またケルベッシュが来て、主婦と小さな別室で長い間囁き、また隠囊カサットにはふらしい百留紙幣ががさついた。

検死は五分間で出来上り、デューニカは縊死した半裸體のまゝで、席二枚に包まれて、傭ひ車で屍體收容所に運はれた。

エンマ・エドゥワルドウナはデューニカが自分の部屋の夜卓の上に置いた書置を一番に見付け出した。娼婦には義務になつてゐる出納簿の切れ端に、鉛筆で、幼稚な丸い子供のやうな筆跡で書いてあつた。しかしそれによつて自殺者の手は最後の瞬間にも震えてゐな

かつたことが判断出来た。

『私の死について誰にも罪を着せないやうに願ひます。病氣にかゝつた爲め、また總ての人間が卑劣で、生きてるのが厭になつた爲め死にます。私の品物の分配のことはタマールが知つてゐます。私は詳しく云つて置きました』

エンマ・エドゥワルドウナはタマールの方を振向いた。彼女も他の女と交つて此處にゐたのであつた。そして冷淡な綠色の憎惡にみちた眼をして呻つた。

『ではお前は彼奴かいつがしようとすることを知つてゐたんだね、知つてゐたんだね、毒蛇め、知つてゐて云はなかつたんだね』

彼女は例によつてタマールを慘酷に勘定づくに殴らうとして既に手を振り上げかゝつたが、突然口を明け、廣く眼を見張つて止めた。彼女はタマールのこんな様を始めて見た。タマールは斷然とした、忿怒にあふれた、耐らなく輕蔑し、眼で彼女を眺め、小さな白い金屬のびか／＼したものを悠々と悠々と下から上に擧げ、やがて鶉母の顔と同じ高さに掲げたのであつた。

同じ日の夕方アンナ・マルコーヴナ樓では大變重大な事件が起つた。即ちこの妓樓は、地も家も一切合切の財産、全體の人間と一緒にエンマ・エドゥワルドヴナの手に移つたであつた。

このことはもつとすつと以前から家内中で話に出てゐたが、こんな噂がデューニカの死後直ちにこんな突然實際になつた時、女達は驚きと恐怖の餘り長い間我に返ることが出来なかつた。女達は自分の上にこの獨逸女の權力を蒙つて、彼女の慘酷な容赦ない術學風、彼女の貪慾、權識振つたこと、さては氣に入りの誰彼に對する強要的方忌はしい倒錯症の戀愛などをよく知つてゐた。その外エンマ・エドゥワルドヴナが妓樓と財産との代として前の主婦に支拂はなければならぬ六萬留の中三分の一はケルベシュに屬してゐて、この男は大分以前からこの肥えた鴉母と半ば友誼的な半ば取引的な關係を結んでゐると云ふことは、誰にとつても未知のことではなかつた。こんな無恥な無慈悲な貪慾な二人の人間の結合からは女達は自分達にとつてあらゆる災難を期待する外なかつた。

アンナ・マルコーヴナがこんなに安價く家を譲つたのは、ケルベシュが彼女の後めたい事件を多少知つてゐないにしても、矢張り何時でも彼女の弱點を搜し出して後痕なしに食盡して仕舞ふことが出来ると云ふためばかりではなかつた。尤もそんなことに對する口實や言懸りは毎日百宛でも見付けることが出来、あるものは營業禁止のみか或は裁判にかゝる惧れさへあるのであつた。

しかし一方アンナ・マルコーヴナは伴装はつて溜息を吐き自分の不幸病氣孤獨を歎きながら、心中ではまたこんな取引を喜んだ。斯うも云ふことが出来る。彼女は種々な不運と共に老衰の近づくのを大分前から感じ、何にも擾亂されない充分な善良な安靜を求めてゐたのであつた。アンナ・マルコーヴナがまだ並の娼婦であつた極く妙齡の時分には想像さへし得なかつた總てのものは今次へ次へと順番に彼女の前に現れた——樂隱居、市の殆ど中央の氣持い、靜かな街に臨んだ安樂な家庭、可愛い娘ベルトチカ……娘も今日でなくば明日莫大な持參金と立派な貴重品を携へて、技師で家主で市會議員である紳士に嫁入させなければならぬ……今は落着いて急かずに翫味して甘く晝餐晚餐を認めることが出来る——これはアンナ・マルコーヴナが何時も持つてゐた弱點であつた——食後には上等の

家庭用の強い櫻酒を飲み、毎晩知合である立派な中年配の貴婦人と一緒に一哥掛のプレフ・エランス(骨牌遊の一種)をすることが出来る。その婦人達はこの老人の眞の職業を知つてゐるやうな舉動は少しも現はさず、しかも本統はそれをよく知つてゐて、そしてそのことを非難しないばかりでなく、彼女が資金に對して儲けた大きな利子に對して尊敬を拂つてゐた人達である。安樂な老年の喜びであり慰安であるこの優しい知己と云ふのは、一人は貸金所の持主で、も一人は鐵道附近の賑かな旅館の主婦、他の一人は小さいがよくはやる大盜賊仲間で有名な貴金屬商の持主と云つたやうな女であつた。彼等に就いてはアンナ・マルコーヴナの方でも多少の後めたい餘り芳ばしからぬ逸話を知つてゐて話さうと思へば話せるのだが、彼等の仲間では安樂な世渡りの源泉を洗立てするやうなことはせず、唯巧妙、大膽、成功、上品な舉止を尊重してゐた。

しかしまたその外、知識の點では可なり狹隘なあまり發達してゐないこのアンナ・マルコーヴナには何だか驚くべき内的な知覺があつて、それは一生彼女を本能的に首尾よく面白からぬ事件を避け、適時に賢い處置を發見させた。その通りで今度でも、ワーニカフスタニカの頓死と云ひ、それに續く翌日のヂェーニカの自殺のあつてから、彼女は自分の無意識な洞察力のある心で、今迄彼女の娼家を甘く運び、成功を與へ、色々な暗礁をよけてゐた運星が今度は背後を向かうとしてゐることを豫知した。そこで彼女は自ら進んで引退したのであつた。

人の話に、家に火事が起る前とか船が難破する前とかには賢い神經の鋭い鼠は群をつくつて他の場所に移ると云ふことである。アンナ・マルコーヴナも同じくこの鼠のやうな獸的な豫言の知覺に支配されてゐた。そして彼女は正確であつた。すなはちヂェーニカの死後間もなく、前はアンナ・マルコーヴナ・シャイベス、今はエンマ・エドゥワルドヴナ・ティツネルの娼家の上には恰も運命の咒詛がかゝつたやうであつた。死、不幸、喧嘩は恰度セークスピヤ劇に出てくる流血事件のやうにいよ／＼屢しつきりなしに襲ひかゝつて來た。これはヤーマの他の家に於ても同様であつた。

これらのことの先づ第一は取引の清算後一週間経つてアンナ・マルコーヴナ自身が死んだことであつた。しかしそんなことは三十餘年辿つてゐた何時もの軌道から外に出た人々にはよくあることである。頑丈な健康と鐵のやうな意志とを持つてゐる人、英雄も休職になつてそのやうに死ぬ。もとの仲買人も幸運に引退はするが冒險投機の切迫した興味を失

つてそのやうに急に姿をかくす。舞臺を退いた大俳優もその通り急に年をとり、元氣がなくなよぼよぼになるものである。彼女の死は正當な人の死態であつた。ある時プレフランスをやつてゐて氣分が悪くなり、待つて呉れ、すぐ来るからと云つて、寢室の寢臺の上に横はり、深く溜息を吐いて、あの世に移つた。平靜な顔をして、口には平和な老人の微笑を浮べてゐた。イサイ・サヴィチー彼女の一生に於ける忠實な伴侶であり、多少尻に敷かれて、何時も第二流の從屬的な役を勤めてゐた——も僅か一月して彼女の後を追うた。

ベルトチカは唯一の相續人であつた。彼女は隱居所もまた市のはづれか何處かにある土地も大變首尾よく金に變へ、豫想通りに大變幸福に嫁入りをした。そして今日に至るまで彼女の父は小麥粉をオデッサ及ノヴォロシイスクを経て小亞西亞に輸出する巨大な商業を勞んでゐたのだと信じてゐた。

ヂューニヤの屍體が屍體收容所に運び去られたその日、一人の嫖客さへまだヤーマ街に現はれない時刻に、總ての抱女達はエンマ・エドゥワルドヴナの吩咐で廣間に集まつた。この重苦しい日にヂューニヤの怖ろしい死の印象がまだ全く消失せないのに彼等をして例の通り厭にけばよしい呑氣な衣裳をつけて煌々と輝やいた廣間に出、踊つたり歌つたり、

た出し裸肉體で淫蕩な男を誘惑することを強いられるのは随分辛いことではあるが、それにさへ敢て不平を洩すものはなかつた。

その内にエンマ・エドゥワルドヴナが廣間に這入つて來た。彼女は何時もよりもまだ尊大であつた。黒い絹の着物を着、大きな胸は物見櫓のやうに突き出、その上に二重の肥えた頰が垂れかゝつてゐる。黒い絹のミイテンキには大きな金の鎖がついてゐて、それは頸の周圍を三回巻いて尖端にある重いメダルは恰度腹の上に懸かつてゐる。

『皆さん』と彼女は説諭するやうに云つた。『私は……お立ちなさい』と突然彼女は命令するやうに叫んだ『私が話す時は必ず立つて聞くのです』

皆は驚いて顔を見合した。こんな命令は此家では初耳であつた。兎に角女達は眼や口を開けたまゝ不精無精續いて立つた。

『是非とも……皆は自分の主婦に拂ふべき尊敬を今日から私に向つて拂はなければなりません』とエンマ・エドゥワルドヴナは勿體らしく重味をつけて云始めた『今日から此家は法律の手續によつてあの善良な尊敬すべきアンナ・マルコーヴナさんから私、すなはちエンマ・エドゥワルドヴナ・ティツネルに移つたのです。私達はお互に喧嘩したりしないや

うに、また皆も賢い従順しい良い教育のある娘さんのやうに身持をつゝしんで貰いたいものです。私は皆に對して生の母同様になりませう、しかし唯このことだけは覚えてゐて下さい、私は怠惰や酩酊や我儘や不仕鱈は容赦しませんから。シャイベス夫人は實を云へば餘りに皆を甘くあしらつてゐました。おゝ、私はすつと嚴格にします。規律がユーベル・アルレス……先づ第一です。大變残念なことには露西亞人は怠惰なむさくるしい馬鹿な國民でこの規律を知りませんが、しかし心配しないでよろしい、私は皆の好いやうに教へてあげます、私は『皆の好いやうに』と云ひますが、それは私の第一の考へはツレツペリの競争を斃さうと云ふのだからです。私は皆のお客が立派な男であるやう、道樂者や菰被りや書生つぽや藝人風情でないやう望むのです。私は家の娘達が街中で一番綺麗な、一番立派な教育のある、一番健康な、一番愉快な娘であることを望むのです。私は立派な裝飾をするためなら金銭などは少しも惜しくありません、さうすれば皆にも絹物や本統の綺麗な絨氈のある部屋が出来るのです。お客も、早や麥酒などを注文せずに、立派なボルドーやブルグンドや三鞭酒を取るやうになります。覚えてゐなさい、金持の立派な地位で好い年配のお客は決して單純な普通な粗雑な愛などを愛するものではありません。カイエン胡椒の

やうなビリッとするのが必要なのです、職人ではなくて藝術家が必要なのです、それも皆はすぐ覺えるやうになります。ツレツペリでは時間極めが三留で一晩は十留ですが私は皆が時間極めは五留、一晩は二十五留貰らへるやうに極めませう。皆は黄金や寶石を貰へるやうになります。皆がもと低級な家、ウント・ゾ・ワイテル……兵隊對手のところで行かなくて好いやうに旨くします。いや、銘々が貯金をして毎月の収入を私に預ける、それを皆の名で銀行に預け、利息を生み、利息がまた利息を生むやうにしませう。さうすれば誰でも、もう仕事に疲れを感じたり、堅氣な人の所へお嫁入しようと思つたりする場合には、何時でも多額ではなくても確かな資本が手許にある譯です。リガの好い家や外國では何處でもさうしてゐます。其處で私のことをエンマ・エドゥ・ワルドヴナはやれ蜘蛛だのやれ狐だのやれ吸血管だのなど、云はないやうにしませう。しかし不従順や怠惰や我儘や間夫などは非道く罰します、厭な雑草のやうに外へ抛出すか、もつと悪いことになります。これで私は云ふだけのことはみな云つて仕舞ひました。ニイナ、此處へお出でなさい。後の皆も順番にお出でなさい』

ニインカは逡巡とエンマ・エドゥ・ワルドヴナの直ぐ傍まで寄つたが、驚いて尻込みした。

エンマ・エドゥワルドヴナは彼女に右手を差延べて指は下に垂れ、その手をニインカの唇にそろ／＼と持つて行くのであつた。

『接吻しなさい』と、エンマ・エドゥワルドヴナは言合めるやうに斷然と云つて、眼を細くし頭は恰度王座につく王女のやうな尊大な姿勢で背後に反りかへつてゐた。

ニインカはすつかりどさまぎしてその右手は十字を切らうとしたが、それを直して、差出された手に音高く接吻して片脇に退いた。彼女に續いてゾーヤ、ヘンリユッタ、ワンダ、其他の女も同様に近寄つた。唯タマーラひとりだけは壁の側に鏡を背にして立つてゐた。この鏡はデューニカが廣間を行つたり來たりしながら窺込んで自分の姿に見とれることの好きであつたものである。

エンマ・エドゥワルドヴナは命令するやうな頑強な蟒蛇つねぼらの眼付を彼女に注いだが、この催眠術は功を奏しなかつた。タマーラは顔もそらさず、瞬もせず、しかし何の表情も顔に浮べないで、この眼付を受けこたへた。その時新らしい女將は手を降ろして、顔には微笑に似たやうなものを浮べ、皺喰れ聲で云つた。

『お前さんには、タマーラ、別に差向ひで一寸云ふことがあります。お出でなさい』

『承知しました、エンマ・エドゥワルドヴナさん』とタマーラは落着いて答へた。

エンマ・エドゥワルドヴナは嘗てはアンナ・マルコーヴナが煖めたクリーム入りの珈琲を飲むのが好きであつたあの小部屋に這入つて長椅子に坐り、タマーラには自分の向側の席を指した。暫らくの間二人はお互ひに搜り合ひ、疑つたやうに顔を見合して黙つてゐた。

『あなたの遣り方は正しかつた』と到頭エンマ・エドゥワルドヴナは口を切つた『他の抱女のやうに私の手を接吻しに來なかつたのは賢い遣り方でした。しかしどの途私はあなたにそんなことはさせない筈だつたのです。あなたが側に來た時、皆んなの眼の前であんたの手を執つて鴉母の首頭の地位をあなたに上げる積りだつたのです、解るでせう、私の右腕となつて貰ふ、あなたにとつては大變有利な條件の下でね』

『有難うございます……』

『いや待つて頂戴、話の腰を折らないで。私は仕舞ひまで話しますから、その上であなたの否應を聞かして貰ひませう。しかし私はあなたに譯を聞きたいが、朝あなたが私に拳銃けんじゆを突付けた時、どうする積りだつたのです。本統に私を殺す氣だつたのですか』

『反對ですわ』とタマーラは叮嚀に答へた『反對ですわ。私にはあなたが私をお打ちになるやうに思はれたんですもの』

『おやまあ、何と云ふのです、タマーロチカ。二人が知己になつて以來一度だつてあなたを打つやうなことはしなかつた。それ處かあなたに向つて亂暴な言葉を云つたことさへないのには氣が付かないんですか。何を云ふのです、何を云ふのです。私はあなたを他の馬鹿な抱女とごつたにしたりはしませんよ、有難いことにはこれでも私は経験を積んだ、人の見別けのつく人間ですからね。私にはよく解つてゐます、あなたが本統の教育のある娘さんで、例へば私などよりはずつと教育のある方だつてことは。あなたは鋭敏な繊細な賢い方です。あなたは外國語を知つてゐる。私はあなたが音楽をよく知つてゐることも信じます。それから打明けて云へば、私は少々……どう云へば好いか、何時も少々あなたに惚込んでゐるのですよ。それにあなたは私に拳銃を突付けるとは！あなたの親友になることの出来る人間に！さあ、そのことをあなたはどう考へますか』

『でも……別に何も、エンマさん』とタマーラは全くおとなしい本統らしい調子で答へた『万事が大變譯もないことなんですの。私はその前にチェーニカの枕の下に拳銃を見付け

たので、あなたに渡すため持つて來たんですの。あなたが手紙を讀んでゐらつしやる時あなたの邪魔をする氣はなく、ところがあなたが私の方にお向きになつたので、あなたに拳銃を差上して、御覽下さい、こんなものがありましたと云ふ積りだつたのです。まったく死んだチェーニカが手許に拳銃を持つてゐながらあんな恐ろしい、首吊りなんかしようとは思ひもよらぬことで、大變吃驚したのです。それだけのことですわ』

エンマ・エドゥワルドヴナの濃い怖ろしい眉は上に揚つて眼は愉快に大きくなり、太つちよの頬には故意とでない本統の微笑が浮んだ。彼女は大きく両手をタマーラに差伸ばした。

『それだけのことだつたのかえ。O mein Kind！私は何てことを考へたんだらう。あなたの手をお貸し、タマーラ、あんなの可愛い白い手を、そしてあなたをアウフマインヘルツ私の胸に抱きしめて接吻さしてお呉れ』

タマーラが大なる骨折と嫌惡の情をもつて辛うじてエンマ・エドゥワルドヴナの抱擁からすり抜けたほど接吻は長かつた。

『では今度は肝心の用事を。そこで私の條件ですがね、あなたが鴉母になつてくれる、私

は純益の一割五分をあなたに上げる。よくよくお聞きなさいよ、タマール、一割五分ですよ。その外幾何かの月給を上げます、一月三十留か四十留、さあそれとも五十留。好い條件でせう。私は確かに信じます、あなたでなければ誰だつて私を助けて此家を繁昌させ、此の市街ばかりでなく、南露中での一等立派な家にするには出来ないんです。あなたは趣味もあり頭脳もある。その外あなたは何時でも本統に口やかましい本統に厄介なお客をうまくあしらふ腕を持つてゐるんですからね。稀に大變金持で身分のある紳士——露西亞語では^{カラス}と云ひ、私の國では「Freier」と云つてゐますが——そんなお客があなたに見惚れた時は——だつてあなたは本統に綺麗なのですものね、タマールロチカ（主婦は彼女を曇つた濡るんだ眼をして眺めた）私はあなたがお客と面白可笑しく時を過ごすのをちつとも禁じはしません、唯自分の義務、地位によつてあなたがそんな権利を持つてゐないと云ふことを言張つて置してね。Und so weiter, und so weiter—Aber sagen Sie bitte　あなたは獨乙語が樂にお出来でせうね』

『Die deutsche Sprache beherrsche ich in geringem Grade, als die französische; indess kann ich stets in einer Salon-Plauderei mitmachen』（獨逸語は佛蘭西語ほどには行きませんが客

間の無駄話位なら出来ます）

『O. wunderbar! Sie haben eine entzuckende Rigor Aussprache die beste aller deutschen Aussprachen. Und also, fahren wir in unsrer Sprache fort, sie kling triel süßer meinem Ohre, Mit rsprach. Schön?』これは結構。あなたは獨逸語中でも一番正しい見事なりガの發音ですね。では母國語で話を續けませう。私には母國語がずつと氣持がいゝんですから。好いでせう』

『ようございます』

『其處です、ね、あなたは厭々のやうに、仕様ことなしのやうに、憂さ晴らし一時の氣まぐれのやうに、そして肝心なのは私には内密でそつと、お客の云ふ通りになるのですよ。解つたでせう。さうすれば馬鹿なお客はたんまり出しますよ。だがそんなことは今更教へるにも當らないわね』

『え、お神さん、全くでございますね。あなたの仰せ通りにいたしましたせう。しかしこんなことは無駄話どころか、眞面目な話なんですから露西亞語で云つて下さつた方が私には都合がよろこびます。私はあなたの仰せ通りにいたしますせう』

『ではその先！私が今云つたのは情人のことですがね。私はその樂みを禁じはしませんが、賢くして、男が此處へ遣つて來ないやうに、また來るにしても出來るだけ度數少く。その代り私はあんたが全く自由である外出日を上げます。だけれどそんな男なしに濟めば尙結構ですがね。そうすればあんたの利益になります。邪魔者になるばかりですからね。自身自身の經驗からお話しますので。少し辛棒して居れば、三四年して事業が繁昌する、從てあんたにもまとまつた金が出る、さうなれば立派な一人前の人としてあんたと一緒にやる。十年経つてもあんたはまだ若いし綺麗だから、その時こそ氣に適るだけの男を買ひ取るんですね。その時分になればロマンチックな馬鹿けた考はすつかりあんたの頭腦から無くなつて、最早人があんたを選ぶのではなく、あんたが充分考へを廻らして人を選ぶことになります、恰度その道の人が寶石を選ぶやうにね。あんたは私の云ふことに承知せうね』

タマールは伏眼になつて微かに莞爾した。

『あなたのお仰有る通りですわね。私は私の男を捨て、仕舞ひませう、しかし一遍にはなしに徐々と。それには二週間ほど掛ります。男が此處へ遣つて來ないやうに計らひます。』

私はあなたの御申出をお受けします』

『それで結構』とエンマ・エドゥワルドは立上りながら云つた『今度は好い甘い接吻で契約を結びませうね』

そこで彼女はまたタマールを抱いてひつたりと接吻した。伏眼になつて無邪氣な優しい顔をしたタマールはこの時はまるで小娘のやうに見えた。しかし到頭主婦の手からすり抜けて彼女は露西亞語で訊ねた。

『御覽の通りエンマ・エドゥワルドさん、私は何も彼もあなたの仰有ることを承知しました。その代りどうか私の一つの願ひをかなへて下さい。あなたには何でもないことなのですからと云ふのは、私や他の娘達にディーニヤの葬式を見送ることを許して下さいね』

エンマ・エドゥワルドは顔を擧げた。

『あんたがさうしたければ私は別に異存もありませんがね。唯何のためでせう。死んだ人間にとつてそんなことは何の役にも立たなければ、生き返らせるものでもなし。唯女々しいだけのことです。しかしよろしい。しかしあんたも知つてゐるでせうが、此國の法律で

は自殺者は葬式をせずに 確かなことを知りませんが何でも、墓裏の何か汚ない穴かなんかに抛り込むとかでせう』

『いゝえ、ではどうぞ私の好きなやうにさせて下さい。これは私の我儘かも知れませんが私の云ふやうにさせて下さいね、エンマ・エドゥワルドウナさん。その代りには屹度これ限り、今後は我儘を申しません、今後は腕前のある將軍の下についてゐる賢いおとなしい兵卒のやうになりますから』

『Es git (よろし)』と溜息をしてエンマ・エドゥワルドウナは讓歩した『私はあんなのことなら何も撥ねつけることが出来ないんですよ。さあ握手しませう、お互の利益のために一緒に精を出ませう』

そして戸を明けて廣間越しに玄關の方に聲をかけた『シメオン！』シメオンが部屋に遣つて来た時、彼女はいかつらしく吩咐けた。

『此處へ三鞭酒の半壺を持つておいで、本統のをだよ——Felderer aemi zecとして冷えたのを。さあ大急ぎで』と彼女は眼を丸くしてゐる門番に吩咐けた『一緒に乾杯しませうね、タマーラ、新しい事業のために、立派な有望な將來のために』

亡者が幸福を持つて来ると云ふ諺がある。若しこの迷信に何らかの根柢があるものならば、それはこの土曜日にて最も明らかに言ひ表はされたのである。客の流れ込んで来ることは土曜日として見ても非常なものであつた。女達は廊下づたひにディーニヤの部屋の側を通りすぎながら、足を早め恐々と其方を横眼で眺め、或者は十字を切つたりさへした。しかし夜半になつて恐ろしさは慣れて来て稍おさまつた。どの部屋もお客で、廣間では内障眼の樂手が何處かで見付けて引張つて来た新參のヴァイオリニストである若いだらしない態の顔を剃つた男が斷間なしに演奏してゐた。

タマーラが鳩母に選ばれたことは冷淡な不審、無言の不愛想をもつて迎へられた。しかし時を見てタマーラは白いマーニカに囁いた。

『お聞きよ、マーニカ。皆に云つて置いて頂戴ね、私が鳩母になつたことに餘り眼をつけないやうに、さうするのが必要だつたの。皆んなは何なり好きなことをしても好いが、唯私を弱らすやうなことだけわね。私はもと通り皆とは仲よしで味方ですよ。この先のごことは直ぐ分るやうになるから』

翌る日の日曜日タマーラは色々と用事が多かつた。どんな事情をも押しして是非とも死んだ友達を葬つてやりたい、人々が自分の近親のものを葬るやうに、基督教の儀式によつて、世間の人の葬式通り悲壯に葬つてやりたいと云ふ考が強く堅く彼女の裡に湧いた。

彼女は何時も眼を半分開いて眠つてゐるやうな、無駄な精力消耗を避けてゐるやうな、而も時が來たら覺醒して前途の障碍を念頭に置かずに突進せんとする非常な精力をば、外面の物倦さうな平靜、茫然とした沈黙、利己的な他所々々しさの蔭に潛めてゐる、變な性格の一人であつた。

十二時に彼女は辻馬車に乗つて古い市街の方に下り、市の廣場に通じてゐる狭い道を通り抜けて、可なり汚ない喫茶店の側に止まり、馬車を待たせた。喫茶店で彼女は緒髪の角刈で頭にチックの別け目のある少年に、セニカ・ワクザルが來なかつたかと訊ねた。氣取つた様子で見ると給仕らしい少年は以前からタマーラを知つてゐたのでかう返事した。

『いゝえ、セミヨンイグナーティチさんはお出でになりません。また直ぐはお出でにはありませんでせう。何しろ昨日はトランスパールで御遊びで朝の六時迄球突きをなさいましたから、今頃は屹度お宅で『ベレブーチェ』の御部屋でせう、しかし何なら一走り行つて参りませう』

タマーラは紙と鉛筆とを貰つて其の場で二言三言書いた。それから紙片に五十哥駄賃をつけて給仕に渡して出て行つた。

次に訪問したのは女優ロビンスカヤの處で、タマーラが前以つて知つてゐた通り、女優は市街の上流の旅館である『歐露巴』で數部屋續きを借りて住んでゐた。

女優と面會することは容易ではなかつた。階下の門番はエレナ・ヴィクトロヴナは御留守らしいと云ひ、またタマーラのノックで出て來た女優の女中は、奥様は頭痛がなさるので誰とも御面會にならないと告げた。又してもタマーラは紙片に認めなければならなかつた。

『あなた様が嘗て大きな聲では申されぬ家でダルゴムイスキイの歌をおうたひ遊ばした後にあなた様の前に跪いて泣いたあの娘のことで私は参つたのでございます。あの時あなた様はほんとうに優しくあの娘をおいたわり遊ばしました。嗚御記憶のことゝ存じます。

御心配なく——あの娘には最早誰方の御助けも入りませぬ、あの娘は昨日なくなりまして。しかしあの娘のごことを思つて大變重大な一事をしてやつて下さいまし、それはあなた様には何の譯もないことなのでございます。私はあの時あなた様と御一緒にいらつした男爵夫人様に對して失禮なことを申上げた女でございます。そのことは今も後悔しおあやまりいたします』

『御渡し下さい』と彼女は女中に命じた。

女中は二分間経つて歸つて來た。

『どうぞ此方へ。少し御加減が悪く身采みなりもきちんとして被居いせんが悪しからず』

彼女はタマラを案内して前の戸を開き、また靜かに閉めた。

名女優は美くしい波斯絨氈や澤山の絹枕や柔らかい絨氈の長枕に被はれた絹夜具の上に横はつてゐた。足は銀色の柔らかな毛皮で包まれてゐた。指は例によつて深い柔らかい綠色で人の眼をひきつける緑玉入りの澤山の指環で飾られてゐた。

女優にとつて今日は厭な面白くない日であつた。昨日の朝監督と行違ひが出来るし、夜は彼女が望んだほど觀客は喝采して呉れない、尤もそれは單に彼女にさう思はれたとだけか

も知れないが、そして今日はまた藝術に關しては牛が天文を知らない以上無理解である馬鹿な批評家が新聞で彼女の競争者であるチターノワを褒めちぎつたのである。そこでエレナ・ヴィクトロヴナは頭痛がする、顚顚が神経質に痙攣する、不意に氣が減入るやうになると云ふ次第であつた。

『ようこそ』と彼女は少し鼻にかゝつた弱い青褪めた聲で、恰度肺病をわづらつて焦悴こがれ死する女主人ヒロイン公が舞臺で云ふやうに途切れ／＼に云つた『此處へ御掛けなさいまし。よくお出で下さいました。どうぞ悪しからず、私は頭が痛いやら胸が減入るやうでまるで死にさうなन्दでございますから。たど／＼した話し振ですが御免下さいね。歌ひ疲れて聲をこわして仕舞つたらしいのでございます』

ロピンスカヤは勿論あの晩の無鐵砲な無禮やタマラの獨特の忘れることの出来ない顔などを思出さないではなかつたが、しかし今秋の日の退屈な散文的な光の下で不機嫌な折にはこんな出來事は必要もない傍若無人で何だか故意とらしい取つてつけたやうな恥づべきことのやうに思はれた。しかし彼女はあの變な悪夢のやうな晩自分の天才の力で傲慢なヂューニカを足許に平伏させた時も、又今そのことを疲れ物倦さ俳優獨特の放心をもつて

思起した時も、同じやうに眞剣であつた。彼女は多くの秀れた俳優と同様に何時も役割を演じ居り、何時も自分自身ではなく、恰度観客の眼や感情をもつて遠くから自分自身を眺めるやうに何時も自分の言葉動作行爲を見るのであつた。

彼女は枕から細い瘦せた美しくしい手をぐんにやりと揚げて額に當てた。すると神秘的、深緑色の寶石が生きてゐるやうに揺らいで、暖い深い光を放ちはじめた。

『私は今あなたの書付を拜見しましたが、あの可哀想な……御免なさい名前を失念して仕舞ひまして……』

『ヂューニカでございます』

『さうさう、有難う。やつと思出しました。あの方はおなくなりになつたのですつて。何ですか』

『首を縊つたのでございます。昨日の朝、お醫者の検査の時に』

凋れたやうに元氣のなかつた女優の眼は急にぱつと開いて妖しく活氣を呈し、指環の緑玉のやうに緑色にびか／＼と光り出した。そしてその裡には好奇、恐怖、嫌厭の情が映じた。

『あらまあ、あんな可愛い、あんな風變りな綺麗な、あんな熱烈な方が！あゝ可哀想に、可哀想に！何か理由がありましたの』

『御存じの通り病氣でございます。あの娘が申上げました通り』

『さう、さう、覚えてゐます、覚えてゐます……でも首を縊るとは！何と云ふ恐ろしいことでせう。あの時養生するやうに注意して上げたんですのに。此節は醫學は奇蹟でも行ひますからね。私自身でもすつかり、さう、すつかり癒つた人達を多少知つてゐます。そんなことは社會の人は皆知つてゐてその通りしてゐるのに……まあ、可哀想に。可哀想に。』

『其處で私がお伺ひしたのでございます、エレナ・ヴィクトロヴナさん。こんなことを申上げられた譯ちやございませんが、何分私は森の中にあると同様獨りぼつちで、誰様にもお願ひする方がないのでございます。あなたはあの晩本統に御親切でよく氣を付けて下さつて優しくして下さいましたものですから……私には唯あなたの御忠告、また出來ますものなら少々あなたの御蔭、あなたの御力添が頂きたいのでございます』

『さあ、どうぞ御遠慮なく。出來ることなら何でも致しませう。あゝ頭が痛いと思へば、

その後はまた何と云ふ恐ろしい知らせでせう。さあ仰有つて下さい、何かお役に立つことが出来ますか』

三四二

『實を申せば私とてもまだ何だか解らないので』とタマールは答へた『あの娘を屍體收容所に連れて行つたのでございます。しかし今の處では検視だとか、途中もあり、受付に時をかゝる、そこでまだ解剖にかゝつてはゐないと思ひます。それで出来ることなら、あの娘の屍骸に手をつけさせたくないでございます。今日は日曜日ですから多分明日に延びるでせうから、今の間なら何とか出来るかと存じます』

『きつぱりとは申上げられないが……お待ちなさいよ、私には誰か教授か醫學者仲間に知己がありませんかしら。お待ちなさいよ、後で知人名簿を見つみませう。多分何とか出来るでせうよ』

『その他』とタマールは云ひ續けた『私はあの娘を葬つてやりたいのでございます。費用は私がして……私はあの娘とは本統に仲よしだったのでございますから』

『いゝえ、いゝえ、本統に有難うございますが……何もかも私が致します。あなたの親切

な御心におすがり致したいのは山々でございますが、こればかりは——お解り下さるだらうと存じますが——人が自分自身親友の記念に與へた誓と云つたやうなものでございますから。ところが肝心の困難と申すのは、どうしてあの娘を基督教の儀式によつて葬ることが出来るやうかと云ふのでございます。あの娘は未信者かそれともあまり信仰がなかつたやうでございます。私とても同じで、唯偶然に時々額の上で十字を切る位でございます。それでも私はあの娘を犬か何かのやうに墓裏の何處かに無言で物も言はず歌もうたはず抛込んで仕舞ひたくありません。正當に坊様に來て頂き歌もうたつて葬ることが許されるかどうか存じません。でございますからどうぞ御言葉添へをお願いする次第でございます。それともあなたの御言葉で私は何方かへ參るなり……』

此處に至つて女優は段々と乘氣になつて、自分の疲勞や頭痛や第四幕目で死ぬ肺病の女主人公のことなどは最早忘れた。淪落の女に對して情深い天才の立派な姿、保護者の役割が彼女の眼の前に浮んで來た。それは奇拔オリジナルで異常でそれと同時に劇的な感動を與へる事柄であつた。ロビンスカヤは多くの同僚と同じく、群衆から卓越し、自分の事を人の口に上らせないで一日は愚か、出来るなら一刻たりとも蔑ゆゑせにしないのであつた。今日似而非

愛國演説に加はるかと思へば翌日は追放に處せられた革命家のため炎と復讐にもえた煽動的な詩を演壇の上から朗讀すると云ふ風であつた。彼女は園遊會や競馬場で花束を賣つたり大舞踏會で三鞭酒を賣つたりするのが好きであつた。彼女は翌日全部の人が口にする感激の言葉を豫め考へて置いた。彼女は到る處で何時も人々が彼女ばかりを眺め、彼女の名前を繰返し、彼女の埃及式な緑色の眼、猛獸のやうな官能的な口、瘦せた神経質な手の指環の緑玉を愛して呉れることを欲した。

『私は今直ぐかうと取計らうことは出来兼ねますがね』と彼女は一寸黙つてから云つた『然しもし人が一端かうと強く欲するなら、その通りになふもので、私は眞心からあなたの望をかなへて上げたいと思ひます。お待ちなさいよ、お待ちなさいよ。何だか素的な考が頭腦に浮んで來たやうです。あの晩私達と一緒にには私と男爵夫人の外に誰かゝりましたからね』

『私はその方達を存じませんが……お一人の方は皆様より一足遅れて御出になりました。その人は私の手に接吻して、若し用が出來たら何時でも力を貸すと仰有つて、名刺を下さいましたが、局外者には誰にも見せないやうにとのお言葉でした。その後で何だかかゝすつね』

かり忘れてゐました。私は何かに取紛れてその方が誰方であつたか知らずに打やつて置きました。で昨日名刺を捜しましたが見當りませんでした……』

『お待ちなさい、お待ちなさい……私は思ひ出しましたよ』と俄かに女優は元氣づいた『さう』と彼女は素早く長椅子から起上りながら叫んだ『リ・ザ・ゾフです。え、え、え、辯士のエラスト・アンドレエウイチ・リ・ザ・ゾフですよ。直ぐ取はからひましよう。素的な思付きですわ』

彼女は小さな卓の方に振向いた。卓上には電話機が乗つてゐた。彼女は呼鈴を鳴らして『もし〜、13—85番、有難う……もし〜、恐入りますがエラスト・アンドレエウイチさんを電話口まで……女優のロピンスカヤです。有難う……もし〜、エラスト・アンドレエウイチさんですの。ようござんす、ようござんす、でも今別に差當つての用事はありませんの。あなたは暇？ そんなこと打遣つてお置きなさいよ。眞目な用件ですの。あなた十五分間私の家へお出で下されませんか。いゝえ、いゝえ、……さうですの。唯善良な賢い方として。あなたは自分の悪口をなさるのね……さう、それが結構ですわ。私はちやんと衣裳を着けてはゐませんの、しかしそれには辯解があります……ひとく頭が痛い

五四六
んですもの。いゝえ、御婦人、娘さんです。逢つて御覧になれば解りますわ、大急ぎで被居いね……有難う。さよなら!』

『直ぐ被居いますよ』とロビンスカヤは受話機をかけながら云つた『あの方は大變賢い好い方です。あの方になら大抵のことが出来ます、殆ど人間に不可能なやうなことも……まあ兎も角それ迄……失禮ながらお名前は』

タマールはへどもどしたが、後で自分でも可笑しかつた。

『お耳に入れるほどでもありませんの、エレーナ・ヴィクトロヴナさん。私の源氏名はタマールですが、實はアナスターシャ・ニコラエヴナでございます。でも同じことでも——タマールとでもお呼び下さいね。その方が耳慣れてゐますの』

『タマール、好い名ですわね。ではタマールさん、御迷惑でせうが一緒に食事をして下さるでせう、多分リャザノフさんも一緒に』

『暇がございませんから、お許し遊ばして』

『それは残念ですこと。では何時か日を改ためて是非ね。煙草は召し上るでせう』と彼女は金の煙草入を進めた。それは例の彼女の好きな緑玉で大きなEと云ふ字が鏤めてあつ

た。

直ぐ間もなくリャザノフが遣つて來た。

あの晩よく彼を見て置かなかつたタマールは彼の様子に吃驚した。背の高い、殆ど拳闘家のやうな體格で、ベトーヴェンのやうな廣い額には白髪交りの黒い頭髮が無雜作に上品に垂れかかり、熱烈な雄辯家のやうな肉の厚い大きな口、澄んだ、表情に富んだ、賢ささうな、人を嘲笑するやうな眼をしてゐて、彼は數千人の中でも眼につく容姿——人の魂の征服者、人の心の勝利者、充分野心のある、まだ生に飽滿しない、愛情に熱烈で美しい不分別の前には一步も後退りしない人のやうな容姿をしてゐた。『もし私が運命の手にこんな非道く傷けられてゐなかつたなら、』とタマールは満足して彼の動作に眼をつけたがら考へた『この人にこそ私は自分の生命を投げ出す、ふざけながら、喜んで、笑つて、恰度愛人に薔薇を千切つて投げるやうに……』

リャザノフはロビンスカヤの手に接吻し、それから極めて自然な心易さでタマールと挨拶をして云つた。

『私達はもうお知合ですわ、あの物狂はしい晩以來、あなたが佛蘭西語を知つてゐること

で私達みなを吃驚させた時、そしてあなたと話をした時からね。あなたの云つたことはお互の間に限られてゐて、パラドクシカルだが、その代り何と云ふ言葉だつたらう。今でも私は覚えてゐる、あなたの語調、あれほど熱烈な、心情の溢れた……さて、エレーナ・ヴィクトロヴナさん」と彼は凭れない低い小椅子に坐りながら、またロビンスカヤに向つて云つた『御役に立ちますなら何なりと？ 御用の趣は』

ロビンスカヤはまた物惱ましげな態で指先を顚顚に當てた。

『あゝ本統に私はすつかり氣が變になつて仕舞つてゐます』と彼女は故意と美くしい眼を曇らせながら云つた『それにこの頭も……その卓からピラミドンを取つて下さいませんか。話は悉しくタマールさんから伺つて下さい。私には駄目、出来ません。それは怖ろしいんですもの』

タマールはデューニカの死の悲しい物語を一部仔細手短かに筋道を立て、傳へ、辯護士が残して行つた名刺のことも、その名刺を大事に仕舞つてあることを述べ、序でながらに必要の際には助力してやると云つた彼の約束をも仄めかした。

『勿論です、勿論です』とリャザノフは彼女が語り終つた時に叫んで、例の癖で繪に見る

やうな頭髮を掻き上げては後ろに撥ねながら、部屋の中を大股で往つたり來たりしはじめた『あなたの行爲は立流な赤誠のある友情の發露です。結構です、大變結構です。私はあなたに對して……あなたの仰有るのは埋葬の許可ですね……ふむ、かうつと……』
彼は手で額を撫でた。

『ふむ、ふむ、教會法規百七十……百七十……百七十……八……多分宙で覺えてゐると思ひますが『心狂へるにあらずして自殺せる者は挽歌も歌はれず賤しまるべし』です。ふむ、提摩太書を御覽なさい……ぢや、先づ第一には……あなたのお話ではあの娘を細から下ろしたのはあなたの方の醫者ですね、市醫ですね……名前は？』

『クリメンコでございます』

『何だか何處かで逢つたやうな氣がしますがね。よろしい！ あなたの區の署長は』

『ケルベシュでございます』

『はい、知つてゐます、扇子形の緒髻をした頑丈な男らしい奴でせう、さうでせう』

『はい、その人です』

『よつく知つてゐます。もう懲役に行つても好い奴です。十度ばかりも私の掌中に取扱ま

つたんですが、何時も奴さん甘く逃出してゐたんです。泥鯱みたいなぬる／＼した奴です。今度は彼奴に袖の下を扼ませなければなりません。それでと。それから屍體收容所だが、……あなたは何時お葬ひをしようつてんですか』

『どうも私には解りませんのです。出来るだけ早い方が結構で……出来るなら今日でも』
 『ふむ、今日、お請合は出来ませんね——間に合ふかどうか。しかし此處に私のメモラ
 ンドがありますから、この頁にでも、Tの頭字のつく知人の欄にお書きなさい、タマール
 と、それから宛名。二時間程したら返事を上げます。これでかたがつくのですか。だがも
 一度申して置きますが、どうしても葬式は明日まで延ばすやうになるでせうよ。それから
 と——、失敬な申分ですがお金が御入用でせう』

『いゝえ、どう致しまして』とタマールはことわつた『お金はございます。御力添え下さ
 つて有難う存じます。もう失禮いたします。心からお禮申上げます、エレーナ・ヴィクト
 ロヴァさん』

『では二時間後を待つてゐて下さい』とリャザノフは扉口まで見送つて繰返した。
 タマールは直ぐには家に歸らなかつた。彼女は途中でカトリック街にある小さな珈琲店

に立寄つた。其處では通稱ステーションのセーニカが待つてゐた。快活な男で、綺麗なジ
 ブシイの貌付きをして、黒いと云ふよりは青い頭髪で、黒い瞳で黄ろい白味の、腕前にか
 けては決斷力に富んだ大膽な男だから、土地の泥棒仲間の誇であり、彼等の世界での名物
 男で、發明者、鼓舞者、首領であつた。

彼は席から立上らずに手を彼女に延ばした。しかし氣を付けて、多少力を入れて、彼女
 を席につかせた様子の中には、廣い心柄のよい優しさが窺はれた。

『今日は、タマルカ。久し振りだ、逢ひたかつたよ。珈琲はどうだね』

『たくさんよ。用事なの……明日はチェーニカのお葬らひ……首を縊つたの』

『さう、俺は新聞で見た』とセーニカはぶつきら棒に呟いた『どうでも好いさ』

『直ぐ五十留都合しておくれよ』

『タマールカ、一文無しだ』

『好いかね、都合しておくれよ』と命令するやうに、しかし別に腹を立てずに、タマール
 は命じた。

『生憎だね、約束した通りお前の仲間に迷惑はかけなかつたが、何しろ日曜日だから……』

貯金局は休みだし』

五五二

『なにさ、通帳を質に入れると好いわ。どうでもいゝやうにしておくれよ』
『何に入用なんだね』

『どうでも好いぢやないの、馬鹿ね。葬式費なの』

『ぢや承知した』とセーニカは溜息をついた『それでは夕方に自分で持つて行つてやらう。好いかい、タマーロチカ。お前が居なけりや俺は此世が實に詰らないんだよ。お前に接吻しつゞけて眼をつむる暇もないやうにしてやりたいものだね。それとも来るかい』

『いゝえ、いゝえ、セーネチカ、私の云ふ通りしておくれ……私にまけておくれよ。お前さんのところへ行く譯にはいかないの、——今ぢや私も鳩母だからね』

『大したことだね』とセーニカは吃驚して聲を引張つて云ひ、口笛を鳴らしさへした。

『えゝ、でお前さんも當分はね、来るのを控へてお呉れよ。その代り後には、後にはお前さんの思ひ通りにね。間もなく万事に鼻につくのよ』

『あゝ、あんまり俺をいぢめてくれるなよ。早く足を抜くさ』

『足は抜きますよ、もう一週間待つてね、散薬は手に入つた？』

『散薬かい——雑作なしさ』とセーニカは不満足さうに答へた『唯散薬ではなくて丸薬だよ』

『水にすぐ融けるつて本統なの』

『本統だよ、俺自身見たもの』

『でも死なゝいんでせう。ねえセーニカ、死なゝいんでせう。本統？』

『どうもなりやしないさ。唯眠るだけだよ。あゝタマールカ』と彼は熱烈な小聲で叫んで、果ては耐らなくなつて骨組がみし／＼云ふ程突然強く身体を延ばした『早くお仕舞にしよ。やつ／＼けちやつて、いよいよだ。何處へでも行か。お前の好き勝手のまゝさ、オデッサへでも突走らう、外國へでも。お仕舞にしよよ早く』

『早くね、早くね』

『お前が一寸眼交ばせさへしてくれゝば、俺は何時でも合點だ。散薬であらうが、道具であらうが、旅券であらうが。その擧句ぐらう……と鳴つて汽車が出る。タマーロチカ、好いね』

そして何時も控目な彼も局外者が見るのも忘れて、タマーラを擁へて自分に緊めつけや

うとした。

五五

『いや、いや』とタマールは猫のやうに素早く巧みに椅子から跳び退いて『後でね、後でね、セーネチカ、後でね。お前さんの言ひなり次第になりますよ。一言も撥ねつけたり、禁じたりしないで。お前さんには秋風が吹くでせうよ。さよなら』

そして素早く手を動かして彼の黒い縮髪を掻き亂して、彼女は大急ぎで珈琲店から出て行つた。

八

翌日の月曜日、朝の九時頃、前主マダム・シャイベス、今はエンマ・エドゥワルドヴナ。ティツネルの家人は皆馬車に乗つて市の中央にある屍體收容所へ出掛けた。——皆と云つても先見の明のある経験に富んだヘンリエッタと臆病な鈍感なニンカと低能なパーシャとは別であつた。パーシャはこれでもう二日間寢床から起上らず、黙つてゐて、彼女に對する間に向つては氣の好い薄馬鹿な微笑と何だか漠然とした腹の底でむにや／＼云ふ聲で答へた。若し食事をやらなければやらないで別に要求もしないし、持つて来てやれば貪慾さ

うに鷲握みで食つた。彼女は大變だらしくまた忘れつぽくなつたので、不仕末をしないため用達しに行くことさへも注意してやらなければならなかつた。エンマ・エドゥワルドヴナは毎日遣つて来てパーシャをよぶ常客のところへもパーシャを出さなかつた。彼女には以前にもこんな茫とした自己喪失の時期はあつたが、しかし長くは續かなかつたので、エンマ・エドゥワルドヴナは兎に角癒るまで待つことに極めた。何しろパーシャは家にとつては眞の寶庫であり、また實際に於ては家の怖ろしい犠牲であつた。

屍體收容所は窓や扉の廻りに白い枠の入つた、鼠色の細長い建物であつた。外から見たところでは低い、壓しつけられた、地面の中に消入りさうな、殆ど胸の詰るやうな感じのものがあつた。女達は一人一人と門口に立停まり、おど／＼と庭を通抜けて、庭の彼向の隅にある、同じやうな鼠色に白枠のある棺室の方に入つて行つた。

扉は鎖まつてゐた。番人を呼びに行かなければならなかつた。タマールはやつとのこととで禿頭の爺さんを見付けた。爺は沼の苔のやうなむしや／＼の灰色の剛い髯が生え、小さな涙ぐんだ眼、饅頭のやうな形をした大きな中高なかたかの紫色の鼻をしてゐた。

彼は大きな南京錠を外づし、門を抜いて、錆びた扉をぎつと開いた。冷たい濕つた空氣

五五六
が石造の内部の濕氣や抹香や屍骸の腐れかゝつた臭などと混つた匂がぶんと女達の鼻を打つた。女達はおどくくと一團りに押合つて尻込みした。唯タマラばかりは躊躇はずに番人の後に跟いて行つた。

棺室は殆ど眞暗なつた。秋の日さしは格子の嵌つたまるで牢獄の窓のやうな狭い窓を通してかすかに差込んでゐた。金飾のない聖像が二つ三つ薄ぼんやりと見別けもつかずに壁にかゝつてゐた。普通の木の棺が數個すぐ床の上に木の輿の上に乗つてゐた。眞中にある一つは空で、開けた蓋が並んで轉がつてゐた。

『あんたのはどんなのかな』と番人は皺唄れ聲で訊ねて煙草を喫いだ。顔を見ればお解りかどうぢやな』

『解つてよ』

『ぢや御覽な。あんたにみんな見せてあけるからの。これかな』

そして彼はまだ釘の打つてない一つの棺の蓋を取つた。其處には水氣の來た青い顔をした皺苦茶の老婆がどうやらかうやら檻褸にくるまつて横はつてゐた。左の眼は瞑ぢてゐたが、右の方はもう光澤のなくなつた店曝らしの雲母のやうなのが、凝と怖ろしく見張つて

ゐた。

『これぢやないと仰有るかな。では御覽、こいつはどうぢやな』と番人は云つて、蓋を取りながら次へ次へと死人を見せて呉れた。——たしかに皆貧乏人で、路上に倒れてゐるのを拾上げられた、飲だくれや押潰された者や手のなくなつた者足のなくなつた者などでも腐れかゝつた奴ばかりであつた。或者には手や顔に黴に似た青黒い斑點が生じてゐた——それは腐敗の徴候であつた。鼻のない、兎のやうに三口の或男などは腫物で潰れた顔の上に小さな白點のやうに蛆虫が蠢動めてゐた。水腫で死んだ女は蓋を突張りながら板の臥床の上に山のやうに高くなつてゐた。

どれも皆解剖後すぐ髯爺の番人やその仲間によつて縫つて元通りにし、洗はれたのであつた。時には腦髓が胃の腑に來やうと頭蓋骨がビスケツトで一杯になつてやうとそんなことは彼等には一向お構ひなしで、べた／＼した膏藥で頭と亂暴に喰付けておいた。番人達はその惡夢のやうな、本統とも思はれない、惡酔ひの一生涯のうちに万事に慣れるのであつた。而も都合よく彼等の無言の顧客の處へは殆ど親戚の者も知人も遣つて來なかつた。死屍の重苦しい臭氣、濃厚な飽滿したやうなべた／＼した臭氣——タマラにはそれが

まるで膠のやうに毛孔を皆蓋してしまふやうに思はれたのが——棺室に充ちてゐた。

「ねえ、お爺さん」とタマミラは訊ねた『始終私の足の下でぶつくするの何でせう』

「ぶつくするんかな」と番人は訊ね返して頭を梳いて『そりや屹度虱ぢや』と平氣で答へた『死にかけた人の身體にはそりやひどく涌くんぢやからの。あんたの捜すのは男か女かな』

「女ですよ」とタマミラが答へた。

『でこんなのはどれも違ふんぢやな』

「ええ、みな他所の人よ』

『さうかな。ぢや屍體室へ行かなくちやならんかの。連れて來たのは何時ぢやな』

「土曜日の、お爺さん」と云つてタマミラは財布を取り出し『土曜日の晝よ、さあ、お爺さん、煙卓でもお買ひ』

「濟みませんな。土曜日の晝。どんな着物かな』

「なにまるで何もなしよ、寢間着に下着の裳裾……白ものづくめでね』

『はて、二百七十七號に違ひない、名前は』

『スサンナ・ライツイナ』

『行つて見て來やう、多分それぢや。姐さん』と彼は扉口でぼんやり押合つて光線を遮つてゐる女達に向つて『誰が元氣かな。一昨日來たんぢや、今は神様か創つて下さつたまゝの形で——何もなしで——臥てゐるんぢやが……さあ、誰が元氣を出すかな。誰が二人行くかな。着物を着せなくちやならんからの……』

『お前行つておくれよ、マーニカ』とタマミラは朋輩に云つた。マーニカは恐怖と嫌惡との餘り冷たくなつて、眼をぱつちり開けて死人を眺めてゐたのであつた『恐かあないよ、馬鹿ね、私も一緒に行くもの。お前さんでなくて誰が行けるものかね』

『私がその？ 私がその……』と白いマーニカは唇も動かし兼ねて云つた『行きませう、どうでも好いわ……』

屍體室は同じ此處で棺室の彼方にあつた——低いもう眞暗な地下室で、其處へ行くのは六段の階段を降りなければならなかつた。

番人は何處かへ飛んで行つて、蠟燭の餘燼とぼろ／＼の帳簿とを持つて來た。彼が蠟燭に火を點もすと、直に石床の上に正しい列を作つて横はつてゐる二十ばかりの屍體が女の

眼に入つた。——ふんぞり返つて黄いろくなつて居り、斷末魔の痙攣のために顔の引きつったのや、頭の鉢の破れたのや、顔に血のこびりついたのや、齒を露き出したのなどがあつた。

『只今……只今……』と番人は帳簿の欄を指しながら云つた『一昨日……それぢや土曜日……土曜日……苗字は』

『ライツィナです、スサンナですよ』とタマーラは答へた。

『ライツィナ スサンナ……』と番人はまるで歌でもうたふやうに『ライツィナ スサンナ。これだこれだ。二百十七號』

死人の上に身を屈め、融けて流れる蠟燭の火で照らしながら、彼は次から次へと見て歩いた。到頭ある屍體の側に立止まつたが、その足の下にはインキで大きな黒文字で「BIL」と書いてあつた。

『これがさうぢや。さあ、わしが廊下まで運出して、衣物をとつて来てあげやう。お待ちな』

彼はうんと呻つて、しかし彼の年齢としにしては驚くほど軽々と、足を扼んでチェーニカの屍

體を持ち上げ、頭を下にして背中に擔いだ。その恰好はまるで獸肉か馬鈴薯入りの袋のやうであつた。

廊下は多少とも明るかつた。それで番人が怖ろしい荷物を床の上に降ろした時、タマーラは一瞬間手で顔を掩つた。マーニカは顔を外向けて泣き出した。

『若し何か御用があれば言つて下さい』と番人が注意した『儀式万端をお揃へになるつもりなら何でも有ります——錦欄・花輪・聖像・經帷子、モスリン——何でも手前の方にあります。お召物も買へますし……履物も……』

タマーラは彼に錢を遣り、自分より一步先きにマーニカを歩かして戸外に出た。

暫時を経て二個の花輪が遣つて來た。一個はタマーラからので、紫苑とだりやの花とで出來て居り、白いリボンに黒い字で『チェーニャへ 友より』と記してあつた。今一個はリヤザノフからので、全體赤い花から出來て居り、赤いリボンに金文字で『苦みもて潔められむ』とあつた。その外彼から短かい書面も來て、それには悔みの言葉だの、據所よんごころない職務上の會見があつて來られない謝罪ことわだのが書いてあつた。

それからタマーラに招聘された唱歌團が来た。それは十五人からなつてゐて、市街で第一流の唱歌團からの選り抜きであつた。

鼠色の外套に鼠色の帽子、まるで埃を浴びたやうな鼠色づくめだか、口髭だけは軍人のやうに長くびんとした首唱はヴェーラに氣が付いて、大きな吃驚した眼をし、一寸莞爾して彼女に目睫した。彼は月に二三回、時にはもつと屢、知合の神學生や、彼と同じやうな首唱仲間や、聖詩唱詠者と一緒に、ヤーマ街を訪問し、例によつて娼家中を家並にひやかした擧句、何時もアンナ・マルコーヴナ樓で納まつて、きまつてヴェールカを呼ぶのであつた。

彼は陽氣なこせくした男で興に乗つて一生懸命に舞踏をやつた。そして舞踏の際には其場の者が可笑しさの餘り虫唾が走るほどの恰好をするのであつた。

唱歌團に續いてはタマーラが備入れた白い羽毛飾のついた黒い二頭立の葬籠、それに附隨する五人の炬火持がやつて来た。彼等は錦欄の白い棺と黒布を張つたその臺とを運んで来た。急かずに慣れた巧妙な手付で佛を棺に納め、その顔にモスリンをかけ、屍を錦欄で蔽ひ、蠟燭を枕邊に一本足許に二本點もした。

今、ゆらくした黄いろい蠟燭の火に照らされて、チエーニカの顔は一層ありくと見えるやうになつた。此處彼處額や鼻や眉間にいろくな色の不揃ひなみみずなりの斑點が残つてゐるばかりで、紫色は殆ど顔から消えた。開いた暗色の唇の間から幽かに白い齒が光り、嚙んだ舌の尖端が見えてゐた。古い羊皮紙のやうな色になつた頸筋の開いた胸元から二本の條が見えてゐた。黒くなつた方は繩の痕で、赤い方はシメオンと摺合の際に蒙つた搔傷の痕で、恰度二本の頸飾と云つた恰好であつた。タマーラは傍に近づいてイギリス留針で直ぐ傾許に襟のレース飾を留めた。

僧侶が来た。金縁眼鏡をかけ僧帽を被つた小柄な白髪の僧侶と、病的な變に暗い黄いろいまるで赤土焼にあるやうな顔の背の高い薄髪の司祭と、歩きながら知合の唱歌團の者と何だか陽氣な不思議な合圖を活々と交換してゐる裾を長く引いた捷つこい聖歌唱詠者とであつた。

タマーラは僧侶の方に近づいた。

『和尚様』と彼女は訊ねた『どの様にお唱へ下さいますでせうか。皆一緒にでございますか、それとも別々に？』

『皆を一齊にお葬らひませう』と僧侶は聖衣に接吻け、その隙間から髻や毛髪を出しながら答へた『それが普通ですぢや。しかし特別にお好みで特別に御相談の上で別々にも出れます。佛はどんな死方をなされたかな』

『自殺ですの、和尚様』

『ふむ……自殺かな。だが寺院法では自殺者にお葬ひは法度ぢや、禁制ぢやが御存じかの。尤も例外はありますぢや、特別の請願での……』

『此處にね、和尚様、私は警察とお醫者様の證明書を持つて居ります。あの娘は正氣ぢやなかつたのですの……嚇つと取逆上せてね……』

タマラは前夜リヤザノフが送つて呉れた二枚の書類と、その上に十留紙幣を三枚乗せて僧侶に差出した『どうか、和尚様、万事正式に——基督教通り。あの娘は立派な人間で随分苦勞もいたしましたわ。どうぞ御面倒ながらお墓へもお送り下さいまして、其處でまたお經を……』

『墓までお送りしてもよろしいがの、墓でお經をあげることは出来ませんぢや、それにはその役があつての。またそれからの、わしはも一度残りの佛達のため歸つて来なけりや

ならんから、そこでその……もう一枚割増してほしいものぢやな』

そこでタマラの手から金銭を受取つて、僧侶は聖詩唱詠者の渡した香爐を祝福し、女の遺骸を焼香して廻りはじめた。それから女の枕元に立停まつて、靜かな、惰性的に悲しげな聲で唱へた。

『吾等の神は何時も、今日も、永遠に頌むべきかな』

聖詩唱詠者は『聖なる神』『聖三位一體』『吾等の父』などを豌豆まめでも撒りまくやうにばら／＼とやつてのけた。

靜かに、恰かも何か深い悲しい隠れた秘密をさぐるかのやうに、唱歌團は早口な甘い唱詠を始めた『救主よ、汝の奴隷の靈魂を休ませ、樂しき生命に入らせ給へ』

聖詩唱詠者が蠟燭を配つた。すると蠟燭は次へ次へと暖かな柔らかな活々した光が重い濁つた空氣のうちに點もされて、優しく透き通るやうに女の顔を照らした。

悲しい調べがよく調和して流れ、恰度悲める天使の溜息のやうに偉大な言葉が響いた。

『神よ、汝の奴隷の靈魂を休ませ、聖徒のむれ星の如く輝ける御國に導きたまへ。その犯せる諸々の罪を許して、逝ける汝の奴隷を休ませ給へ』

タマーラはその昔聞きなれた、然しもう長い間耳にしない言葉に聞き入つて、痛ましく微笑んだ。彼女はヂェーニカの熱した物狂はしい言葉、通れる術のない絶望と不信に満ちた言葉を思出した。恩恵深き慈愛の神は彼女の汚ない臭いひねくれた穢れた生活を許したまふか許し給はぬであらうか。總てを知ろしめす神——汝は本統に彼女を棄て給ふか——この哀れな背信者、強ひられた淫蕩の女、美はしき聖き汝の御名に冒瀆の言を吐いた子供を？ 汝は善である、汝は吾等の慰めである！

微かな抑へた啜泣きが忽ち絶叫と變つて棺室に響いた『おゝ、ヂェーネチカ』これは白いマーニカが跪いて手巾で口を押さへながら、涙に咽ぶのであつた。すると残餘の朋輩も彼女に續いて同じく跪いて、棺室は溜息や耐えた慟哭や嗚咽で充たされた。

『汝獨り不死にして人は土より創られたれば土に歸るなり』
タマーラは唸しいまるで化石したやうな顔をして動かずに立つてゐた。蠟燭の光は細い黄金の螺旋状をして、彼女の赤銅のやうな栗色の頭髮の中に光つてゐた。が眼はタマーラのゐる場所から見えるヂェーニカの濕るんだ黄いろい額や鼻の尖端の輪廓から離れなかつた。

——土より創られたれば土に歸る——と彼女は歌の文句を脳裡で繰返した。——本統になるばりで他には何もないんだらうか。それなら何方どこが好いか、無に歸するのと、せめて何物か、例令最も劣つたものであつても、此世に存在してさへ居られるの？

ところが唱歌團は彼女の考へを確めるやうに、彼女の最後の慰安を奪ふかのやうに、上げなく云ふのであつた。

『此處に總ての人は行くなり』

『永遠とこしほの記憶』のお唱へが濟み、蠟燭が消されて、紫の煙の流れは香かうのため青くなつた空氣の中に擴がつた。僧侶は告別の祈禱を唱へ終つて、それから皆の黙つてゐる眼前で、聖詩唱詠者の渡したショベルで砂を掬つて、モスリンの上から遺骸へ十字形に撒りまいた。そしてそれと共に彼は『神の土その世界と其處に住める總ての者』と云ふ神秘的な世界の法則の避くべからざる峻嚴な悲しいことに充ちたこの偉大な言葉を唱へた。

墓まで女達は自分の死んだ朋輩を見送つて行つた。其處へ行く路は恰度ヤーマ街の入口を横切つてゐた。其處から左に折れて行くことも出来、その方が殆ど倍も近いのであるが普通ヤーマ街に死人を引込むやうなことはしなかつた。

それでも殆どどの戸口からも抱女達が辻へ飛出した。上靴に素足、麻襦袢、頭巾と云つたやうな着のみ着のまゝであつた。彼等は十字を切つたり、溜息をしたり、手巾や着物の端で眼を拭いたりした。

空はからりと晴れてゐた。冷たい太陽は青いエナメル色に輝やいた空からきら／＼と照つた。残りの草が青くなつて居り、木の上に枯葉が黄いろくなつたり薔薇色になつたり紅になつたりしてゐた。水晶のやうに澄んだ冷たい大氣の中に『聖なる神よ、強き神、不死の神よ、吾等を憐みたまへ』と調和した音が嚴かに壯重に悲しく響いた。そして何と云ふ熱い何によつても満たされない生の渴望、夢のやうに儚ない瞬間の生の歡喜と美に對する何と云ふ憧憬、死の永遠の沈黙に面した何と云ふ恐怖をもつて、ダマスコヨハネ約翰の古調が響いたことぞ！

それから墓前の祈禱につゞいて、棺の蓋を打つ鈍い土の響……生々しい小丘……

『さあもうお仕舞ですわ』とタマールは女達ばかり取残された時朋輩に云つた『ねえ皆さん、一時間後と一時間前と……私はデューニカが可哀想ですわ！ほんとうに可哀想ですわ！あんな人はもう二人とありませんものね。それにしても穴の中あの娘は今の私達

よりずつと結構ですわ……さあ最後の十字を切つた上で、家へ歸りませう』

そして女達が皆家に近づいた時分、タマールは突然考へ込んだやうに變な氣味の悪い言葉を話した。

『あの娘があないで私達が一緒にゐるのもう長い間ではありませんよ。直ぐに皆風の儘に散らばつて仕舞ひます。人生の面白さ……御覽なさい、彼方に太陽が、青空が……空氣はほんとうに奇麗だし……蜘蛛の糸が飛んでゐる——夏も末ですわね……世中は何と云ふ結構なことせう。それに私達——勤めの身——だけはまるで路傍みちばたの屑です』

女達は家路に進んだ。ところが突然何處か横合から、記念碑の背後から、背の高い頑丈な學生が出て來た。彼はリューブカに追つて、靜かにその袖に觸わつた。彼女は振向いてソロヴィヨフを認めた。彼女の顔は忽ち蒼ざめて、眼は擴大し、唇は震へた。

『歸んなさい！』と彼女は無限の嫌惡を帯びて靜かに云つた。

『リューブカ……リューブカ』とソロヴィヨフは呟いた『僕は君を捜してゐたんだよ、捜してゐたんだよ……僕は本統にあんなリホーニとは違ふ。僕は潔白な心で……今直ぐでも……今日にでも……』

『歸んなさい！』とリューブカは更に靜かに云つた。

『僕は眞劍に……僕は眞劍に……僕は冗談半分ぢやない、僕は結婚を……』

『まあ、畜生！』とリューブカは俄かに金切聲を上げて、素早くしつかり男のやうに平手でソロヴィヨフの頬を殴つた。

ソロヴィヨフは少しよろめいて暫らく立止つてゐた。彼の眼は苦行者のそののやうであつた。口は半ば開いて、兩端に悲しげな褶をよせてゐた。

『歸んなさい！ 歸んなさい！ あんた方は誰も見ることが出来ません』とリューブカは氣狂のやうに叫んだ『人殺しです！ 豚です！』

ソロヴィヨフは不意に掌で顔を掩うて、くるりと振反り、まるで酔拂ひのやうに路も分たず曖昧な足どりで後に戻つた。

九

實際タマーラの言葉は豫言となつた。ヂューニヤの葬式の日から二週間も経たなかつたが、この短かい期間にエンマ・エドゥワルドヴナ樓の上には丸五年間にも起らないほどの

種々の事件が湧上つた。

翌日不幸なパーシユカを慈惠院——精神病院——に送ることになつた。彼女は到頭癡呆に陥つたのであつた。醫者の話では彼女が何時か恢復するかどうかと云ふやうなことは全く絶望とのことであつた。實際彼女は病院の床上の藁蒲團に寝かされたまゝ、死ぬ間際まで起上らず、沈鬱性癡呆の暗黒な底知れぬ深淵に愈ます／＼沈んでゐたが纔か半年経つて褥瘡と血液傳染のため死んだ。

次はタマーラの番であつた。

半月ばかり彼女は鴉母の職務を勤めた。始終非常に身軽く立廻つて、精力家で、また彼女の胸裡を強く往來して居る何か内的な或物のため弾機仕掛で弾かれたやうな風であつた。或晩ふと姿を消すとゝもに、再び娼家へ戻つて來なかつた……

事の次第は斯うである。彼女には街に於て或る公證人——盛を過ぎた、可成金持の、しかし頗るあたじけない男との長い間の艶聞があつた。二人の仲が結ばれたのはまだ一年前のことで、郊外の僧院に行くのに偶然一緒に汽船に乗合はして話相手になつた時であつた。賢い美しいタマーラ、その謎のやうな淫蕩な微笑、その面白い話、温順しい身の舉

動などが公證人の心を捉へた。その時彼女は美事な白髪交りの旦那風の、昔の法律家で善良な家庭の人である。この中老の人に目星を付けた。彼女は男に自分の職業のことを話さなかつた——彼女には寧ろそれを神秘化して置くのが氣に適つたのである。彼女はほんの漠然と僅かの言葉のうちに、自分は中流社會の已婚婦人であるが家庭が面白く行かない、その理由は自分の夫が賭博好きで専制君主であることや、而も運命のため子供と云ふやうな慰安さへも奪はれてゐることなどを仄めかした。別れに際して彼女は公證人と一夜を明かすことを拒絶し、彼と遭ふことを欲しなかつたが、その代りには郵便局留置で手紙を呉れることを許した。二人の間には手紙の往復が始まり、それに於て公證人はポール・ブルデムの主人公にも相應はしい文句や熱情を見せびらかした。彼女は矢張同じ内緒な秘密な調子を保つてゐた。

其後公證人の逢引の歎願に感動して、クニヤジ公園で出會ふ約束をし、其際も可憐で聰明で翳々してゐたが、何處かへ出掛けやうと云ふ申出は斥けた。

このやうにして彼女は自分の崇拜者を苦め、其男の裡に老年の戀——時とすると初戀よりも強くして危険である最後の情火を巧みに燃立たせた。到頭最後に、この夏、公證人の

家族が外國へ旅行に行つた時、彼女は思切つて男の家を訪れ、此處に於て涙と良心の苛責と、それと同時に哀れな公證人が無我夢中になつた程の熱烈な優さをもつて、初めて男に身を委した。男は最早分別もなければ顧慮もない老年の戀人をして最後のもの——滑稽に見えるると云ふ心配——をさへ失はしめる老年の戀に没頭して仕舞つた。

タマールは逢引を許すこと極めて吝かであつた。このことは性急な對手を一層やきやきさせた。彼女は男から花束だの、郊外のレストーランドの些かな晝食だのを甘受したけれども、貴重な贈物は總て當惑したやうに拒絶し、公證人が金銭を呈供しようとし得なかつた程巧みに上品にその身を持した。ある時彼が別宅のことや其他の世帯道具のことを仄めかした時、彼女は生眞面目な顔をして凝と傲然と男の眼を見詰めたので、男はその美事な白髪の中で少年のやうに赤くなつて、しどろもどろの謝罪を囁きながら、彼女の手に接吻した。

かくしてタマールは彼を翻弄し、自分の足下にいよく地盤を固めて行つた。彼女はもう今は何時如何なる日に公證人の家に於て特に莫大なる金が耐火金庫に納められるかと云ふことを知つてゐた。然しながら彼女は不手際のためや機熟さゝるため失敗することを恐れ

て、急がなかつた。

五七四

ところが今や恰度久しく待ちに待つた時期が到来した。大きな契約市場が終るや否や、總ての公證役場は毎日莫大な金額の取引を行つた。彼の公證人が日曜日には全く自由であるために、通常土曜日毎に抵當金やその他の金を銀行に持つて行くことをタマールは知つてゐた。そのためか公證人は金曜日の晝にタマールから次の手紙を受取つた。

『愛する君、尊敬するソロモン王の君よ、御身のスラムフ、葡萄園より來れる娘は御身に熱き接吻もて御挨拶申し上げます。愛する君よ、今日妾は休日で限りなく幸福でございます。今日妾はあなた様同様暇でございます。あの人は用事のため泊りがけでホームへ行きました。それで妾は今日あなた様のお宅で一夜明かしたう存じます。あゝわが愛する君よ、妾は一生でもあなた様の前に跪いて暮します。何處へも行きたくはございません。妾には郊外の料理店やカフェシャンタンがもう飽々して居ります。妾の欲するのはあなた様……あなた様ばかり……あなた様……あなた様ひとりでございます。晩の十時か十一時頃妾をお待ち下さいませ。澤山冷たい白葡萄酒と甜瓜と蜜栗を用意して置いて下さいませ。妾は燃ゆる思ひに死にさうです。妾があなた様には嘸うるさからうと思は

れます。妾は待つことが出来ません。眩暈がして顔が火熱つて手は氷のやうに冷たうございます。抱擁申し上げます。御身のワレンティナより』

その夜十一時頃、彼女は男の獨特な金銭上の虚榮心を利用して、耐火金庫を見せて呉れるやうな話に公證人を釣り込んだ。棚や曳出に素早く眼を走らせて、タマールは巧みに欠伸をしながら、身を振向いて云つた。

『おや、厭なこと』

そして両手で公證人の頭を抱へて、熱い息で焼付けながら恰度口許に囁いた。

『ねえあなた、あんな厭なもの仕舞つて頂戴。行きませう、行きませう』

そして先に立つて食堂へ行つた。

『此方へ被居い、ウ・ロージヤ』と彼女は其處から叫んだ『被居いね、早く。わたし葡萄酒が欲しいの、それから愛を、愛を、涯ない愛を。いゝえ、どん底まですつかりお飲みなさいね。恰度今日私達がどん底まで私達の愛を飲乾すやうに』

公證人は彼女と衝杯して、自分の盞を一息に飲乾した。それから唇をもぐぐさせて云つた。

『變だな……今日の葡萄酒は何だか澁いよ』

『さうね』とタマーラは合槌を打つて注意深く戀人を眺めた『この葡萄酒は何時も一寸澁味がありますのね。これがライン葡萄酒の性質（たぢ）でせうよ』

『でも今日は殊更に強いね』と公證人は云つた『いや、有難うよ、もう澤山だ』

五分間経つと、彼は椅子に坐つたまゝ、頭を椅子の凭れに投げかけ、下顎をだらりと垂れて眠込んだ。タマーラは暫らく待つて彼を覺まさうとした。彼は動かなかつた。その時彼女は火の點つた蠟燭をとつて、街に面してゐる窓の闕の上に置き、玄關に出て行つて、階段に密やかな足音聞えるまで、耳を欹てゝゐた。殆ど音もしないですうと彼女は戸を開いて、まづたく紳士の服装をし手に新しい革靴を提げてゐるセーニカを内に入れた。

『用意は好いかい』と盜賊は小聲で訊ねた。

『寢てゐるよ』とタマーラは同じやうにそつと答へた『氣をお付けよ、そら鍵を』

彼等と一緒に書齋に通つて耐火金庫の方へ行つた。手提燈の助をかりて錠前を調べて、セーニカは小聲で毒吐いた。

『何のこつたい、老耄畜生！ 案の定秘密錠だ。符謀が解らなくちや駄目だよ……電氣で

焼切るにしても随分時間がかゝらあね』

『好いよ』とタマーラは急いで答へた『私が符謀を知つてるよ……盗見して置いたから。搜して御覽、*S. o. H. i. t* 最後の『なしで』』

十分間経つと彼等は二人連れで階段を降り、故意といくつもの街を曲りくねりして、舊街になつて始めて停車場まで馬車をやとひ、貴族スタヴニツキイ地主夫妻と云ふ一點の批の打ち所もない旅券をもつて、市街から立去つた。彼等に就いては長い間何の消息もなかつたが、一年経つて、セーニカがモスクワで大竊盜をやつて捉まり、審問されてタマーラのことも白状した。二人は裁判されて禁錮に處せられた。

タマーラに次いでは無邪氣な、人の口に乗り易い、惚つぽいヴェールカの番であつた。彼女は陸軍省の文官と自稱する半軍人の男に大分前から惚込んでゐた。男の名はディレクトルススキーと云つた。二人の関係ではヴェールカの方が信心家で、男の方は勿體ぶつた偶像のやうに懇慫に彼女の禮拜や供物を受けてゐた。ところがまだ夏の末頃から、男が段々冷淡に無關心になつて來て、彼女と話をしても頭腦は何處か遠い遠い處にゐるのに、ヴェールカは氣付いた。彼女は煩悶し、嫉妬し、根掘り葉掘りして訊ねたが、何時も返事に

は何だかあやふやな文句、間もなく來らんとする不幸や非業の死に對する不吉な仄めかしがあるばかりであつた。

九月の初め頭彼が白狀したところによると、彼は三千程とか何かの巨額な官金を消費し、五日ばかりもすると検閲があるので、恥辱、裁判、果ては懲役が彼ディレクトルスキの身に降りかゝつてゐるのであつた。此處に至つて陸軍省の文官は頭を扼んで慟哭し始めて叫んだ。

『お袋が可哀想だ！どうなるだらう。お袋はこんな恥を辛棒し切れない……いや、罪もない人にこんな地獄の苦痛をかけるよりは死んだ方が幾層倍ましだ』

彼は何時もの通り大道小説の科白せうはくで云つたのであるが（尤も主としてそれが人の口に乗り易いヴェールカの氣に適るのであつた）自殺と云ふ芝居めいた考は一度涌いて來て以來、彼の頭腦から離れなかつた。

ふとした晝間彼はヴェールカとクニヤジ公園を長い間散歩して居た。秋が來てもうひどく疎らになつたこの美しい公園は、眞紅、紫、レモン色、橙色、濃い櫻色と云つたやうな古い良い葡萄酒の色をした、種々な色の葉の壯麗な色合できらく輝やいてゐた。そし

て冷たい空氣が貴重な葡萄酒のやうに香つてゐるかと思はれた。それでも矢張り死の幽かな記號しごし、優しい薫りは繁みから、草から、樹から漂うてゐた。

ディレクトルスキーは女々しく感傷的になつて泣き出した。それと一緒にヴェールカも泣いた。

『今日俺は自殺する』とディレクトルスキーが到頭云つた『おさらばだ』

『あなた、好けませんわ。あなた、好けませんわ』

『いや』とディレクトルスキーは陰鬱に答へた『呪ふべき金よ。名譽と生命と何方が貴い？』

『まああなた……』

『言つて呉れるな、言つて呉れるな、アネータ（彼は何故だか平俗なヴェールカと云ふ名前よりは彼自身が思付いた貴族的なアネータと云ふ名前を好んで用ひた）言つて呉れるな。さう極めたんだ』

『ああ、私でもお役に立てばね』とヴェールカは悲しげに叫んだ『私は命でも差上げますのに、血のある限りでも！』

『何生命を?』とディレクトルスキーは俳優めいた悲歎を帯びて頭を振つた『さらばよ、アネータ、さらばよ』

三六〇

女は絶望したやうに頭を振つた。

『厭です、厭です、厭です。私も連れて下さい。御一緒に』

夜遅くディレクトルスキーは立派な旅館の部屋を借りた。数時間、若しくは数分後に彼は彼もヴェールカも死骸となることを知つてゐた。それで彼のポケットには皆で十一哥きりしかなくなつたけれども、慣れた本統の遊蕩兒のやうに鷹揚に構へてゐた。彼は鱒鮫スープ、鵝、菓物、その上に珈琲、リキユール酒、氷で冷やした三鞭酒二本を誂らへた。彼は本気で短銃自殺する積りでゐたが、それでゐてまるで側面から自分の悲劇的役割を見物するやうな、また親族の悲歎や同僚の驚きを豫め楽しむやうな、何だか冗談半分に考へてゐた。ところがヴェールカは情人と一緒に自殺すると突然言ひ出したと同じやうに一遍にこの考を固めた。そしてヴェールカにとつては來らんとする死の裡に何等恐るべきものがなかつた。

『なあに、垣根に野倒れ死するよりは好いちやないか。可愛い人と一緒なら。少くとも樂

しい死だわ』そして彼女は猛烈にこの官吏に接吻して笑つた。亂れた縮れ髪、輝やいた眼をしてゐると何時になく美しくかつた。

到頭最後の嚴肅な瞬間が來た。

『俺達はお互に享樂した、アネータよ……盞を底まで飲乾した、其處で今は、ブーシユキンの言葉を借りて云へば、盞を碎くべき時なのだ』とディレクトルスキーは云つた『お前は後悔しないかね』

『いゝえ、いゝえ』

『覺悟は好いか』

『えゝ』と彼女は囁いて莞爾した。

『ぢや壁の方を向いて顔をお隠し』

『いゝえ、いゝえ、あなた、そんなことは厭です。厭です。私の傍へ被居い。それかうして。もつと近く、もつと近く。眼を此方へ頂戴。私はそれを見てゐます。唇を私に頂戴。私は接吻します。があなたは……私は恐くはありませんわ。しつかりしてもつと強く接吻して!』

彼は女を殺した。そして自分の手のした恐ろしい事を眺めた時、俄かに忌はしい言語同斷の卑劣な恐怖を感じた。ヴェールカの半裸の身體はまだ寢床の上にびく／＼してゐた。ディレクトルスキーの足は恐ろしさの餘り屈んで仕舞つた。偽善者、臆病者、卑劣漢の理性は勇を振つた。自分の脇腹の皮を伸ばして弾丸を射込むだけの勇氣はあつたのである。そして彼が苦痛のため、驚愕のため、發射の銃聲のため瘁猛に叫んで倒れた時、ヴェールカの身體には斷末魔の痙攣が走つてゐた。

ヴェールカの死後二週間経つて、無邪氣な可笑がりの温順しい喧嘩屋の白いマーニカも死んだ。ヤームキに有り來りの泣くやら咆くやらの大騒動、大格闘の際、誰かゞ重い空壕で頭を殴つて、彼女を殺した。犯人は分らず仕舞になつた。

かくして瞬く間にヤームキのエンマ・エドウワルドウナ樓では事件續發して、其處の住人は殆ど一人として悲惨な、或は汚れた、或は恥づべき運命を免れなかつた。

最後の、最も大袈裟な、それと同時に最も慘憺たる流血の慘事は、ヤームキに於て兵士達によつて行はれた蹂躪であつた。

二人の龍騎兵が留店で散々ぼられて、叩きのめされて、夜中に街に抛り出された。寸斷

々々血まみれになつて兵營に歸つたが、其處では朋輩が聯隊の祝祭で朝からまだ遊びまはつてゐた。そこで半時間と經たないうちに、百餘の兵士がヤームキに闖入して、家を一軒一軒破壊しはじめた。何處からともなく駆け付けた鑛夫、立ん坊、浮浪人、無頼漢、ごろつきの無數の群がそれに加勢した。どの家でも硝子は碎かれ、ピアノは破はされた。毛蒲團は引破られ、羽毛は街に投出されて、その後尙長い間——二月ばかりも——無數の綿毛が雪片のやうにヤームキの空を飛び舞つてゐた。頭をむき出しの全く裸かの娼婦が街に追出された。三人の門番が死ぬ程叩きのめされた。ツレツペリ樓の絹や天鵞絨の家具はみな振り千切つたり、汚されたり、寸斷々に引裂かれたりした。序でに近所の料理店や銘酒店もみな打破わされた。

軍隊と消防隊とがこの獸化した狂暴な群衆を遂に抑壓し追散らすことが出来るまで約三時間、酔拂つた慘憺たる醜惡な大格闘は續いた。半留店が二軒放火されたが、火事はすぐ消された。しかしながら翌日に至つて騷擾は再び燃上つて、今度は全市街や郊外にまで互つた。ところがそれがまるで思ひがけもなく猶太人殺戮の性質を帯びて、有ゆるその恐怖と災害とともに三日ばかり續いた。

そして一週間経つとヤームキ並に市の他の街々に於ける娼家の即刻閉鎖の總督令がそれ
 についだ。女將達には家財の處置のために僅か一週間の期限が與へられた。
 破壊され、押潰され、掠奪され、以前の立派さの魅力を全く失ひ、滑稽な、みぢめな態
 になつて、老ぼれた凋びた女將や膏ぎつた顔の皺唄れ聲の鴉母は匆々と引拂つた。そして
 一月经つと陽氣なヤーマ街、亂暴な喧嘩好きな、怖ろしいヤームキは唯名のみを止め、
 しかしながらその街の名も間もなく、以前の宥すべからざる時間の記憶をも消すために
 もつと上品な他の名と變更された。

そして此等馬のヘンリエッタ、太つちよのカーチカ、臭猫くまねこのレーリカと云つた此種の女
 達、何時も無邪氣で馬鹿な、しばく感動すべき、興味ある、大抵の場合瞞され賊そになはれた
 子供であるこの女達は大手街に四散し、その中に吸込まれた。彼等からは新らしい階級の
 社會が出来た——街上を徘徊する賣笑婦、辻君なるものがそれである。それらの者の同じ
 くみぢめな馬鹿げた、しかし違つた利害や習慣によつて色づけられた生活に關しては、此
 の小説の著者は何時か再び物して、矢張り世の青年と母人に献ける積りである。

大正九年六月一日印刷 大正九年六月一日發行	魔窟 定價 金 二圓四十錢
譯者 松永信成 發行所 東京市麴町區飯田町一丁目二番地 株式會社 天佑社 電話番町(長) 一一七九番 振替口座東京 〇一二八番	發行者 東京市小石川區諏訪町五番地 日 岐 久 次 郎
印刷者 東京京橋區松屋町二の一 坂本謹四郎	印刷所 東京京橋區松屋町二の一 株式會社 天佑社印刷部